



Tokyo Christian University  
2013

# Christ and the World

## キリストと世界

第23号 2013年3月

東京基督教大学

東京基督教大学紀要

# キリストと世界

Christ and the World

第 23 号

東京基督教大学

Tokyo Christian University

2013 年 3 月

March, 2013

# キリストと世界

## 第23号 目次

柏木義円の教会論 .....	山口陽一	1
キリスト教大学における震災ボランティア活動と宗教心の発達 ミッション系学校におけるサービスラーニングの観点から .....	岡村直樹	23
神学大学による介護福祉士養成の意義 介護福祉士の専門性に必要な教育内容を中心に .....	中澤秀一	48
介護支援専門員に求められる実践能力の研究 II インタビューと事例の分析からの考察 .....	井上貴詞	69
フィリピン語の讚美歌シリーズ Papuri! 及びそのテキストの傾向についての試論 .....	宮脇聡史	97
教会ベースのゴスペルクワイヤ、その現在と未来 アンケート及びインタビュー調査結果から .....	森 恵子	117
要約 .....		135

# Christ and the World

Vol. 23 CONTENTS

Church Theory of Gien KASHIWAGI .....	Yoichi Yamaguchi	1
Earthquake Volunteer Work and Christian Faith Development .....	Naoki Okamura	23
The Significance of Training Care Workers at a Theological University: On the Education Necessary for Care Worker Expertise .....	Hidekazu Nakazawa	48
Competency Needed for Care Managers—Study II : A Consideration Based on Analyses of Interview Surveys and Practical Cases .....	Takashi Inoue	69
Preliminary Analyses of “Papuri !” Praise-and-Worship Series .....	Satoshi Miyawaki	97
Present and Future State of Church-Based Gospel Choirs in Japan: An Analysis of Questionnaires and Interviews Given to Choir Members and Directors .....	Keiko Mori	117
Abstracts .....		135

# 柏木義円の教会論

山口陽一

(東京基督教大学大学院教授)

## 1. はじめに

柏木義円は非戦の牧師として紹介され、傑出した臣民教育批判、自らの属する組合教会の朝鮮伝道批判、昭和期までの軍部批判などにおいて注目されている。彼は37年と10ヶ月安中教会の牧師であり、38年と1ヶ月『上毛教界月報』を発行し続けた。地方教会の牧師として地域に根を下ろしつつ主張は発禁処分を恐れずに貫いた。魂の救いと社会の改良を分離せず神の国のリアリティーを追求する柏木は、安中教会のみならず上毛諸教会との協働に心血を注ぎ、安中を「基督教町ト為シ」「清キ、正シキ、高キ町」とすべく福音の信仰に生きた人である<sup>1</sup>。福音主義にして進歩主義、教会派にして社会派、伝道と祈りに熱心で人権感覚に優れる柏木の全体像は、近年片野真佐子によりほぼ明らかにされている<sup>2</sup>。

柏木には「教会論」と題する晩年の小論があり、そこに彼の教会理解の核心が語られるが、これ自体は「論」というほどのものではない。しかし、彼の論説と牧会に表れる教会は一つの鮮やかな像を結んでおり、それがこの「教会論」に収斂されていると見るならば、それらをも含めて柏木の教会論と評することができるだろう。

柏木は正規の神学教育を受けておらず、安中教会に赴任する37歳まで同志社予備校教師であった。柏木義円研究における画期的な業績を残した伊谷隆一は、柏木が井上円了との論争において残した「愚俗の信」という言葉に注目し、「愚俗」に柏木の思想の特質を捉えた。これに対し鈴木範久は「信」の方に重点を置いて柏木

---

1 大正4年9月19日、11月14日の日記(片野 1988: 131)

2 柏木義円研究は、菅井吉郎や堀川寛一の伝記的著作に始まり、伊谷隆一『非戦の思想』(1967年、紀伊國屋書店)、伊谷編『柏木義円集』(第一巻1970年、第二巻1972年、未来社)を経て、片野真佐子『孤憤のひと柏木義円』(1993年、新教出版社)に結実した。『上毛教界月報』復刻版全12巻(1984年、不二出版)、飯沼二郎・片野真佐子編『柏木義円日記』(1998年、行路社)、片野編『柏木義円日記補遺』(2001年、行路社)、『柏木義円書簡集』(2011年、行路社)により、基本資料はほぼすべて刊行されている。

を理解した。すなわち「愚俗の信」は柏木理解の一つのキーワードなのである。「愚俗の信」を標榜して気を吐いた柏木は、その5年後、同志社予備校の教師として基督共励会の評議員となり『共励雑誌』に論説を発表する。これは神学教育を受けない柏木の牧師然としない素朴な教会論であり、一信徒から牧師へと進む備えの時期の覚悟という意味において「愚俗の信」の教会論とでも言うべきものである。小論では安中教会赴任前の柏木の教会観を明らかにし、その展開を安中教会の牧会と『上毛教界月報』の論説において考察する。

## 2. 新島襄との出会いと回心

柏木が越後国与板の浄土真宗西光寺に長男として生まれたのは1860（万延元）年3月9日、桜田門外の変の6日後のことであった。生後4ヶ月ほどで父徳円は没し、義円は3人の異母姉とともに母やうの手で育てられる。1867（慶応3）年7月2日家督相続。1868（明治元）年、与板は戊辰戦争の戦場と化し幕府軍と西軍双方に蹂躪される。1871（明治4）年の廃藩置県を前に母よりは士分待遇を放棄し生活は困窮する。1874（明治7）年、漢学者で後の東京帝国大学教授星野恒が塾長を務める水原の広業館に入塾。星野の上京により1年ほどで塾は閉鎖、明治7年創設の官立新潟師範学校に転じるが、1877（明治10）年に至りこれも閉鎖、東京師範学校に移り1878（明治11）年、小学部師範科卒業（席次2番）、同年10月、群馬県碓氷郡の土塩村に小学校校長として就任、乾窓寺を教場とする教師一人の学校であった。この頃までの柏木は、板垣退助の自由に憧れ、福沢諭吉に心酔する明治の青年であり、三つのことを心肝に銘じていたと言う。

「虚言について母が泣いて打擲されたことと、曲亭馬琴の伝を読んで『争気ある友と交わるを好まず』とあるに打たれて爾來主義や道の為には争ふても一身上の事に関しては決して争ふまいと決心したことと、ペスタロジエの伝にて彼が『人を疑ふて不信ならんよりは欺かるゝに若かず』と曰つた言」<sup>3</sup>

この柏木に回心の時が訪れる。安中教会の信徒で土塩村の戸長荻原州平を通して海老名弾正、蔵原惟郭と出会い『天道溯原』を読み、1880（明治13）年に同志社英学校に入学して新島襄に師事する。しかし、聖書の奇跡に疑問を感じたまま翌年中退、1882（明治15）年には細野東小学校校長となり、1883（明治16）年11月4日、

---

3 「太田先生を送る」『上毛教界月報』346号、1927年9月20日（復刻版第8巻、p. 562）

安中教会の聖餐式でその時を迎える。

その日、聖餐のパンを持って柏木の前に立ったのは宮口二郎執事だった。彼は「其れに堪へません」と言って辞した。聖餐式は柏木を残して進められたが、説教においては何の感銘も与えなかった海老名弾正牧師の最後の祈祷に「今此処に居る人の中で未だ此の聖式に与ることができない者があるならば、次の此式迄には与ることが出来るやうに」という言葉があった。柏木は、図らずも此の祈りに同じたと思った。その瞬間、「不思議！此時一大力が入り来て予の心を動かしたかの如く感じて今迄東を向いて居た者が西を向いた如く自分乍ら自分の心の変化に驚いた。神は最早思索の神でなくて現前實在の神となつた」<sup>4</sup>

鈴木範久は柏木の「井上円了君仏教新論第一編ヲ讀ム」から、彼の信仰を如実に示す言葉として「宗教ノ要亦唯心靈ノ生命ト神トノ實際ノ關係ニアリ」を抽出し、「この実在者とのリアルな関係と、この世的なものからの超越性を見出していることの二点において、柏木の宗教観の大きな特徴をみることができる」としている（鈴木1978: 171）。

回心の報告に対する新島からの祝書が受洗後の柏木に届く。そこには「君は向來面識の人と称す可からず乃ち主に於ける一体一家族の兄弟と云はざる可からず」と認めてあった<sup>5</sup>。回心を経験した柏木は罪赦された神の家族に迎えられたことを新島の書において実感する。ここに実在者とのリアルな関係に入った彼の教会論が萌芽することになる。

ここで仏門に生まれた柏木の仏教観にも簡単にふれておかなければならない。

「仏教に関しては予は其内部に在て聊か其内幕を窺知して居るから、人心改善の実力など殆ど零で、此点に於ては到底基督教の敵でないと思つて居た。其理論的方面では通俗實際の仏教は概ね卑陋なる迷信で、少数学究の仏者は多くは高遠なる空理を弄するのみ、予は仏門に生まれ乍ら多くの敬意を仏教に払はず、寧ろ儒教を崇敬して居た」<sup>6</sup>

柏木は仏門の内実を「卑陋なる迷信」と「高遠なる空理」において知っていた。そこで柏木は、「人心改良の実力」ある宗教としてキリスト教を捉える。この若き日の確信は生涯変わらない。以上、柏木の青年期の人となり、一大転機の内心と神の家族としての教会の自覚を見てきた。

4 「予が回心の顛末」『上毛教界月報』216号、1916年11月15日（復刻版第5巻、p. 558）

5 「先師に対する予が懺悔」『上毛教界月報』227号、1917年10月15日（復刻版第6巻、p. 115）

6 「予が回心の顛末」『上毛教界月報』216号、1916年11月15日（復刻版第5巻、p. 559）

この年の7月25日、与板は大火に見舞われ、柏木は土地を処分する。10月20日付で三島郡長に「地券証御裏書願」を提出し<sup>7</sup>、安中教会における回心の日を挟んで11月26日には再度「地券裏書之儀ニ付誓願」が代理人名義で出されている<sup>8</sup>。翌1884（明治17）年、退路を断った柏木は海老名弾正から受洗し、同志社英学校への再入学を果たす。そして1889（明治22）年に同志社英学校普通科を卒業し、同志社予備校主任に就任した。この間、柏木は新島襄に心酔し、新島も彼を信頼した。1890年1月23日、新島が大磯で召天し、柩が京都七条の駅に着くと700人の学生がこれを担いで自宅に向かった。門をくぐるところで指名され祈禱を捧げたのは柏木だった。葬儀の列には勝海舟の揮毫になる二本の旗が掲げられていた。

「自由教育自治教会両者併行国家万全」

「彼等は世より取らんとす我等は世に与へんと欲す」

柏木は『上毛教界月報』において新島精神を紹介し続ける。たとえば1910年（明治23）1月15日の135号は「新島先生二十週年紀念号」と銘打たれ、教報以外はすべて新島関連の記事で埋め尽くされている。その表紙の通常各教会の礼拝案内を記す欄（後には「本紙の主張」）にはこの二つの言葉を掲げ、前者は新島先生の経綸を表し後者はその精神を表すと記した<sup>9</sup>。柏木が新島から継承したのは人格の尊厳に裏付けられた「自由教育自治教会」という主義あるいは経綸であり、これが柏木の教会論の骨子となる。

新島がいかに柏木を信頼したかはよく知られており、これを詳らかにした武邦保の論考（1985）に加えることはない。新島襄伝の執筆を最適格者として期待された柏木は、新島精神の最も忠実な継承者であった。その新島は明治21年11月の同志社設立旨意において「所謂良心を手腕に運用するの人物を出さん事を勉めたりき」<sup>10</sup>「一国を維持するは、決して二、三英雄の力に非ず。実は一國を組織する教育あり、智識あり、品行ある人民の力に拠らざる可からず。是等の人民は一國の良心とも謂ふ可き人々なり。而して吾人は即ち此の一國の良心とも謂ふ可き人々を養成せんと欲す」と力説した。そして同志社教師としての柏木は「明治二十八年を迎ふ」（『同

7 西光寺文書。土地売買には郡長の裏書が必要とされた。

8 同前、代理人齊藤貞吉は義兄。「福音」などの用語から義円の起草と思われる。

9 柏木はこの二つの言葉を記憶により記しているので記述には細部に違いが見られる。新島自身は前年11月23日付横田安止宛、11月の広津友信（推定）宛、年不明の大久保真次郎（推定）宛の各書簡で、「自由教育、自治教会、両者併行、国家万歳」と記し、これを「畢生之目的」としている。



志社文学』84号, 1895年1月23日)において、「所謂良心を手腕に運用するの人物を出さん事を勉む」とは是れ我が校が天下に公言して自ら其主義を發表せし所にあらずや、と年頭の抱負を述べている。柏木は、一国ないしは社会の良心としての自治教会を追求して行くことになる。

### 3. 「愚俗の信」再考

新島が召された1890(明治23)年の秋、30歳の義円は熊本英学校校長代理に就任、1892(明治25)年奥村禎次郎事件に遭遇する。時あたかも前年の内村不敬事件の燻ぶる折、蔵原惟郭の校長就任式における奥村の祝辞が、博愛主義の教育において「真理の前には予の眼中には校長もなく、生徒もなく、政府もなく、国家もなし、唯真理あるのみ」と述べたことを『九州日日新聞』が無国家主義と報道、松平正直県知事が奥村解雇を命じた。この不当な要求を蔵原、海老名が受け入れようとしたことに柏木は猛然と反論する。

「今回此膝一たび屈せば、我が神聖なる主義を屈する儀に御座候、真理を違勅と宣言されて甘ざる事に相成候(中略)内村君の事件と云ひ、今復此事在り、今にして十分押さへ置かざれば不可なり」<sup>10</sup>

1892年11月5日、『教育時論』に「宗教と教育の関係につき井上哲次郎氏の談話」が掲載されると、柏木は間髪を入れず11月20日の『同志社文学』に「勅語と基督教」を發表する。この早さは群を抜いており、この問題に関する柏木の見解は熊本英学校時代の奥村禎次郎事件を通してすでに定まっていたと見てよい。さらに1900年代の加藤弘之との論争では、国家至上主義を一刀両断にする柏木の論陣は際立つようになる。

「国家は、国家より大なる人大なる思想大なる宗教あるに由て偉大なり。国家より大なる思想を迫害し、国家以下の徒を出すを以て忠君愛国と誤想するが如き教育は、実に国家百年の大計を誤るものと謂ざるを得ざるなり」<sup>11</sup>

柏木は、「人は国家よりも大なる」という思想の出発点をどこまでも崩さない。文明や国家の発展が、人や思想に優先されることをあくまでも拒み、かつそこで弾圧される人や思想に寄り添う立場を取り続けた(山口2005)。

10 「開書」『女学雑誌』304号, 1892年2月13日

11 「加藤文学博士に答ふ—所謂国家主義者の妄謬を排す」(明治33年10月)『柏木義円全集』(一)  
, p. 87

こうした柏木の思想の特徴は、1888（明治21）年4、5月の『同志社文学』に掲載された「井上円了君仏教新論第一篇ヲ読ム」において用いられた「愚俗の信」という言葉によって語られてきた。

「予ハ固ト神学者ニ非ズ、普通一般ノ基督信徒ノミ、愚俗信徒ノ稱ヲ以テ冠昌セラルル敢テ甘受スル所、然レドモ愚俗ノ信決ヲ学者ノ信ニ譲ル所ナキヲ確知スルモノナリ、故ニ此編ヲ草スル、併セテ亦愚俗ノ信ノ為ニ聊カ気ヲ吐カント欲スル意アリ」

伊谷隆一は言う。「私はこの井上円了批判の文を、柏木の生涯を通じての一等のものだと思っている。それはただ、彼が己れを愚俗と断じ、愚俗の信に生きることを言い放つことによって信仰の本質をよくとらえ得ているという程度の意味においてであるが、彼が天下国家を論ずる眼と同時に、『百歩ノ外眼達セズ』『高尚ナル望ミ』を抱かず生きる『愚俗』の眼を併せもつことによって、実ははじめて、いやおうなく日本近代の歴史の深層にのめり込んで行かざるを得なかったのである」（伊谷 1967: 58-59）。

伊谷において柏木の「愚俗の信」は熊本バンドのそれと対比され、日本のプロテスタント教会史における柏木の位置を出色のものたらしめたとされる。

この「愚俗の信」に注目しつつ、「信」の方を再評するのが前述したように鈴木範久である。『明治宗教思潮の研究』の第二章、第四節では、『宗教』による『倫理』の再解釈」として内村鑑三の「霊界」、植村正久の「上帝の道」と共に、柏木の「生命ある実在者」を考察している。鈴木は、同じく「井上円了君仏教新論第一編ヲ読ム」から、柏木の信仰を如実に語る言葉として「宗教ノ要亦唯心靈ノ生命ト神トノ實際ノ関係ニアリ」を抽出し、「この実在者とのリアルな関係と、この世的なものからの超越性を見出していることの二点において柏木の宗教観の大きな特徴をみることができる」という（鈴木 1979: 171）。つまり、柏木においては、井上の「実在」に対する観念的、知的是認に比して体験的把握がなされているというのである。伊谷が「愚俗の信」の「愚俗」に着目し、その大衆性において柏木を捉えたのに対し、鈴木は「信」の方を重視して体験的、超越的信仰を評価した。

柏木の「愚俗の信」については、伊谷の洞察に鈴木の指摘を加えて理解するのが良い。つまり、一人の大衆の信仰の覚悟である。そして柏木のこの時期の教会論は「愚俗の信」の延長線上にある。次にそれを見てみよう。

#### 4. 基督教共励会の『共励雑誌』に見る柏木の教会論

柏木義円は1892(明治25)年2月から1897(明治30)年4月までの5年余、同志社予備校の教師を務めた。1892年1月に奥村禎次郎不敬事件で熊本英学校校長代理を辞してから、安中教会仮牧師に就任する1897年8月までのこの期間に、柏木は結婚し二人の子を授かっている。1892年には井上哲次郎との勅語論争で論陣を張り、1894年7月には日清戦争に際して主戦論を展開した。『同志社文学』に「普通教育論」(第58号,第61号)、「基督教をして単調ならしむる勿れ」(第63号,第66号)、「中等教育に於ける徳育私見」(第68号)などを発表し、教育論議も盛んに行った(片野1993:97-108)。

ただし、ここに紹介する基督教共励会との関わりや、『共励会雑誌』への寄稿についてはこれまで言及されることがない。後に牧師となることを必ずしも想定していなかった同志社予備校教師の柏木が、このころ教会や牧師について考えていたことを「愚俗の信」の教会論として紹介する。

アメリカのメーン州ポートランドのウィリントン会衆教会牧師クラーク(Francis Edward Clark 1851-1927)が1881年、妻ハリエットと共に組織したChristian Endeavor Societyは急速に世界各国に波及した。日本にはクラークと神学校同窓で同志社の設立に参加したデーヴィス(Jerome Dean Davis 1838-1910)によって1885年に岡山の山陽女学校を皮切りに基督教共励会として各地に設立され、1893(明治26)年7月に神戸教会で第一回全国大会を開催した。Christian Endeavor Societyは1936年には8万以上の共励会と400万の会員に発展し、日本では1937年に354の組織と1万以上の会員を擁するようになる。当初の日本基督教信徒連合共励会は原田助(組合)を会長兼会計、田村化三郎を書記として東京麹町区中六番町10番地に事務所を置いた。後にメソヂストが力を入れる共励会であるが、最初の41団体の内、日本組合基督教会24、日本基督教会10、メソヂスト系4、他3であった。5人の評議員は石原保太郎(日基)、大石保(日基)、長田時行(組合)、柏木義円(組合)、ブラッドシャウ(Annie Hammond Bradshaw, 組合)である。

基督教共励会は「基督と教会の為め」をモットーに青年をキリストに導き、教会に仕えさせる運動を推進した。デーヴィスの同志社で青年の教育にあたる柏木義円がこの運動に関わったのは自然なことである。しかし、1894(明治27)年7月11日に芝教会で行われた第2回大会でも10人の評議員の一人に選任された柏木であるが、1895(明治28)年1月の『共励会雑誌』に掲載された役員名からは大石保

と共に外れている。この間の『共励会雑誌』には役員名の記載がないため、柏木がいつ評議員を退いたかは不明である。柏木に代わって京都の評議員として不破唯次郎の名が掲載されるのは『共励雑誌』18号（明治28年3月25日）からである。

基督教共励会の設立に関わった柏木は、『共励会雑誌』第1号（1893年9月15日）に「共励会の働に就て」を寄稿した。しかし、長編であったため次号に掲載されることになる<sup>12</sup>。評議員としてなかなか意欲的である。

「共励会の働に就て」において、柏木は「天国は海に投ちて各様の魚をとる網の如し」というたとえ（マタイ13章47-50）を引いて言う。「大に教網を張り大魚も少魚も皆其中に入らしめ健全なる空気を社会に満たしめ凡庸の徒も智勇弁力の徒も皆其中に発達し正しきに就く様に為さる可らず」。そして、敬虔の空気を社会に満たすために教会の拡張が必要であるとして次のように続ける。

「社会に大に善事を為さんには亦多数の信徒を得て善事を為すを目的とする教会の勢力を膨張せしめざる可らず世に種々の結社団体ありと雖ども純粹に善を為し善に進まんことを目的とする唯一の団体は宗教の結社のみなり（中略）教会は其目的純粹に善事に在り爵なく位なく学識なく才芸なく材なく力なく眼中唯善あるのみ教会の勢力は唯是の勢力のみ是れ教会の特色なり故に教会は社会の良心たるを得るなり」

このような教会をめざすためには、少数の精練した信徒を得ようとして「生気なき儒教的の団体となる」より、「苟しくも基督を信じ神に従はんとの志望あるものは多々益々我団体に加へ大に教会を膨張せしめて敬虔なる空気健全なる思想を社会に満たしむるを以て濟世の要務と信ず」と彼は言う。ただし膨張した教会の整齊も不可欠であるとして、論説の後半では共励会員に注意事項を語ってる。「之を整齊するには種々の注意す可き事ある可しと雖ども吾人は先づ凡ての教会員が安息日の礼拝説教安息日学校及び一週一夜の祈祷会に必らず出席するを以て教会を維持拡張するの最も大切な義務と認識するに至らん事を切望せざるを得ず」。これこそ基督教共励会のめざすところである。

ちなみに、この寄稿より半年ほど前、柏木は信仰への最初の導き手にして盟友である中山光五郎に宛てた書簡において小崎弘道から東京の教会の衰微を憂える言葉を聴いたとして、「教役者ハ宜シク社会ノ事ニ通セサル可ラス。然レトモ其主トシテ説ク処ハ福音ナカサル可ラス」という小崎の言への肯定は福音主義者としての柏

---

12 『共励雑誌』第2号、1893（明治26）年10月14日

木の姿勢をよく示している<sup>13</sup>。

柏木の『共励雑誌』への寄稿のもう一つは、第5号（1894年1月15日）の「牧師伝道師と教会」である。ここで柏木は「伝道の栄職」にある二人の友の近況から語り始める。一人は神学校卒業にあたり方々からの招聘を断り困難な教会を選んで貧に耐え励んでいる。もう一人は誠実で信仰も愛心もあるが教会において十分に尊重されていない。後者は「敦厚にして親切頗る心霊上の経験に富み其説教は巧ならざるも質実にして一々経験を説き其個人伝道を為す時は諄々説て倦まず其言自然に出て、強て言ふの痕迹あるなく平素余の切窃に推服する所なり」という親しい関係である。柏木は「神の福音を説く人は実に光栄あるかな」と、ある工学士の言を紹介しつつ、教会がしばしば牧師を換え、牧師伝道師がしばしば教会を換えることに心を痛めて言う。

「我儕は教会と牧師伝道師の関係の夫婦の關係に似んことを切望す。夫婦は互に相信し相愛し一旦相許さば永く相離れざるの覚悟を以て其縁を結ぶなり」そして、「若し互に其過失を忍び親切に其欠点を正し相寛容して数年に至らば相互の信愛年を追て加はる可きなり。教会を振起するの道之より善きはなし」と結論する。この後、足掛け38年、一途に安中教会を牧会することになる柏木を思うとき、なるほどと思わせる言葉である。

ところで、これより二年ほど前、柏木は中山光五郎への書簡において自身の傲慢と中山の友情を次のように述べていた。ちなみに「牧師伝道師と教会」において紹介された二人は、記された内容から兼子常五郎と中山光五郎あたりではないかと思われる<sup>14</sup>。

「小生ハ往時ヲ回想シテ益々愛兄ニ負フ事多カラシク知ル。小生ノ傲慢ナル、愛兄ヲ重ンセス愛兄ニ不親切ナリシヲ自覚スル事多シ。余愛兄ニ冀ヒテ愛兄常々眷顧セラル、余ニ面〔マミエタ〕リ教ヲ勸メシモノハ愛兄ナリ余ノ窮ニ同情トナリ呉レ玉ヘシハ愛兄ナリ。愛兄ノ情濃カニ常ニ小生ヲ扶掖シ玉ヘシ事歴々余ハ記憶ニ在リ」<sup>15</sup>

柏木は、寛容をもって受け容れられた自らを忘れない。その経験が「其過失を忍

13 片野真佐子篇（2011）『柏木義円書簡集』行路社、p. 32

14 兼子常五郎は1891年6月に同志社を卒業し、浪花教会、彦根教会を経て1893年に美作の落合教会に転じた。中山光五郎は1888年から佐野の開拓伝道にあたり、亀岡を経て1895年6月沼田に転じている。

15 片野真佐子篇（2011）『柏木義円書簡集』行路社、p. 31

び親切に其欠点を正し相寛容して数年に至らば相互の信愛年を追て加はる可きなり」という姿勢を生み出しているように思われる。

『共励雑誌』に掲載された柏木義円の署名記事は以上であるが、もう一編、『同志社文学』81号(明治27年10月23日)に掲載された柏木の「教界時弊」の一部が『共励雑誌』14号(明治27年11月24日)に「同志社文学の教界時弊」として無記名で転載されている。これは『柏木義円集』(第一巻)に掲載されて知られているもので、『共励雑誌』の編輯人羽田浪之紹は「論中時弊を穿ち得たるものあるを見る」として、「教会果して必要あるか」と始まる後半の三分の一ほどを転載する。この部分において柏木は、教会の必要を説くのであるが、「教界時弊」全体の要旨を本人の言葉で聴けば以下の通りである。

「要之するに、新神学来りしが故に教会振るはずと謂ふは非なり。旧神学未だ倒れざるが故に教会振はずと謂ふは非なり。神学問題未だ定らざるが故に教会振はずと謂ひ、教会制度非なるが故に教会振はずと謂ふ、共に非なり。教会の振はざるは、其の不振の原因を此等に帰せんとして徒らに衝突を増すか故に非ざるか。究竟教会不振の源は、内は吾人が神に敬事するの忠信足らざるが故なり。外は目死せる物質的の道理に聒して活ける人間の道理を看過するが故なり」

柏木は教会の不振の原因を状況に帰さない。原因は自らの神に仕える忠信の欠如であり、物質的の道理に支配されて人間の道理を看過していることにあると言うのである<sup>16</sup>。

教会と牧師の関係を夫婦になぞらえ、「大に教会を膨張せしめて敬虔なる空気健全なる思想を社会に満たし」と社会の良心たるべき教会への期待を語り、教会の覚悟を述べている。ここまでの柏木の思想がよくわかる教会観と言える。

## 5. 上毛教界現象

以上、安中教会赴任まで柏木義円の教会観を見てきた。では安中教会と上毛教界において彼の教会観がどのように展開されたのかを見て行くことにする。

柏木義円が仮牧師に就任した1897年、創立20年を迎える安中教会は苦悩していた。1883年からのリバイバルにより原市、松井田両教会を生み出したものの、1890年代の天皇制国家主義の時代を迎えると教勢は停滞していた。柏木が赴任し

16 『共励会雑誌』10, 11号(1894年6, 7月)において、チャニングの「日毎の祈祷」を、「京都同志社、金居望天」の名前で訳出しているのも柏木であると思われる。

た時、教会員は244名であるが、礼拝出席者は平均23名で、一度も礼拝に出席していない信徒が153名もいた。この時期、前橋、甘楽教会も無牧となっており、1886年から6年間に142名の受洗者があった原市教会では1892年からの6年間に1人の受洗者もない<sup>17</sup>。こうした傾向は日本基督教会の伊勢崎教会やメソヂストの島村教会でも見られ、群馬の諸教会は軒並み盛時の活力を失っていた。隅谷三喜男は、「倫理的・律法的な教会の限界が如実に示されることとなったのである。群馬教界には既に往年の意気は存し得なかった」と言っている（隅谷 1983: 94）。

こうした状況の中、柏木は「最要の問題は、剛健正大なる宗教を確立して社会の良心を明にするにあり」と言って、家庭改善、教育・倫理道德、社会改良に取り組んでゆく<sup>18</sup>。柏木の安中教会の牧会については、片野真佐子「安中教会と柏木義円牧師」（片野 1988）がその特徴を明らかにしている。片野は「非戦論や社会主義に集中するきらいのある近年の義円研究の進展は、義円と教会との阻隔をますます強く印象づけるという皮肉な傾向を生んでいる」と言うが同感である。そして片野により牧師柏木義円は実に生き生きと甦ってきていることを喜ばしく思う。それは、自由を愛し主義に生き、戸毎に説き人毎に諭す新島精神の後継者としての彼の姿である。柏木は、公娼廃止を成し遂げた群馬における公娼復活への反対運動に青年信徒たちと共に邁進する。柏木による安中教会の牧会を紹介した上で、片野は柏木の教会観についてすぐれた分析を行っている。

「柏木はいかなる教会観を所持していたか。彼にとっての教会は、まさに信仰と現世との間断なき緊張を検証する場として存在する。『信者は一人々々各自ら其身に於て基督を躡さなければならぬ』が、『信仰は靈の事だと云って心で信じても之を公にして背水の陣を布いて決心を固めなければ』脆いと、彼は教会の意義を説く」（片野 1990: 75）

これは柏木の「何故教会に入らざる可らざるか」を引用しつつの論評であり、柏木のダイナミックな教会理解をよく言い表している。柏木によれば、教会は信徒のためにあるのではなく、信徒がこの世に対して信仰を躡すためにあるのであり、そうでなければ信仰は脆い。空理でしかない仏教から脱した柏木は、人心改善の実力の鍛錬に生きる教会を求めてやまないのである。

以上、片野による柏木の教会観の特徴について述べた。次にその広がり、『上毛教界月報』から見てみよう。これは柏木の教会論に基づく広域の牧会と言うことも

17 村田百可編『原市教会百年史』p. 541

18 『上毛教界月報』26号、1900年12月15日（復刻版第2巻、p. 61）

できるだろう。

『上毛教界月報』は1898（明治31）年の10月の上毛教役者会で発行を決定し、柏木義円が編集人となって11月15日に創刊する。発行人兼印刷人は高崎教会牧師の大久保真次郎。この役割は46号から岡部太郎、222号から太田九之八、347号から柏木隼雄に引き継がれるが、編集人は柏木が38年間務めている。同志社大学の「柏木清子襲蔵文書」の中に『上毛教界月報發送扣』という綴りがある。これは發送控えと収入控えが渾然とし、1907（明治40）年から1920（大正9）年まで、断片的には1928（昭和3）年までの記載があって各年ごとの購読者数は把握できない。その概要を記すと、まず1頁に1名ずつ125番までの番号をつけた名簿があり、次に安中周辺の地域ごとに名前のみを連記し、その後地方發送分として住所氏名を記した名簿が続く。それによると、安中周辺が46、地方分63、追記10で合計119名である。また、少し時代が下ると『上毛教界月報購読者名簿及購読料収入扣（其ノ一）大正十年～昭和五年』と『購読者購読料収入扣（其ノ二）昭和六年～十五年』があり、こちらは購読者を網羅しているように思われる。そこで購読料収入から1931（昭和6）年の教会及び団体による購入部数を算定すると安中教会84、原市教会42、高崎教会11、前橋教会60、吾妻教会4、佐野教会15、永島与八18、宇都宮教会4、緑野教会1、倉沢兵次郎5、計244部。他に個人が約100で、そこには浅見仙作、木村清松、小崎道雄、山室軍平、河井道子、金沢常雄などの名前もある。発行部数1000部という笠原芳光の推定が正しければ（笠原1988）、相当数が無料で配布されていたのであろう。

柏木は同志社時代に『同志社文学雑誌』や『同志社文学』で培った社会批評の精神を上州の教会に根ざした言論として発信し続けた。この際、「柏木義円が彼の個人誌でも、同人誌でも、安中一教会の機関紙としてでなく、両毛地方にまたがる教会と信徒のコミュニティ・マガジンとして出発した」と言う田村紀雄の評は傾聴に値する<sup>19</sup>。

柏木は1903年1月15日の『上毛教界月報』に「明治三十五年の上毛教界」を掲載し、各教会のほか、青年団体、禁酒会、婦人団体、上毛孤児院、共愛女学校、清心幼稚園、政治運動の各項目に続けて「我上毛教界月報」を掲げて言う。

「我上毛教界月報 亦我上毛教界現象の一なり。吾人は三十六年の本紙上に大に我教界の振起活動を報道するを得んことを切に天他新父に祈願し居るものなり。右

---

19 菅井吉郎『柏木義円伝』（春秋社、1972年）の田村紀雄「解説」、pp. 223-230



は組合教会派のみの形<sup>ママ</sup>勞なるが此教派は伊勢崎、桐生に日本基督教会派あり、高崎、前橋に聖公会派あり、島村に美以教会派あり、伊勢崎、高崎、前橋に救世軍あれば他日其概況を報道することあらんことを期す」

実際には他教派の概況の掲載は多くはない。しかし、得られた情報に関しては随時掲載されており、教派を超えた記事掲載は『上毛教界月報』のめざすところであった。

柏木は、日本組合基督教会の牧師として、一人ひとりの信徒の独立と安中教会の自治を何よりも尊ぶことにおいて、日本基督一致教会との合同に断固反対した新島襄の弟子である。また政教分離の立場も明確で、三教会同に際してはそれが準備される段階で内務省を批判して言う。「宗教を単に治術の具とし之を利用する程世道人心に深害なるはなく、宗教其物を腐敗せしむる亦之より甚しきはなきなり」。さらに三教会同を企画した床次竹次郎に対しては、宗教を利用する利巧者ではなく先ず己れが信ずる誠実者となれと勧告する。彼は「日本の宗教は元來政權に依頼するの歴史を有し」ているとして、政府が宗教を重視するなら信仰の自由を尊重するに止まるべきだとした<sup>20</sup>。

つまり彼は教会合同論者ではなく、国策による教会の利用も断固拒否する立場である。それでいて教会に内にとどまるのではなく社会へ出て行き、教派にとどまらず神の国の進展のめざすのであった。

『上毛教界月報』の「教報」欄には、両毛地区の各教会の出席者数と活動の報告、信徒の消息までが掲載され、信徒たちはそれを心待ちにしたと言う。柏木は、神の家族としての教会が、各個教会を超えて、教派を超えて社会に出て行きこれを改良する良心となることを終生の課題としたのである。

## 6. 「愚俗の信」の教会観とその展開

片野真佐子は、家族の病気や妻の死などが重なる1910年代の柏木の苦悩に注目し、そこで養われた弱者の論理により彼の時代批判の眼力はますます鋭さを増したとする<sup>21</sup>。これは柏木の「愚俗の信」における「愚俗」の深化と考えられる。当然、

20 「政府の所謂宗教利用」『上毛教界月報』160号、明治45年2月15日（復刻版第4巻、pp. 452-454）

21 片野真佐子『孤憤のひと柏木義円』第5章「家庭の十字架」。1908年3月に母やうが他界、1913年には自身が肺結核で茅ヶ崎南湖院に入院、1916年には次男策平が千葉で病臥、1920年

ここでは「信」も深化する。ここでは柏木における「信」の深化を見るために、彼の代表的説教である「創世以来唯一無二の事実」を検討しよう。代表的とは彼が繰り返し語ったという意味も含んでいる。

この説教は1926（大正15）年5月20日の『月報』330号に掲載され、若干加筆されたものが1928（昭和3）年1月、警醒社より発行された組合教会牧師による説教集『新時代の展望』にも収録された。また、同じテーマは「基督教独有の三大事実」（昭和7年）、「基督教は唯一事実の宗教」（昭和8年）においても展開されている。

テキストは「ヨハネ福音書」1章1節から18節。彼はまず「三教合同だの何だのと云ふて宗教の名さへあれば何でも之を利用して、反つて最も尊重す可き人の宗教心を褻瀆する日本の宗教家を批判して、「宗教は人間の思想などで造らるゝものではない。神人の十字架と其復活とは創世以来唯一無二の大事実である。基督教は人間思想の産物ではない。活ける事実である」[基督教は理論でない、哲学でない、事実である]と言い切る。

かつて「井上円了君仏教新論第一編ヲ讀ム」において「愚俗の信」を語った柏木は健在である。「上帝」は贖罪論的に深化して「十字架と復活」となり、柏木の信仰は断固ここに立ち続けるだけでなく、福音理解の深まりを見ることができるのである。

「基督教独有の三大事実」では「基督の人格」を加え、「基督教は単に理想を列示したる教へではなくて、活きた完全なる人格に具現化顕現したる活教である」とされる。仏教の空理を離れてキリスト教徒となった日以来、その生涯を通して「愚俗の信」は深化し、「愚俗の信」の教会論もまた深化した。

『上毛教界月報』は1925（大正14）年12月20日の第325号以来、廃刊に至るまで、表紙に「本紙の主張」7項目（後に8項目）を掲げた。11年間変わることなくその冒頭に置かれたのは、次の主張である。

「一、我儕は天地万物を創造統治する唯一の真神を天の父、人類を同父の同胞兄弟なりと信ず」

彼はこれを解説して言う。

「仏教の如き世界は、人寿八万歳より十歳の間を昇沈循環するなど唱へて、今や人寿百歳を出でざる末世、追々八歳に至るの下り坂、東洋には随つて、嘗つて進歩

---

に死亡。そして妻の茅子も1918年に死亡した。

の思想なく、唯一個人の悟りとか安心とか云ふ独り澄まし込み独り歓喜するの宗教あるのみである。之に対する他の宇宙観は、無始より、唯一無二の意志あり目的ある絶対の人格否な神格が儼然として存し、宇宙は其理想に向つて開展進化しつゝあり、且つ其正義に依つて統治せられつゝある」<sup>22</sup>

柏木における「神の国」は、神による個々人の心の支配であるとともに「理想に向つて開展進化しつゝある宇宙」へと広がる。この理解は、終末論をめぐる内村鑑三批判においてさらに明確にされるが、それは単なる進歩史観ではない。

第一次世界大戦という人類史上未曾有の惨事は、にわかには基督再臨信仰を盛んにした。その急先鋒の一人が内村鑑三であり、他方には再臨信仰をして葬り去るべきユダヤ思想の遺物とする海老名弾正がいた。彼らの間に立って、柏木は「私の再臨の信仰は、近頃の日本の再臨論者と其神髄に於ては一致し居ることゝ存候。併し再臨論者の態度には、私は一致致し兼候」という<sup>23</sup>。

彼は社会の発展を人間の生涯とパラレルに見てそこには終焉があるとする。

「私は固とより社会の運命は個人の運命を延長したるものに不過と存居候。個人が成長し、老衰し、遂に死し去るが如く、社会も亦成長し、発展し、老衰し、遂に死し去るの期有之候は、疑ふ可らざることゝ存候」<sup>24</sup>

ゆえに柏木は「神の国は唯此世に在りと為して、此世を神の国と為すを唯一の理想と為して居るのは、聊か空想たるを免れない」と言つて、海老名には与しない<sup>25</sup>。

では、「再臨論者の態度には、私は一致致し兼候」とはどういうことか。

「個人の終はりには老衰死亡に定り居るとて誰も袖手之を待ち居る筈は無之、成長する所迄は成長せしめ、発展する所迄は発展せしめ『心の中に善工を始し者之を主イエス、キリストの日までに全うす可し』と云ふことを確信するも、修養に努力するは怠る可らざることゝ存候。去れば社会の運命は其の果ては老衰死滅にして神国の完成は再臨の主の御手に在りとて、社会の成長発展を軽視し、或は社会の進歩を罵り、文明の発展を嘲り候ば、此身は畢境衰死す可き者なりとて其の成長発展を度外視すると一般、不健全の謬想と存じ候。今の再臨論者には往々此の嫌ひ有之候に

22 「本紙の主張」『上毛教界月報』360号、1928年11月20日（復刻版第9巻、p. 142）

23 「雞肋漫筆」『上毛教界月報』248号、1919年7月15日（復刻版第8巻、p. 377）

24 同前

25 「基督再臨問題に就いて」『上毛教界月報』237号、1918年8月20日（復刻版第6巻、pp. 234-236）

付き、私は敢て之に与せず候」<sup>26</sup>

柏木は、牧師として一人の人の向上に力を尽くす。そして、同様に社会の発展に尽力して行こうとするのである。こうした彼の歴史社会に対する態度は内村と異なる。再臨運動の後『聖書之研究』に立てこもる内村を批判した家永三郎の論点は、まさに柏木が言わんとしたところである。

家永は言う。「もし、内村が、信仰の問題と社会の問題を切りはなし、社会性・歴史性を喪失した抽象的個人における信仰を追求して行ったのであるならば、あるいはまた、社会・歴史の進歩を希求する意志を低級な物質的現世主義とみなし、歴史のいとなみとかかわりのない信仰の確立をめざして進んだのであったならば、それは、内村にとって致命的な誤りであった、と考へざるを得ないのである」(家永 1956: 120)。

内村の場合、「社会・歴史の進歩を希求する意志を低級な物質的現世主義」と言うより、人と社会の罪の自覚の深さに注目すべきであろうが、確かに「決定的な違いは現世に対する態度にある」(片野 1990: 75)。再三述べているように、柏木は何よりも「空理」を嫌う。「仁斎の躬行実践、陽明の知行一致を喜び、聖書の愈々実験的発揚せられんことを望むものなり(中略)空理空想は吾人の甚だ厭ふ所なり」<sup>27</sup>と言う義円にとって、歴史の中に生きて働く神への応答としての歴史形成は、「聖書の実験」に他ならない。柏木畢生の「非戦論」も、求むべき神の国、聖書の実験的発揚としてあることが重要である。

柏木の非戦論は、関東大震災に伴う人災を経験して一層明確になる。震災後の柏木の第一声は、『上毛教界月報』299号(大正12年10月15日)の巻頭言「天を畏れよ」であった。そこで柏木は、シロアムの塔が倒れた記事(ルカ13章4節)、ソドムに対するアブラハムの執り成し(創世記)に触れながら、神の警告として震災を受け止める。そして孔子の「民信なくんば立たず」を引いて結論する<sup>28</sup>。

「信の本は神を畏るゝの宗教である。沙上の家は一震して倒壊した。復興の東京は其人心を不動の基礎の上に置かねばならぬ。最後に此厳かなる天譴を受け乍ら此変災に随伴して多くの罪悪が行はれたのは深く哀しむ可きことである、特に変災に乗じて弱者を惨殺したる国民は噫禍なる哉」

---

26 「雞肋漫筆」『上毛教界月報』248号, 1919年7月15日(復刻版第8巻, p. 377)

27 『同志社文学』76号, 1894年4月23日(『柏木義円集』(一), p. 55)

28 「天を畏れよ」『上毛教界月報』299号, 1923年10月15日(復刻版第7巻, pp. 468-469)

内村鑑三は、震災を天罰と受け止め墮落した東京市民の靈魂の再建を唱えた<sup>29</sup>。小野村林蔵もこれと似ている<sup>30</sup>。植村正久は天罰とともに「神の業の顕れんためなり」を強調する<sup>31</sup>。高倉徳太郎は留学中のオックスフォードで震災の報に接し、9月4日の日記に「かかる時こそ主は働き給わん。主と其の十字架はここに働き給うべきなり」と記した<sup>32</sup>。

雨宮栄一は、内村および植村と賀川豊彦を比較して言う。「賀川は無用な議論に時を費やすのではなく『よきサマリア人』の如く、とにかく被災者の傍らに走りよる行動をしたことだけは間違いない」（雨宮 2005: 265）。そして、1924年の1月から始まる連日連夜の講演と説教の一覧を記すが（雨宮 2005: 272-273）、その最初は、柏木義円、隼雄親子の招きによる高崎・安中での集会であった。雨宮は言う。「東京の教会にとって賀川はまたとない伝道の奉仕者と見られたことも容易に想像できる。賀川もまた喜んでその期待にこたえたにそういない。救霊運動こそ彼の本来的な課題であったからである」（雨宮 2005: 274）。柏木の賀川招致は、被災者の傍らに走りよって助け、同時に救霊をめざす彼への共感と協力であった。

柏木の場合、大震災を天譴と見てより良い復興の機会と考えることは他の論者と同様であり、賀川豊彦の復興支援と救霊運動への共感も明白である。その上で柏木の特徴を言えば、「変災に随伴して多くの罪悪が行はれたのは深く哀しむ可きことである、特に変災に乗じて弱者を惨殺したる国民は噫禍なる哉」という結びのことばである。

この嘆きは、翻すと「殺す勿れ」の主張と軍拡批判となる。震災後の同時期に軍籍離脱を表明した須田清基のこともあり、『上毛教界月報』301号（1923年12月

29 「天災と天罰及び天恵」（『主婦の友』第7巻10号、大正12年10月1日）『内村鑑三全集』第28巻（岩波書店、1983年）、pp. 18-19

30 「見渡す限りは焼土と化した大東京は、風雨にもまれて、いと悲惨を増し、真に目も当てられぬ心持がした。あゝ虚栄と淫蕩の都は亡びた。汝はまことに亡びるべき運命にあったのだ。希くはその死灰の中から聖い、高い新東京が生れて呉れるやうに。此の惨憺たる血の涙が無意味の犠牲になり了ることの無いやうに。若し此の悲劇の中から、聖いもの、高いものが生れて呉れるなら、十万の生命も、百億の富も、その犠牲として決して悲しむべきではないのだ。あゝ併し、新に生れて来るものが昔のままのものであるなら、それこそ真の悲劇なのだ」 「震災地訪問記」（1923年10月16）『植村正久と其の時代』第3巻、pp. 556-560

31 「神の業の顕れんためなり」（『婦人の友』大正12年10月7日）『植村正久と其の時代』第5巻、pp. 1025-1030。雨宮栄一『牧師植村正久』新教出版社、2009年、pp. 314-320

32 雨宮栄一（2010）『評伝高倉徳太郎 上』新教出版社、pp. 287-290

15日)の巻頭論文「殺す勿れ」が発表される。これは柏木が関東大震災をどのように受け止めたかの結論とも言えるだろう。ここに至るまでの軍拡批判を遡ってみると、9月14日の日記に次のような記事を見出すことができる。

「十三日朝、浦塩ヨリ横浜二着シタレーニン号ハ救恤品救護班ヲ満載シテ来タリシガ、救護ヲ名トシテ国民ヲ扇動スルガ目的ナリ過激宣伝文ヲ多数ヲ有シ居ラレトテ戒嚴司令官ハ之ヲ拒絶シ、石炭百五十トン、水八十トンヲ給シテ十四日午前其俣浦塩ヘ引返セシメシト、コレ露國ト交ワルヲ好マザル軍閥ノ為ス処ニアラザルカ、日露兩國ノ国交ノ為メ憂フ可キコト也。救護ハ嘘、実ハ過激宣伝ナド云フハ無理解カ、軍閥ノ宣伝ニアラザルカ、当局ガ世話シテ自警団ヲ永久的ト為スモ軍閥維持ノ為メトナルベシ。此際ヲ利用シテ軍閥ハ色々ノ事ヲ為スナラン」<sup>33</sup>

震災の救援活動にあたった陸海軍が、「軍備拡張を非とし軍縮を主張し軍国主義帝国主義を排する者に猛省を与えたる絶好の機会にて有之、此意味に於て今回の天災は日本に取つて天佑であつた」などと言うのは我田引水も甚だしい。娼妓が看護したからということで娼妓必要論が肯定されるわけではないと釘を刺した上で柏木は言う。

「今回の事変に際して自警団なるものに現はれし恐る可き弊は軍人精神の致す所にては無之候や、権威を以て統轄するものがあれば所謂偉大なる行動を為し其れがなければ今回の自警団に現はれたるが如き弊と相成候。陸軍は団体として機械的には兎に角、未だ国民個人自治の品性には何等の貢献も無之、反て殺人を事とも思はざる弊習は軍人精神の影響と認めざるを得ざる義と存候」<sup>34</sup>

今回の自警団に現われた弊とは、掲載を差し止められた朝鮮人虐殺のことである。そして、甘粕事件を経て「殺す勿れ」を記す理由を柏木は以下のように記す<sup>35</sup>。

「亀戸事件や甘粕事件其他どさくさ紛れに世に知られずして闇から闇に葬り去られたる此種類似の事や鮮人虐殺事件等に至つては、国家の為社会の為と云ふ名を以て官憲や良民が之を為し一部社会が之を是認し少くとも之に共鳴同情するのだからこれ実に由々敷一大事で軽々に看過す可きではない此は軍事教育の害毒、偏狭なる国家主義教育の余弊、軍国主義の悪影響であることは勿論であろうが去るにても今回虐殺事件の被告が私の為に殺したのではなく国の為めとか世の為とか思つて殺したのだから寧ろ褒められさうなもの、さうでなくともドサクサ紛れにやつたのだから

33 『柏木義円日記』9月14日、p. 306

34 「鶏肋漫筆」『上毛教界月報』299号、1923年10月15日(復刻版第7巻、p. 475)

35 「殺す勿れ」『上毛教界月報』301号、1923年12月15日(復刻版第7巻、pp. 496-499)

大目に見て置かれさうなものを意外にも検挙されたのは馬鹿を見たこんなことなら無駄骨折な、せねばよかつた位の後悔で無辜の人を殺して済まなかつたとの良心に由れる本当の悔改らしきもの、の見へないのは日本人は本当に生命の貴いことを知らないのであるがこれは国民教育＝国民性の欠点と謂はねばなるまい。一派の徒は自警団の殺人暴行を剛健の氣象の発露とか尚武の精神とか云ふて喜んで居る此れ吾人が特に此題を掲げて論ずる所以である」

戦争はもとより死刑や正当防衛においても「殺す勿れ」を主張する柏木は、次のように結論する。「要之するに人命尊重の觀念を欠く一大欠陥が大いに暴露した今日の日本に於て絶対「殺す勿れ」の誡命を宣命し之に由りて恒久平和の論を唱へ強制的徴兵制度の撤廃を要求し死刑の廃止を主張し以て人命尊貴殺人罪惡の觀念を徹底せしむるは吾人の一大使命ではあるまいか」

柏木には「教会論」と銘打った論考が一篇だけであると冒頭で述べた。1930(昭和5)年6月20日『月報』379号に掲載されたこの小論文は、柏木晩年の円熟した教会論である。

それは「教会は国家なる？」という問いで始まる。そして、ローマ・カトリック教会が時に国家以上の国家を任じていたことを皇帝破門や宗教裁判などの例をあげた後、「新教は、元來主義としては教会の無政府主義の筈である」とプロテスタントの教会論を粹付ける。さらに、彼は内村の無教会主義を否定して、教会は無政府主義であると繰り返す。ここで彼が言わんとする無政府主義とは、国教会に対する自由教会という意味ではなく「教会内に戒規や罰則のあるを許す可き筈はない」ということである。これは「教会に戒規あるを肯んぜず、権力支配を快しとせず、極力教会合同に反対」した新島精神の継承である。

新島襄が療養中の東京から同志社普通学校5年生の横田安止に送った手紙の一節に「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起り来ラン事ヲ望テ止マサルナリ」あった。同志社教育の真髓を示す「良心教育」という言葉はこれに由来する。新島の「良心を手腕とする」生き方を志す人々による教会は「良心」によって治められるべきであるということになる。

戒規や罰則のない、権力支配のない教会のイメージを柏木は「キリストを家長とする家庭である。ホームである」と表現する。教会は互いに兄弟姉妹であり、家庭には愛の折檻はあっても、水臭い冷酷な戒規や罰則はない。教会の体面などと言って冷酷にも除名するなど、家庭のなすべきことではなく、むしろ家族は辱めをとにもすべきだとも言う。しかし、「戒規や罰則のない」と言いながら、彼はそれをま

まったく否定しているわけではない。「唯姦通丈は止むを得まい」と言ってキリストを信ずる心がなければ致し方ないとし、さらに教会は罪人の集まる病院であってしかるべきであるが、病気の自覚なく、病の癒えんことを志すことがなければ出てもらおうしかないと言はる。つまり、水臭い冷酷な戒規や罰則はあるべきでないが「出て貰う」ことはあるのである。この寛容さを支えているのはマタイ 13 章 24 節以下に記された天国の喩で、悪い麦と共に誤って良い麦をも抜かないよう収穫の時を待つ、という態度を柏木は取ろうとするのである。ゆえに「教会員銘々曇らぬ良心を持つて、凜乎たる所がなくてはならない」。

戒規に消極的な柏木は、礼拝や伝道、そして生活においても自らに鞭打つことで教会を訓練しようとする。かの有名な新島襄の「自鞭の教え」を地で行ったと言えるだろう。新島は、学校に不平を持つ学生たちの無届欠席の校則違反に際して処罰を避け、同時に校則を守るべく自らの拳を杖が割れるまで打ちたたいた。これは明治 1880 年 4 月のことで、柏木の入学はその年の暮れのことであった。柏木は、これまた晩年の「牧会者の悩み」<sup>36</sup>において教会の腐敗と現実の中での苦悩を語り、新島の「自鞭の教え」にふれている。

「私は十字架と復活と神徳の輝きなる耶穌の御人格とは創世以来唯一無二の大事実で如何なる大思想家が出て宗教、哲学の組織系統を立て候ても此等の事実を創作し得ざることと存じ若し之を秘儀と申し得んば之を信ずるが教会生活の秘儀と存じ候」という柏木は続けて教会を次のように定義する。「吾人銘々聖別されて神の殿として其心身を献ぐるはこれ教会員第一の本分と存候。而して教会は徒らに壮麗なる会堂にては之無基督を其首として一体となつて聯なりたる基督者の団体即ち是れにして是こそ即ち活ける神の殿堂にて候」<sup>37</sup>

また、「何故に洗礼を受くるか」においては、洗礼の意義を 5 つ掲げているが、これまた実に实际的、実践的な内容である。(1) 外に表白しなければ亦何時しか信仰の孔が塞がる憂いがあるから、(2) 基督者は証人であらねばならないから、(3) 神国建設のための団結、(4) 神のホームの理想、(5) 過去を葬り新生涯に誕生するため<sup>38</sup>。

このホームは、一郷土、一邦国にとどまるものではなく、実に世界を包容する大家族であり、これ即ち神の国である。そして「愛の到る所神の国は自ら其処に追隨

36 「牧会者の悩み」『上毛教界月報』400 号、1932 年 2 月 20 日（復刻版第 10 巻、p. 203）

37 「教会生活の秘儀」『基督教世界』2218 号、1926 年 7 月 1 日

38 『上毛教界月報』388 号、1931 年 3 月 20 日（復刻版第 10 巻、p. 32）



する」と「教会論」は結ばれる。

以上、戒規問題を中心に論じられた柏木の教会論を見てきたが、その要は「無政府主義（権力支配の排除）」であり、国家観、新島精神の継承、家庭的愛、神の国とその広がりといった側面における柏木の教会論が明らかとなった。

## 7. おわりに

1932年、SCM (Student Christian Movement) の菅岡吉は、日本基督教青年同盟機関紙『開拓者』4月号に柏木を紹介した。

「もう一人社会的基督教或いは寧ろ基督教社会主義の旗印を掲げて異彩を放つて居る老人牧師がある。之は上州の聖人であり、侃々諤々の論陣を張つて、遠慮会釈なく海老名や小崎と云ふ元老でも非と思ふことには攻撃の矢を放ち、其胆を寒からしめて居る柏木義円翁である。彼は昨春以来最も鮮やかに其の主宰する『上毛教界月報』紙上に、基督教社会主義を説き、基督教の転向を力説して居る」

しかし、柏木は『月報』第403号に「我は所謂転向論者に有らず」を書いて言う。「吾人は信仰は飽く迄も我と神との関係を正しくすることに在ると信ずる者にて候。社会が如何に完備するも、我れと神との関係にして正しからずんば、我に在ては全くゼロにて候」<sup>39</sup>

柏木義円は、回心により現実在の神を畏れ、再生された良心を曇らせず凛乎として生きる人による自治教会をめざした。無教会主義からの批判があっても神の家族としての制度的教会を尊び、福音喪失の社会的キリスト教とは一線を画しつつ社会主義者とも協働した。言論弾圧の中でも主張を曲げず、一地方教会の牧師として敬われた。

戦後の日本の教会史においていわゆる教会派と社会派の対立ないし分離は顕著である。日本基督教団内部における両者の対立は教団の力を内部で消耗させ、主流派とその対抗エキュメニズムとしての福音派も互いの特長を否定し合ってきた。このような対立は戦時下の教会の罪責についての認識にも起因するところがあり簡単な問題ではない。しかし、これはキリストの教会本来のあり方とは言えないだろう。そこで日本キリスト教史において福音信仰と教会重視の立場で日本社会に深く関わった例を探すとき、一つの事例として柏木義円と上毛教界に辿り着く。現代の教会

39 「我は所謂転向論者に非らず」『上毛教界月報』403号、1937年5月20日（復刻版第10巻、p. 254）

は、彼から示唆を得るべきではないだろうか。

**【参考資料】**

- 雨宮栄一（2010）『評伝高倉徳太郎 上』新教出版社  
雨宮栄一（2005）『貧しい人々と賀川豊彦』新教出版社  
飯沼二郎・片野真佐子編（1998）『柏木義円日記』行路社  
家永三郎（1956）「日本思想史上の内村鑑三」『回想の内村鑑三』岩波書店  
伊谷隆一編（第一巻 1970, 第二巻 1972）『柏木義円集』未來社  
伊谷隆一（1967）『非戦の思想』紀伊國屋書店  
笠原芳光（1988）「上毛教界月報」『日本キリスト教歴史大事典』教文館  
片野真佐子編（2011）『柏木義円書簡集』行路社  
片野真佐子編（2001）『柏木義円日記補遺』行路社  
片野真佐子（1993）『孤憤のひと柏木義円—天皇制とキリスト教』新教出版社  
片野真佐子（1990）「柏木義円の時代批判精神 3」『福音と世界』12月号, 新教出版社  
片野真佐子（1988）「安中教会と柏木義円牧師」新島学園女子短期大学新島文化研究所編『安中教会史—創立から100年まで』安中教会  
（1984）『上毛教界月報』復刻版 全11巻・別冊1, 不二出版  
鈴木範久（1978）『明治宗教思潮の研究』東京大学出版会  
隅谷三喜男（1983）『日本プロテスタント史論』新教出版社  
武邦保（1985）「新島襄と柏木義円（その1）—柏木資料から見る思想史的関連」『同志社叢書』（5）  
田村紀雄（1972）「解説」菅井吉郎『柏木義円伝』pp. 223-230. 春秋社  
山口陽一（2005）「柏木義円の説教」『キリスト者の時代精神、その虚と実』いのちのことば社

# キリスト教大学における震災ボランティア活動と宗教心の発達 ミッション系学校におけるサービスラーニングの観点から

岡村直樹

(東京基督教大学大学院教授)

## 1. 研究の出発点と意義

2011年3月11日に宮城県牡鹿半島の東南東沖約130kmの海底を震源として発生した巨大地震は、日本における地震観測史上最大のマグニチュード9.0を記録し、岩手県、宮城県、福島県の沿岸部を中心に未曾有の大災害をもたらした。警察庁によれば、2012年8月22日現在、死者は15,868人、重軽傷者は6,109人、警察に届出があった行方不明者は2,848人で、また被害額の総計は20兆円を優に超えるであろうとも言われている。そのようななか、社会福祉法人全国社会福祉協議会は東北三県各地のボランティアセンターに登録したボランティア活動従事者の延べ人数は、震災より約5ヶ月間後の2011年8月21日の時点で686,800人に達したと発表した。震災からの復興が、ボランティア活動によって広く支えられていることがわかる数字である。一方で、同年6月30日付けの産経新聞では、東日本大震災のボランティア活動における学生ボランティアの占める割合が約2割で、阪神淡路大震災時の6-7割と比べて非常に低いことが伝えられている。時期的な要因や地域的な違いがその理由として考えられるが、特に大学生のボランティア活動はもっと奨励されてしかるべきではないかという意見が各所から聞こえてきているのも事実である。

本研究は以上の背景をふまえ、質的研究の方法、特にグラウンデッドセオリーを用い、東日本大震災の被災地にボランティアとして入ったキリスト教主義大学の学生の体験の記録とその分析を通し、以下の3つの目標を目指して実施された。

- (1) 歴史的大地震の被災地にボランティアとして足を踏み入れたキリスト教主義大学の学生の生の声を記録し、資料として残す。
- (2) ボランティア活動に従事したキリスト教主義大学の学生に起こった内面的変化を、「宗教心の発達」という観点から分析する。

(3) キリスト教主義大学が、学生のボランティア活動にさらに積極的に取り組むための一つの足がかりとして、キリスト教教育という観点から、震災ボランティア活動の意義を検証する。

## 2. 質的研究の特徴

質的研究は大まかに言えば、研究対象を数においてではなく、その質において理解し研究することを指す。質的研究の対局に位置する量的研究は、その名前からも判るように統計学的数量にサポートされたものでなくてはならず、ある意味非常に機械的にデータが解析、分析されていく過程でそれが決まるのである (Patton 2002)。さらに量的研究は、研究の客観性に重点を置き、実験的研究の構造や、仮説の証明過程を重視する方法論を多用する。一方、質的研究に関しては、以下のようなユニークな特徴を挙げることができる (大谷 2008: 340-354)。

- ・ 質的研究は仮説を立てること、またその検証をすることを目的としない。
- ・ 質的研究は実験的研究状況を設定しない。
- ・ 質的研究はインタビューやその他の観察を重視し細かい記録を作成する。
- ・ 質的研究は研究過程での研究者の主観を考慮しその内容を取り入れる
- ・ 質的研究は記録以外に得られた資料も排除せず総合して検討する。
- ・ 質的研究は研究対象の一般性や普遍性より、具体性、個別性、多様性に即する分析を行う。
- ・ 質的研究は研究対象や、そこに派生する様々な問題を社会・文化的な文脈のなかで取り扱う。
- ・ 質的研究は質的データに基づいて分析、理論化を行い、現象に内在する意味を見出す。

上記のように、質的研究は具体的な事例を重視し、個々の現象を時間、地域性といった特殊性のなかで捉えようとする方法である。また特に人間自身の行為や表現を出発点として、それを実生活の場所と結びつけて理解しようと試みる方法でもある (フリック 2002: 22)。さらにこの研究方法は、量的研究が取り扱いを躊躇する、人間の立ち居振る舞い、感情の動き、直感といった部分にも大胆に切り込むことを可能とするのである。

質的研究は近年、様々な学術研究分野、特に心理学、看護学、教育学、社会学、文化人類学等において一つの主流な研究方法として確立されつつあり21世紀における重要な知的リソースとなるであろうと考えられている方法論である。質的研究は、オーストリア人の哲学者、エドムント・グスタフ・アルブレヒト・フッサール(Edmund Gustav Albrecht Husserl, 1859-1938)によって提唱された哲学の一分野である現象学をその理論的本源としている<sup>1</sup>。フッサールはそれまでの「意識を自明視する実証主義的な認識論」を、實在の予想に基づく態度であるとして嫌い、ありのままの「事象そのもの」を明らかにすることこそが大切であるとした<sup>2</sup>。そのことのために彼は「現象学的還元」という独自のアプローチを生み出した。これは日常生活における人間の意識が素朴に信じて疑わない世界の諸事物(事象に対する好き、嫌い、肯定、否定等の判断を含む)を「かっこ」に入れ、これに対して無関心で中立的な立場をとった後、まだそこに残るものを「純粹意識」とし、それを厳密な哲学の題材とする方法である。フッサールは現象学を当初、「無前提」で「純粹」な哲学の学びになりうると考えていたが、その後人間の意識を極端に抽象化することに限界を感じ、現象学の矛先を厳密な哲学から、具体的な「生活世界」へと方向転換させていった。現象学はその後、フッサールの後継者であったマルティン・ハイデガーによって実存主義哲学へとその道筋を大きく変えることになるが、現象学的還元という方法そのものは、その後哲学以外の様々な学問分野において応用されるようになっていった<sup>3</sup>。本研究で用いられる質的研究の方法とは、現象学的還元、すなわち「できる限り先入観を排して内観に現われる現象を直接調べて考察する」という現象学のアプローチの部分を取り入れ、推論や試論からではなく、個々の現

1 ヘーゲルも「精神現象学」という著作を残しているがこれは彼が提唱した「意識」を問題とする哲学の分野で、意識そのものから理性に至る発展の過程について言及したものである。この著作は精神の弁証法的発展をその題材としており、フッサールの現象学とは大きく異なる。

2 認識は認識される客観と、認識する主観の対立の上に成り立つ。では認識はどのようにその対立を乗り越えて明証な直感と、確実な真理に達することができるだろうか。そのために彼は、例えば世界がすでに「ある」とするような態度を棚上げ「エポケー」(判断停止)とし、そのような信念、そして「ある」とされる世界がどのように成立し、経験からどのように構成されるのかを探索することが必要不可欠であるとしたのである。デカルトからヘーゲルに至るまでの近代哲学は、「世界は客観的に存在する」という大前提の上に成り立っていたが、この大前提こそ問題があるとフッサールは感じたのである。

3 ハイデガーは自然界の中で人間だけが観念の世界をもつことから、人間を「現存在」と位置付け、さらに人間の死と死への自覚が生きていることの意味であると考えた。ハイデガーが現象学を携えて進んだのは、フッサールの「生活世界」とは違う「観念的」哲学の道であった。

象に視点を移し、そこを出発点として行う研究の方法論なのである。

質的研究は、ともすると単なる「インタビューの記録と、そこから主観的に導き出される研究者なりの解答」と考えられてしまうことが多いが、実際は非常に細かいデータ分析を必要とする研究方法である。フッサールの提唱した現象学をその理論的本源とする質的研究のアプローチを、学術的研究の方法として確立した功績をもつのは、バーニー・グレイザー (Barney Glaser) とアンセルム・ストラウス (Anselm Strauss) の2名であり、彼らの質的研究方法論は、グラウンデッドセオリーとして知られている。それはデータ収集、データ分析、理論構築という3つの主な段階から構築されている (Strauss and Corbin 1998: 12)。本研究のようにインタビューを中心に据えたデータ収集をする場合、研究者は自らの予見に頼らず、研究対象者ができる限り自由に語るることができるよう心がけつつ質問の内容や、話しの導き方をオープンに保つことが必要とされる。インタビューの内容そのものの以外にも、社会学や心理学の研究分野でその重要性が証明されている人間の非言語によるコミュニケーション、すなわち研究対象者の語調、顔の表情、体の動き、視線、服装等も重要なデータとして記録する。また研究対象者の数も、量的研究の場合のように多くを必要とはしない。広く浅く学ぶのではなく、狭く深く学ぶことから、研究対象者や対象とする様々な現象をどれだけ深く掘り下げることができるかという点が重要なのである。データの収集後、研究者が理論の構築に進むには、まずデータ分析を通じてさまざまなカテゴリー (まとめり、または概念) を生成し、それらを組織化していくこと、言い換えれば、収集されたデータを一端バラバラにし、新しく組み替えて再構築する作業が必要となる (木下 2007: 209-216)。Strauss and Corbin (1998: 123, 192) によれば、例えばある社会現象を、質的データを通して分析しようとする場合、カテゴリー生成の枠組みには、2つの側面が存在するという。その社会現象が起こる条件、要因、状況、現象からどのような結果が生まれているかという構造的側面と、その社会現象がどのような展開や、やり取りを経ているのかというプロセス的側面である<sup>4</sup>。またデータ分析のために必要なもう一つの手法にコーディングがある。コーディングとは、データ中の諸概念を識別し、特性を発見したうえで構造的に関連づけ、新たな概念を構成し、理論化を可能にするためにコード (コードワード) を付ける作業である (Strauss and Corbin 1998: 153, 179)。

4 関口靖広「理論生成とグラウンデッド・セオリー・アプローチ」(<http://web.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~ysekigch/qual/grounded.html>) 2010.1

明らかになりつつある研究結果の分析プロセスを多角的に行うため、グラウンデッドセオリーは、関連分野における既存の学術研究の結果をその参考として用いることがある。さらにその場合、質的研究の結果のみならず、量的研究の結果さえも参考とする。質的研究におけるデータ収集は現象学的還元概念に根ざしたものでなくてはならないが、データ分析の場面では、参考となりうる様々なデータを用いるのである。その上で質的に得られたデータを多角的に分析し、そこに見出すことのできる共通点や相違点等から理論構築を行うのである。この最終的な理論構築は、グラウンデッドセオリーの到達点とも言える。グラウンデッドセオリーという名前からもわかるように、構築された理論は推論や試論に基づくものではなく、現象が起こっている現場、つまり「グラウンド」(地面、地べた)から直接に得られたデータを基に築かれたものであり、最も現実に近いものとなるのである。

また特に、本研究のように、質的研究の方法が宗教の実践的研究に用いられる上にも大きなメリットがあると考えられる。質的研究は、量的に表すことの難しい宗教心、感情、心の動き、対人関係といった分野において有効だからである。質的研究が量的研究と大きく異なる点は、上記したようにデータを数量化する必要がない点である。例えば「寂しさ」の感情を量的研究が取り扱おうとするとき、「何回寂しいと思ったか」「以前よりその回数は増えたか減ったか」「研究対象者の何割が寂しいと感じたか」といった種類の質問が必然的に研究の中心となり、そこには厳密な構造が要求される。対照的に質的研究では、研究対象者の言葉を質問で遮ることなく、感じたままに語られた言葉や語調、さらに仕草までが研究データとして加味され分析されるのである。言い換えれば、質的研究は量的研究のようにいわゆる科学的合理性に優れている研究方法ではなく、主観的で直感的な側面を持ち合わせる研究方法である。質的研究はその性質上、研究者の主観がデータ収集から分析に至るまでの随所に用いられており、それを抜きにしては成立しないからである。また質的研究は非常に限られた地域で、限られた人数を対象にして行われているため、研究の結果を直ちに広く一般化することができるという性質の研究ではない。さらに時の流れと共に、研究対象者もまた研究対象者をとりまく社会も変化することから、研究結果の実際の有効期間も様々である。質的研究の方法は、量的研究が取り組むことを躊躇する領域に足を踏み入れ、現場に根ざした質的なデータを重視し、リアリティをもってそれらを詳細に記述することを通して、現象の本質を追い求めることをその本分としている。質的研究の結果は、量的研究のそれと対比させ、二項対立の図式のなかでその優劣が競われるべきものではなく、研究の目的を果た

すためにあらゆるデータを活用するというスピリットのなかで、説得力をもつ実践的な取り組みの手掛かりとして活用されるべき類のものであろう（萱間 2007: 3, 51）。

### 3. 研究方法と研究対象者

本研究は、Michael Quinn Patton の著書、*Qualitative Research and Evaluation Methods* に記述されたグラウンデッドセオリーのガイドラインに沿って実施された（Patton 2002: 124-127）。本研究の初期段階で研究対象者となったのは、東日本大震災のボランティア活動に加わった大学生 23 名で、研究者が教鞭を執るキリスト教主義大学において募られた。まず彼らにボランティア活動について、簡単に記述してもらい、そのなかから、均質サンプリング（Homogeneous Sampling）方法のガイドラインに沿って研究対象者が絞り込まれた（Patton 2002: 235）。サンプリング（Sampling）とは量的研究のように大人数を研究の対象とすることのできない質的研究において、より意図的（purposeful）に研究対象者を選択しようとするプロセスを指す言葉である。均質サンプリングとは、一定のサブグループをより深く知ろうとする際によく用いられる方法で、いくつかの共通条件をつけて研究対象者を絞り込むことである。今回均質サンプリングの方法を用いて選択されたのは 9 人（男性 3 名、女性 6 名）で、そこには以下の 6 つの共通点が存在する。

- (1) キリスト教主義大学に在籍する 2 年生と 3 年生である。
- (2) 今回初めて災害ボランティア活動に参加した学生である。
- (3) 震災以降、50 日以内に、ボランティア活動に参加した学生である。
- (4) ボランティア活動の場所は、岩手県、宮城県、福島県（東北三県）のいずれかであった。
- (5) 実際に被災地を目の当たりにし、また被災者とのコンタクトがあった。
- (6) ボランティア活動終了時から 1 ヶ月以上が経過している。

研究参加者の共通条件を (1) としたのは、本研究の焦点の一つでもある「宗教心」について、何らかの考察をした経験のある者を研究対象者としていたいという意図から



である<sup>5</sup>。また大学1年生には、入学してまだ日も浅く、大学において宗教的考察の機会があまりなかったかもしれないという懸念があり、研究対象者から外している。

本研究の初期段階で研究対象者となった学生のなかには、今まで「阪神・淡路大震災」や、他の自然災害においてボランティア活動に参加した学生が見受けられた。研究参加者の共通条件を(2)としたのは、以前の自らのボランティア体験と今回の体験を対比させる形での考察を促すのではなく、学生にとって初めてのボランティア活動に限定したデータを収集する意図からである。

研究参加者の共通条件を(3)(4)(5)としたのは、震災の爪痕が色濃く残る時期に、特に被害が甚大であった地域で、実際に被災者とふれあった体験をもつ学生からのデータを収集する意図からである。研究参加者の多くは、大学主催によるボランティア活動に参加した者であるが、別団体が主催したボランティア活動に参加した者もいた。

研究参加者の共通条件を(6)としたのは、研究参加者の宗教心の変化に焦点を当てるといふ本研究の性格上、学生がボランティア活動から戻った後、しばらく時間が経過しており、その間の変化をデータとして収集する意図からである。9名のボランティア活動後の実際の経過期間は、最長で約2ヶ月、最短で1ヶ月であった。以下に本研究に参加した学生のボランティア活動に関する基本データを列挙する。

学生(A) 日程：3月下旬—4月初旬、場所：東松島市、南三陸町、内容：ドロの掻き出し、家具出し、炊き出し、支援物資の配布

学生(B) 日程：4月下旬から5月上旬、場所：仙台市、内容：ドロの掻き出し、石灰撤き

学生(C) 日程：3月下旬—4月上旬、場所：東松島市、内容：ドロの掻き出し

学生(D) 日程：4月中旬、場所：福島県いわき市、内容：炊き出し

学生(E) 日程：3月下旬、4月中旬、場所：東松島市、石巻市、内容：後片付け、ドロの掻き出し、救援物資の仕分け、炊き出し

学生(F) 日程：3月下旬—4月上旬、場所：東松島市、石巻市、内容：物資の運搬と配給、炊き出し、ドロの掻き出し

学生(G) 日程：3月下旬—4月上旬、4月下旬—5月上旬、場所：仙台市若林区、東松島市、南三陸町、内容：水の運搬、倉庫の整理、救援物資の仕分け、ドロの掻

5 研究対象者の通う大学では、1年次に「キリスト教世界観」というクラスが必修科目として設定されており、そのなかで宗教心や信仰といったトピックが取扱われている。

き出し

学生 (H) 日程：4月上旬，場所：仙台市，女川町，内容：支援物資の運搬

学生 (I) 日程：4月中旬，場所：東松島市，内容：ドロの掻き出し

さらにこの研究では、情報データソースの多元化のために、Triangulation of Sources の概念を用い、個人インタビュー、小グループディスカッション、および研究参加者の言動観察を実施した (Patton 2002: 247)。インタビュー、及び小グループディスカッションでは、宗教心の変化に関するデータを収集する意図から、ボランティア活動の「出発前」「活動最中」「その後」という時間の経過と、それに伴う変化を軸に質問を作成し、時系列でのデータ収集を試みた。また Patton のガイドラインに従い、Open-ended Interview Question を用いてできる限り自由に発言することを促しつつ、下記の3つの質問が基本形として用意された (Patton 2002: 342)。

- (1) 「震災ボランティア活動に参加しようと思ったきっかけや理由について自由に述べて下さい」
- (2) 「被災地での体験を通して、どのような感想をもちましたか。自由に述べて下さい」
- (3) 「ボランティア活動から戻って、自分にどのような変化がありましたか。自由に述べて下さい」

インタビューとディスカッションにおいては、上記の質問への自由な返答に対して、「それはどういう意味ですか」「もうすこし詳しく話して下さい」といった答えの明確化を促す質問をフォローアップとして行った。行動観察では研究参加者同士の会話や研究者とのやりとりのなかで、本研究に関連性があると思われる非言語的なコミュニケーション、すなわち、語調、言葉の抑揚、表情等が記録された。また本研究では、誘導的質問を避け、自主的発言を促すという観点から、宗教的な事柄に対する発言を意図的に促す質問は用意されていない。研究参加者にはできるだけ自由に、そして何でも語る事が促されており、その内容はすべて彼らが自主的に選んだものである。

#### 4. 結果

本研究のデータ収集が実施されたのは、2011年6月14日から23日の間で、場所は本研究の研究者が所属する大学の食堂、及び教室である。インタビューやディスカッションの内容は、研究参加者の了解を得て電子レコーダーに記録された。音声データは研究者が文字に起こし、その回答の内容、頻繁に繰り返された言葉、また感情を込めて語られた言葉、といったカテゴリーを用いて分け、さらにコーディング法を用いてさらなるデータの細分化と生成を試みた。以下に収集されたデータから導き出された結果を6つの項目に分けて列挙する。

(1) まず「震災ボランティア活動に参加しようと思ったきっかけや理由について自由に述べて下さい」という質問の答えから、研究参加者の多くに共通する、ボランティア活動参加のきっかけや理由が浮かび上がってきた。それらを大別すると、第1は、「何かしたい」「何かしなければならない」という強い気持ちが起こったこと、第2は、被災者の身に起こっていることを実際に見てみたいと思う欲求が起こったことであった。具体的には以下のような言葉が語られた。

「テレビに映る被災者の様子を見て、行かずにはいられなかった」

「同じ日本人が苦しんでいるのを見て、放っておけなかった」

「震災の様子をテレビで見て、このことを人ごとにしたくないと感じた」

「クラスメートがボランティアに行くのを見て、私も行かなくてはいけないと思った」

「友人が積極的に募金活動に奔走するのを見て、自分は現地に行きたいと思った」

「かわいそうと思うだけではなく、実際に行動すべきだという友人の発言に触発された」

「私にできることが何かあるのではないかと思った」

「自分たちでやれることは何だろうと、真剣に考えた」

「被災地の人の苦しみを体感したいと思った」

「どのような困難や苦しみがあるかを知れると思った」

「実際に被災者の様子を見て、同じ苦難を体験したいと思った」

「被災地の人の苦しみをリアルに体感したいと思った」

「実際の被災者の状況をこの目で見てみたいという思いもあった」  
「被災地のためにできることを現地で実際に知りたいと思った」  
「ニュースで見るあの悲惨な場所を自分の目で見てみたいと思った」

研究参加者の多くに「何かしたい」「何かしなければならない」という強い気持ちが起こった引き金として多く挙げられたのは、テレビに映る被災者の苦しみの様子や、震災に関する友人・知人の行動や言葉等であった。また被災地で実際に「見たい」「知りたい」「体験したい」ことの対象としては、被災者が直面する厳しい現状が最も多く挙げられた。研究参加者の多くをボランティア活動へと押し出したのは、被災地の物質的状況というより、被災地の人間的状況に結びつく事柄であると言えるかもしれない。またボランティア活動に参加することを決断した際の思いについて、以下のようなコメントも聞かれた。

「原発の問題もあったので、被爆し、健康に害が加わることも覚悟した」  
「身の安全は保障されていないということに覚悟した」  
「生活は不自由になるだろうと覚悟した」  
「周りの反対を押し切って行ったが、賛同してもらえなくとも良いと思った」

研究参加者の多くは、かなりの覚悟をしてボランティア活動に参加したことがわかる。彼らの多くが抱いた「見たい」「知りたい」「体験したい」という欲求は、ただ単に彼らの自己中心的な好奇心の欲求を満たすためだけでなく、彼らのもつ「被災者のために何かできることをしたい」という強い気持ちを実行に移すためにも、まず「見たい」「知りたい」「体験したい」と思った、ということができるかもしれない。

(2) 被災地の人のために何かしたいというモチベーションに押し出されて、東北三県に向かった研究参加者を待っていたのは、想像を絶する光景であった。津波によって出来た瓦礫の山や、何百人もが一カ所に身を寄せる避難所の様子を彼らは以下のように言い表している。

「先に被災地に行った人から『言葉にならない』という感想を聞き、自分は違う感想をもつのではないかと思ったが、やはり実際言葉が出ないほど驚いた」

「本当にこれが現実なのかなあと思った」

「そこに広がっているのは、ファンタジーの世界の光景なんじゃないかなあと  
思った」

「始めは車から惨状を見て、夢なのではないかと思ったけど、実際に車から降りて、特に魚の生臭いにおいを嗅ぎ、ああ、本当に現実なんだと感じた」

「南三陸町の惨状を見て、絶句した。言葉が出なかった。異様な雰囲気だった」

「この静かな海が、本当にこんな惨状を生み出したことが信じられなかった」

「自分の見た光景が理解できなかった」

「こんな状況を自分の目に入れることになるとは思っていなかった」

「そこに自分がいることが不思議だった」

「ボランティアの作業をしながらも、自分がそこにいることを受け入れられなかった」

「体育館で避難生活をしている人々を見て、それが現実だとはなかなか信じられなかった」

「もし自分が直接この被害を受けていたら、きっと耐えられなかっただろうと思った」

研究参加者の多くは、被災地の様子に大きなショックを受け、被災地訪問から1ヶ月以上経った時点でも、言葉を用いてその時の状況や、自らの思いを説明することに困難を覚えているようであった。

(3) インタビューやディスカッションのなかで、想像を絶する被災地の光景と同等に感情を込めて語られたのは、目の前に広がる悲惨な光景のなかでボランティアとして動く自分自身の有り様や自分に対する思いに関する感想であった。

「行く前は、被災地についたら、さっとすべきことを始めようと思ったけど、実際に多くの被災者の姿を見て、足がすくんで立ち尽くしてしまった。前に進めず、考え込んでしまった」

「あまりの被害の大きさに、私なんか、ちょっと手伝うことに意味があるのかなと思った」

「何か役に立てるんじゃないかなと思っていたけど、自分の働きは本当に役に立つのか疑問をもった」

「被災した人たちの悲しそうな目を見たが、あまりのショックの大きさにかわいそうとか、説明できるような感情は出てこなかった」

「自分には何ができるだろうと思ったが、何も見いだせなかった」

「ボランティアに行く前は、色々やりたいと思っていた自分の浅はかさ、愚かさにかが付いた」

「(ボランティア活動期間の) 5日だけで疲れてしまった自分と、2ヶ月も避難所生活をしている人を比べて、がっかりした。自分はよわいなあと感じたし、悲しかった」

「ドロ出しのボランティアをした家の住人に対し、本当に大変だなあ、辛いんだなあと感じつつも、ベースキャンプに戻ってシャワーを浴びたいと思う自分がとても小さく思えた」

「安全な時に安全な場所から災害の様子を見る自分に対し、自分は何様だろうと感じ、申し訳ないと思った」

「自分は何もできないということ、それだけを学んだ気がする」

「自分の欲望がすべて罪深いことのように思えた」

「何かできると行って行ったが、作業も進まず、自分に何もできないことを思い知らされた」

「ひとりのおばあさんが、家の瓦礫の中で何かを探しているのを見て、「何かお探しですか。お手伝いします」と軽く言ったら、『だんなの死体を探しています』と言われ、返す言葉がなかった。苦悩のレベルの違いを感じ、また自分は本当に傲慢だったと思う」

「自分が東京でもっていた不平や不満は、被災者の苦しみに比べたら何でもないと思った」

「被災した人と同じ気持ちを味わえると思って行ったけど、実際行ったら、まったくレベルが違い、到底それを感じることはできないと痛感した」

「自分には家があるし、ご飯も食べようと思えば食べれるし、家族も傷ついていないし、基本的な必要は満たされているから、ボランティアに来ることができたんだなあと痛感した」

「家も流され、何も無い人の苦しみを味わうことなんて不可能だと思った」

「被災者に対して『大丈夫ですよ』などという言葉を経々しく使えないと思った」

「高齢の被災者が、もう死んだ方がましと言っていたが、返す言葉がまったく見つからなかった。気軽に答えることはできないと思った」

研究参加者の多くは、被災地ボランティアという活動のなかで、自らの能力や技量を再認識し、そのことを通して自分の実状を直視することを、ある意味「迫られた」と感じたようである。またそれは、例えば、「自分は何もできないということ、それだけを学んだ気がする」という言葉に代表されるように、「自分も何かしたい」「被災者の苦しみを共有したい」といった思いを胸に、意気揚々と被災地に乗り込んだ自らの「甘さ」や「安易さ」に対する反省という意味合いが強いように思われた。

(4)「ボランティア活動から戻って、自分にどのような変化がありましたか。自由に述べて下さい」という3つめの質問に対して最も多かった答えは、上記の結果(3)と同様、自責の念を含むものであった。東北三県から戻って1ヶ月以上が経過した時点で、多くの研究参加者は、被災地での体験の鮮明さや、被災者に対する思いが薄れつつあると感じ、それに対してフラストレーションを感じているようであった。

「もう帰ってきてから2ヶ月経つんですけど、だんだん被災地の体験が薄れてきてしまっている自分が居る」

「今も避難所生活をしている人がいるのに、私は普通の生活に普通に帰っている自分がいやだ」

「被災地の人の苦しみ、それを感じた自分を忘れたくないという思いがある」

「被災者のための祈りが、最近ありきたりになってきている感じがする。祈る思いを忘れてしまう時もあり、反省する」

「帰って来てたった2ヶ月なのに、もう100だった被災地の思いが30くらいになっていて、結局自分は自己中心だなと思う」

「満足な物資がないなかで食べたおにぎりの味がすごくおいしかったのを思い出す。いつも食べるおにぎりとは、おいしさも、喜びも違った。でも帰ってきて、2ヶ月経って、普通に感謝なく食事するし、自分のことしか考えていない自分がいて、自分の変わり様には驚いた。がっかりする」

「ボランティアをした時に書いていた日記を見直すと、その時の自分が震災についてとても強い思いをもっていたことがわかる。でも今は、震災の重要度も自分のなかで下がって来ているなと感じ、それがいやだ」

研究参加者の多くは、被災地でのボランティア活動のなかで受けた様々なショックが、時間の経過と同時に徐々に薄れつつあることに、大きな危機感を感じている

ようであった。同時にそのような変化を通して自らの弱さを認識し、それを強く反省しているように思われた。

(5)「ボランティア活動から戻って、自分にどのような変化がありましたか。自由に述べて下さい」という3つめの質問に対して(4)と同様に多かった答えは、ボランティア活動を通して得た、物事に対する新たな観点(「以前は〇〇とっていたが、今は〇〇と思う」という表現が多用された)に関するものであった。具体的な内容は様々だが、「以前はあまり目を留めなかったこと」「以前はあたりまえとっていたこと」等に対して、上記の結果(3)(4)に対するのと同じように、自戒の念も込められた表現を用い、それらが「改められた」と語られることが多いように見受けられた。

「日常生活で起こる様々な出来事一つひとつに、小さな喜びを見いだし、この限りある地上での生活のなかで、それを楽しんでもいいんだと思うようになった」

「震災前は、水道が出たり、電気がついたり、道路が平らなのも当たり前とっていた。そういう当たり前が当たり前ではないと思うようになった。あたりまえのものが、じつは崩れやすいものだということに気が付いた。人間が作り上げてきたものが、たとえば新宿の高層ビルなんかも、じつはもろいものなんだと感ずるようになった」

「色々なことに目を向けなければいけないんだなあと思うようになった。震災も大変だが、世界の他の国々にも多くの苦しんでいる人が居るという現実にも目を向けなくてはならないと思った」

「家に帰ってから節電を心がける私に、原発事故の影響を直接受けていないここで節電しても、被災地の役には立たないよと家族から言われたことに対し、電気を消すことより、それを気にかける心が大切だよと訴える熱い私がいることに気が付いた」

「この震災で亡くなったと同じ数の人が、毎年自殺という形で亡くなっていることに気が付き、被災地で苦しんでいる人もたくさんいるが、自分の周りにも苦しんでいる人はたくさんいるんだなあ強く思わされた。被災地でもそうだが、自分の周りの苦しんでいる人に目を向けることの大切さに気が付いた」

「様々な社会問題に対して無関心なスクールメイトに、世の中にはそれらで本



当に困ったり苦しんでいる人がいるという現実を目を向けて欲しいと思うようになった」

また研究参加者の得た「新たな物事の新たな見方」は、実は被災地でのボランティア活動の最中に気が付き、今に至るまでそれをもち続けているとする言葉もあった。

「ボランティア活動のベースキャンプでの留守番を任せられ、現場に出て行かないことに不満を感じたが、留守番をしながらの皿洗いや仕分け作業も大切な活動の一部だということを思われ、現場に出て行った人たちのためのそのような働きも大切だと思い、小さなことにも意味を見いだせるようになった」  
「ド口の中にあった球根から芽が出て、スイセンが咲いていたんですけど、そんな些細なことに感動する自分がありました。神が造った自然がそこにあることに感動したんだと思います」

また自らのもっていた宗教観の変化に関する言葉もいくつか見られた。

「被災地に行く前は、神は愛であり、すべてのことが神の愛から出ていると確信していた。被災地から帰ってきて、神は愛であるという信念は変わらないが、そのことを簡単に口に出したり、そのことを安易に祈ったりするべきではないと思うようになった」

「被災地での祈りのなかで、神様の計画とか、神のみこころという言葉が、まったく使えなかった。以前は、そういった言葉を頻繁に使っていたけれど、物事をあまり深く考えずに使っていたと思う」

多くの研究参加者が新しく得た観点（ものの見方）の具体的な内容は多様だが、それらは彼らの「価値観」や「世界観」の大きな変化につながる内容であるように思われる。

(6) 研究参加者の全員に、質問の(3)へのフォローアップとして、ボランティア活動後にどのような「振り返り」の機会があったかを尋ねた。「友達や家族と少し話した」「自分のなかで反省した」といった答えは多くあったが、「ボランティア体

験を振り返る」という目的をはっきりと設定し、きちんと時間を確保したうえでのグループディスカッションやインタビューの機会はなかったと答えた。また本研究のインタビューとグループディスカッションに対する感想を求めたところ、以下のような返答があった。

「インタビューの質問で、色々な感情や思いが引き出された」

「自分が自分の体験を口に出して話すことによって、自分の考えがはっきりした部分もあった」

「ボランティア体験について、感覚的な記憶はあるけれど、それを口に出して伝えるのは難しいと思った」

「グループのほかの人の話から、教えられたことがたくさんあった」

「人の言っていることを聞いて、自分の思いとの相違点や、思い出したことや、気がつかされたことが多くあった」

「ボランティア体験の内容は似ていても、そこから受け取ることや考えること、学ぶことは人それぞれなんだなあとと思った。ああ、そうなんだと思うこともあった」

「被災地のことを忘れないように努力している人の話を聞いて、私もそうしようと思った」

本研究を通して、はじめて自分に起こった変化に気がつき、自分の思いが明確化されたと言った参加者も多くあり、またインタビューやディスカッションが有意義であったと言った者も同様に多かった。

## 5. 分析

研究結果の分析には、研究データ収集と同様、質的研究における Triangulation の方法が用いられる。具体的には、宗教学や社会学、また心理学といった、複数の学術的観点からなされた研究結果等を参考にしつつ、上記の6つの結果の検証を行う。

(1) ボランティア活動を、社会心理学の観点から研究する David Gerald (1985: 236-238) と Louis A. Penner (Penner and Finkelstein 1998: 525-537) は、

様々な人間がボランティア活動に足を踏み入れる経緯を調査、分析し、それを「determinants for volunteer work: ボランティア活動(参加)を決定付ける要素」として以下の4種類の形態(model)に分類した。

- ① role-identity model : 社会奉仕活動が属するグループの強いアイデンティティーである場合
- ② values and attitudes model : 社会奉仕活動の必要性に対して強い信念をもつ場合
- ③ volunteer motivations model : 自らのスキルアップや自己充実のための社会奉仕活動である場合
- ④ volunteer personality model : 純粹に人を助けたいと強く感じる場合

Gerald と Penner は、ボランティア活動に従事する者が、必ず上記の4つのモデルのどれか一つにだけあてはまるということではなく、複数の要因のなかで、どれか一つが最も強い場合が多いことを強調する。本研究に参加した大学生が、震災ボランティア活動に挑むきっかけとなったのは、「被災者の苦しみを他人事としたいくない」「被災者の苦しみを知ることによって彼らを助けたい」といった強い思いからであったことはすでに結果(1)で述べたが、それを見る限り、彼らの多くは、Gerald と Penner の提唱する4つのモデルの2番目と4番目、特に4番目の「volunteer personality model : 人を助けたいと強く感じる場合」に最もよく当てはまるのではないかと思われる(Thoits and Hewitt 2001: 115-131)。残念ながら本研究によって収集されたデータからは、なぜ彼らが当初そのような思いをもっていたのかという理由までを伺い知ることはできないが、本研究で記録された様々な内面的な変化は、そのような思いに後押しされてボランティア活動に参加した学生に起こったという部分は特筆すべき相互関係であると思われる。

(2) 本研究の参加者は、被災地で彼らが目にした光景を、「口では言い表せない」「信じ難い」という言葉を使って伝えようとし、さらには「異様な光景」「絶句した」「不思議だった」「ファンタジーの世界」といったフレーズも飛び出したことは、研究結果(2)で記した。このような日常を越えた震災危機体験は、どのような宗教的インパクトをもたらすものであろうか。社会心理学者で、宗教回心論を専門とする Lewis R. Rambo と Charles E. Farhadian は、危機(crisis)によって個々に生

じる宗教的变化を以下のように説明している。「危機によってもたらされる無秩序と混乱は、個々がそれまで『当たり前』と思っていた世界観に疑問を投げかける役目を果たすものである」(Rambo and Farhadian 1999: 25)。Rambo は、危機を、外的な危機と内的な危機の2種類に分類する。内的な危機は、体や精神の病、個々の考え方の変化に起因し、外的な危機は、政治的变化や天変地異、さらには人間関係の変化等の人間的な要因もそこに含まれるとしている(Rambo and Farhadian 1999: 26)。また危機を通して個々の日常に鋭く投げかけられた疑問に対して、それぞれがどのような態度で臨むかによっても、宗教心の変化に大きな違いが現れると Rambo は主張する。ある者は、疑問に対して消極的な態度を示す。その場合、大きな宗教心の変化が起こることは少ない。ある者は積極的にその疑問に対する答えを模索しようとする。その場合、その過程で世界観が変化し、それが宗教的回心につながる人が多いのである。

宗教教育学者で、若者の宗教性を専門に研究する Steve Fortosis は、危機体験について以下のように述べている。「発達論の立場から考えて、危機体験は、若者が成長した宗教性をもつに至るプロセスのなかで、非常に重要な位置を占めるものである。多くの若者は、危機体験を意図的に避け、それによって(ポジティブな)宗教性の成長の機会を逃してしまうのである」(Fortosis 1995: 241)。Fortosis は Rambo 同様、若者の危機体験を、宗教性のポジティブな変化と結びつけ、それを宗教的成長の好機として位置付けている。

さらに日本人の若者を対象にした研究としては、筆者が2009年に米国の宗教教育学会の学会誌 *Religious Education* で発表した、米国のキリスト教系大学に在学する日本人大学生の宗教心の変化を調査した研究があり、そこでは留学中に起こった様々な内的危機体験が研究参加者の宗教に対する思いに大きな変化をもたらし、またそのことによって、宗教に対するネガティブな感情が、ポジティブなものに変わったという研究結果を報告している(Okamura 2009: 104-103, 289-302)。

本研究の参加者はどうであろうか。まず彼らは、東日本大震災という危機に対して、ある意味自分の身の安全や、自分の時間を犠牲にして、そこに積極的に足を踏み入れた若者達であると言える。また自分が置かれた危機的状況のなかで、彼らの多くは、そこから投げかけられる大きな疑問を、自分自身の問題として受け止め、結果(3)(4)にも記されているように、「思い知らされた」「傲慢だった」などという言葉を用い、新たにされた自らの思いを説明している。本研究に記録された事

柄のなかで、宗教に関する直接的な言及の占める割合は比較的小さかったが、震災ボランティア活動は、少なくとも上記された社会心理学や宗教教育学の立場から、彼らにとってポジティブな宗教的変化をもたらす可能性を内包する活動（チャレンジ）であったと言えるのではないだろうか。

(3) ここで上記された宗教性のポジティブな変化について、それを「成長」や「発達」といった側面から、さらに具体的に考えてみたい。米国における宗教心理学研究や宗教教育学研究に多大なる影響を与えた Emory University のジェームズ・ファウラー (James W. Fowler) は、エリクソン (Erick Erickson) の心理発達論や、コールバーグ (Lawrence Kohlberg) の道徳発達論のモチーフに基づき、独自の faith development theory (信仰発達論) を構築したことで有名である。彼はキリスト教神学者のパウル・ティリッヒや、リチャード・ニーバーの人間理解に習い、「信仰」を「超越者との関係性に関して、全ての人間のもつユニバーサルな要素」として扱い、さらに「信仰」の成長と「心理的」な発達を区別せず、一つの発達の枠組みの中に両者を入れて理解することを提唱した。Fowler のユニークさは、「心理的発達」の概念を宗教の領域に受け入れたのと同時に、「信仰の発達(成長)」の概念を個別の宗教の閉鎖的な枠組みから取り出したことにあると言えるだろう。Fowler の信仰発達論は現在も欧米の宗教教育研究における一つの重要なセオリーとされている。以下が彼の提唱する信仰発達論の段階 (stages) である (Fowler 1981)。

第一段階「Intuitive-Projective faith : 直感的信仰」: 子どもが親の「目に見える信仰の形」を直感的に模倣する。自らの信仰に対する論理的な考察はない。

第二段階「Mythic-Literal faith : 神秘的で文字通りの信仰」: 現実と非現実を識別し、親以外の「信仰の形」を受け入れることができる。しかし物事を抽象的に考えることはできない。

第三段階「Synthetic-Conventional faith : 模造された紋切り型の信仰」: 家族や友人といった自分の周囲にある大切なグループや権威に自らを合わせる形で信仰を形成する。理論的な考察は浅く、物事を短絡的に考える傾向がある。

第四段階「Individuative-Reflective faith : 個人的で熟考された信仰」: グループや権威による信仰の形を批判的に見ることが可能。自主的な信仰の形成を試みるが二者択一的な理論展開が多い。

第五段階「Conjunctive faith：関連性、関係性を重視する信仰」：信仰の自主性に限界を感じ、他者の異なる主張や、逆説的なメッセージに理解を示す。相対主義的にはならず、自らの信仰の形を大切にしつつも、異者との対話や共存の可能性を探る。

第六段階「Universalizing faith：普遍的信仰」：真実の多元性や逆説性に対する迷いと共に自我を捨て、神の意志に身を任せ、社会貢献に尽くす信仰の形。

Fowlerの信仰発達論によると、高校生から大学生（16, 17歳から21, 22歳）は、ちょうど第三段階と第四段階の狭間に位置する。第三段階の信仰は、重要な周辺他者に強く依存する形で成立し、第四段階の信仰は、そのような他者の影響から離れ、自主的な信仰の形成を目指すものである。例えば自らが属するコミュニティーのなかの重要人物（先生、親、先輩等）から強い影響を受け、その信仰の形を模倣していた若者が、様々な世界観や価値観の課題、また自らのアイデンティティーの課題に自主的に取り組むことができるようになるのが、第三段階から第四段階への変化なのである。またこの変化は、青年期に訪れることが一般的である一方で、大人になっても第三段階の信仰で止まり、前に進まないケースも多々見受けられることも指摘されている（Fortosis 1995: 231）。では信仰の第三段階から第四段階に進むには、いったい何が必要とされるのだろうか。個々の若者の静かなセルフ・リフレクションを通して起こるケースも想定できるが、多くの場合それは既存の世界観や価値観が揺り動かされる体験を通し、それまであたりまえと思っていた物事に対して疑問をもつような場面で起こるとされている（Fortosis 1995: 231）。それは分析(2)で触れたRamboやFarhadianの危機体験にまつわる宗教的变化に関する記述と相容れるものである。

ここで本研究の参加者の体験をもう一度見てみたい。ボランティアとして自分が置かれた状況のなかで、彼らの多くは、そこから投げかけられる大きな疑問を敏感に感じたようである。結果(5)にも記されているように、彼らの多くは、それまで大きな疑問をもつことなく受け入れていた事柄や、「当たり前」と思っていたものの見方が、実はそうではなかったという結論にたどり着いている。研究結果(3)(4)からは、参加者の多くに、自らの「足りなさ」や「弱さに」直面し、それを繰り返し反省する様子を見ることができるが、このような内省もまたFowlerの語る信仰の発達のかかしであると言えるだろう。

また Fowler が参考とした心理発達論を展開する Erickson は、Fowler の第三段階と第四段階の狭間にあたる時期に、「同一性対同一性拡散」という心理的危機が訪れると主張する。同一性とは「自分は何者か」「何を信じるのか」といった問いかけに対する答えを中心とするものであり、言い換えれば自分のアイデンティティーを探す旅に出る時期と言うことができ、またこの時期の重要他者は権威者から peer（同年代の若者）に移行する（エリクソン 1973: 111-118）。インタビューやディスカッションの最後に、「グループのほかの人の話から、教えられたことがたくさんあった」「被災地のことを忘れないように努力している人の話を聞いて、私もそうしようと思った」といったコメントが多く聞かれたことについては結果（6）で記したが、ボランティア活動を引き金に得た新しい世界観や価値観には、peer の影響を受けて形成された部分もあったことが見受けられる。

今回の研究結果のみから、研究参加者の（Fowler の定義する）「広義」の信仰が、Fowler の提唱する信仰発達の段階を上（第三段階から第四段階に）進んだという結論に至ることは難しいが、彼らの多くにとって、ボランティア体験は、少なくとも Fowler の提唱する信仰発達の段階を上る足がかりになりうるものであったと言えるのではないだろうか。研究参加への今後の追跡調査が実施されれば、さらに具体的な宗教心の変化や信仰の成長の様子を見ることも可能かもしれない。

(4) 研究参加者たちが、本研究で用いられたインタビューやグループディスカッションという方法そのものに対して、非常にポジティブな感想をもったことについても言及する必要があるだろう。研究者は今回の研究過程において一切、研究対象者に対して自らの意見を述べることも、助言をすることもなかったが、彼らの多くは今回の研究が、自らのボランティア体験を深く、また客観的に振り返る良い機会であったとコメントした。

本研究で用いられた質的研究は、人間の生きた経験（lived human experience）の本質を記述し、それを研究することを目的とするという点において、フッサールにより提唱された現象学にその起源があることはすでに言及した。ボストン大学神学部学部長で、宗教教育が専門のメリー・エリザベス・モアー（Mary Elizabeth More）は、その著書（More 1998: 99）のなかで、現象学に基礎を置く現象学的教育方法を、宗教教育における一つの最も重要な教育方法であるとし、強く提唱している。それは従来の「先生が語り生徒が聞く」というトップダウンの教育方法ではなく、学ぶ者がそれぞれの体験を持ち寄り、またそこで起こるインタ

ーアクション（相互作用）を通して、それぞれがおのおのの結論を形成するという教育方法である。

結果(6)では、「(インタビューの) 質問で、色々な感情や思いが引き出された」「人の言っていることを聞いて、自分の思いとの相違点や、思い出したことや、気が付かされたことが多くあった」「グループのほかの人の話から、教えられたことがたくさんあった」といった意見が多く聞かれた。それはまた同時に、振り返りの機会がそれまで彼らに与えられていなかったことを示すものであり、ボランティア活動を大学生の貴重な学びの一部とするうえで、そのような振り返りの機会を提供することが、欠かすことのできない重要な部分であることも再認識するべきであろう。

## 6. 提言

本研究は、震災ボランティア活動に参加した9名の大学生の生の声というデータに基づいて考察されているものであるが、研究者は、研究参加者のボランティア体験のごく一部を垣間見たにすぎない。特に個々の学生の内面的な変化や、宗教的な変化は、心の深い場所で起こる現象でもあり、そのようなものがすべて表面化され、記録されたわけでもない。さらには、質的研究は、研究者の主観的な判断が多用される研究方法であり、また本研究の研究者が、研究参加者の所属する大学の教員であったことも、例えばインタビューにおける返答に何らかの影響をもたらしたことも十分に考えられる。繰り返しになるが、質的研究の結果は、量的研究のそれと対比させ、二項対立の図式のなかでその優劣が競われるべきものではなく、研究の目的を果たすためにあらゆるデータを活用するというスピリットのなかで、説得力をもつ実践的な取り組みの手掛かりとして活用されるべき類のものである。そのような質的研究の特徴と現実をふまえつつ、以下に本研究を通して明らかになった事柄からの、研究者による2つの提言を記し、本研究の結びとしたい。

(1) 日本社会に様々なボランティア活動の機会が存在するなかで、震災ボランティアは、それが必要とされる場所、時期、また内容において、非常にユニークな活動である。特に東日本大震災は、歴史的な被害をもたらした大災害であり、その現場での活動と他のボランティア活動を単純に比較することはできない。本研究で記録された学生の生々しい感情の動きや感想がそれを明らかにしていると言えるだろう。しかし一方で、様々なタイプのボランティア活動が、特に高等教育機関におい



てその重要度を増しつつあることは事実である。特に近年取りざたされている「サービスマーケティング」は、「大学が有する潤沢な知的資源は、大学や研究者、学生だけに占有されるべきではなく、広く地域社会の人々にも還元されるべきである」という大学開放の理念に基づくものである(志々田 2007: 48)。しかし、大学を通して行われるボランティア活動を、「社会に対する貢献する」という方向からのみ捉えるのではなく、ボランティア活動の現場で起こる様々な困難やチャレンジを通して、「社会に学生の成長の機会を提供してもらう」という方向からの視点も重要であると思われる。様々なボランティア活動に共通して、それらが「満足感、達成感の体験」「健康的なセルフアイデンティティの醸成」「精神的安定」といったポジティブな結果をもたらすことは、すでに心理学や社会学の観点から頻繁に指摘されている(Thoits and Hewitt 2001: 118)。またボストン大学の学生を対象として実施された実践宗教倫理の研究では、大学生の倫理的発達に関して、社会倫理の授業を受けただけの学生と、ボランティア活動等を用いた実地体験を授業と併用させた学びを体験した学生では、後者の学生の倫理発達がはるかに勝っていたことに加え、彼らの多くが社会の弱者に対する自主的な活動にも積極的に取り組むようになったことが報告されている(Gorman, Duffy, and Heffernan 1994: 422, 429)。加えて本研究で明らかになったように、ボランティア活動が、Rambo や Fowler の指摘するような宗教心(または広義の「信仰」)のポジティブな変化や発達を促す経験になりうることを覚えるとき、大学におけるボランティア活動を通じた教育の重要性は、今後特にキリスト教系教育機関によって再認識されるべきであろう。

(2) 本研究を通して明らかになった研究参加者の具体的な内面的変化に、もし題をつけるとすれば、それは「自己を反省する」「苦しむ者を思う」「自分の周りの弱者に目を向ける」といった言葉に集約することができるかもしれない。被災者を助けたいという思いから被災地に向かった彼らが直面したのは、想像を絶する苦難であった。そのなかで彼らの多くは、当初自らがもっていた正義感や同情心を、それが安易であったと猛省しつつ、それでも彼らにできることを模索した。そのなかで多くが行き着いたのは、被災者の苦しみを忘れない努力を続けることや、今自分が置かれている場所で苦しむ人に目を向けることであった。これらは多くのキリスト教主義大学の建学の精神や教育の理念で唱われている「謙虚な姿勢」「他者理解」「隣人愛」「社会奉仕」といった教育目標に沿うものであると言えないだろうか。ボランティア活動によってのみ、これらを体得することができるということではないに

しる、少なくとも、学生の世界観に大きな疑問を投げかける機会となる類いのボランティア活動は、キリスト教精神や世界観を教育する上で非常に有意義なツールであることに間違いはない。

加えて、Gerald と Penner が、社会奉仕活動がグループの強いアイデンティティである場合、そのグループに属する者は、ボランティア活動に積極的に参加するようになると主張したように、キリスト教主義大学が、ボランティア活動に継続して取り組みつつ、それを大学の大切なアイデンティティの一つになるような努力をするとき、大学は多くの学生に対して人間としての大切な成長の機会を提供することができるようになるばかりではなく、地域社会と大学の絆をさらに深めることも可能となるのである。

#### 【参考資料】

- 大谷尚 (2008) 「質的研究とは何か」『教育システム情報学会誌』25 (3) . 教育システム情報学会  
エリクソン, エリク 小此木啓吾訳 (1973) 『自我同一性』誠信書房  
萱間真美 (2007) 『質的研究実践ノート』医学書院  
木下康仁 (2007) 『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法—修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂  
志々田まなみ (2007) 「社会貢献活動と学習活動の融合—サービスマーケティング論」『広島経済大学研究論集』30 (1・2). 広島経済大学経済学会  
ウヴェ・フリック 小田博志ほか訳 (2002) 『質的研究入門—人間の科学のための方法論』春秋社

Fowler, James W. (1981) *Stages of Faith*. San Francisco: Harper & Row.

Fortosis, Steve. (1995) The Religious Education for College Students. In Atkins, Harley.(ed.) *Handbook of Young Adult Religious Education*. Birmingham: Religious Education Press.

Gerard, David. (1985) What Makes a Volunteer? *New Society* 74(8): pp. 236-238.

Gorman, Margaret, Joseph Duffy, and Margaret Heffernan. (1994) Service Experience and the Moral Development of College Students. *Religious Education* 89(3) Summer.

More, Mary E. *Teaching from the Heart: Theology and Educational Method*. Harrisburg: Trinity International.

Okamura, Naoki. (2009) Intercultural Encounters as Religious Education: a Phenomenological Study on a Group of Japanese Students at a Christian University in California and Their Religious Transformation. *Religious Education*, pp. 104-103.

289-302. (和訳題「異文化体験と宗教教育—カリフォルニア州のキリスト教系大学に在学する日本人留学生の宗教心の変化に関するグラウンデッド・セオリーを用いた質的研究」)

Patton, Michel Q. (2002) *Qualitative Research and Evaluation Methods*. Thousand Oaks: Sage Publications, Inc.

Penner, Louis A. and Marcia A. Finkelstein. (1998) Dispositional and Structural Determinants of Volunteerism. *Journal of Personality and Social Psychology* 74(2): pp. 525-537.

Rambo, Lewis R. and Charles E. Farhadian. (1999) Converting: Stages of Religious Change In Lambo, Christopher and Bryant M. Darrol. *Religious Conversion: Contemporary Practices and Controversies*. London: Cassell.

Strauss, Anselm. and Juliet Corbin. (1998) *Basics of Qualitative Research*. Thousand Oaks: Sage Publications, Inc.

Thoits, Peggy A. and Lyndi N. Hewitt. (2001) Volunteer Work and Well-Being. *Journal of Health and Social Behavior* 42 (June): pp. 115-131.

関口靖広『理論生成とグラウンデッド・セオリー・アプローチ』(<http://web.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~ysekigch/qual/grounded.html>) 2010.1

# 神学大学による介護福祉士養成の意義

## 介護福祉士の専門性に必要な教育内容を中心に<sup>1</sup>

中澤秀一

(東京基督教大学准教授)

### 1. はじめに

本小論では、東京基督教大学神学部 国際キリスト教福祉学科 キリスト教福祉学専攻（以下「キリスト教福祉学専攻」）における介護福祉士養成の意義について明らかにすることを目的とする。

キリスト教福祉学専攻は2008年度に開設され、聖書の学び及びキリスト教世界観に基づくリベラル・アーツ教育を土台に、新しい福祉文化の創造を担う人材（介護福祉士）を育成している。しかし、「多くの介護福祉士養成施設では2年制課程で習得できるのに4年制にする必要はあるのか」「なぜ神学部で介護福祉教育をしなければならないのか」などの指摘がある。

これらに対する一つの回答としては、キリスト教福祉学専攻が単に介護福祉士資格の取得を目的としていないという点にある。一般的に考えられているケアの内容には、身体的ケア、心のケア、社会的ケアがある。また、福祉の仕事内容では、身体的ケアは主としてCare Worker（介護福祉士）、心のケアはPsychiatric Social Worker 精神保健福祉士、社会的ケアはSocial Worker（社会福祉士）が担当している。しかし、それ以上に私たちの「生活世界」の全体にはスピリチュアルな部分がかかっているのである（稲垣 2010: 86-87）。したがって、援助を必要とする人に「生きる意味」を与え、自律・自己実現への支援をするには総合的な「ケア」学を学び資質を習得した人材を育成することが喫緊の課題であるといえよう。

換言すれば、キリスト教福祉学専攻では、総合的ケア専門職を養成しているのである。そこで、本小論では総合的なケア学を学び資質を習得した人材のあるべき姿

---

1 小論は、中澤（2012）「今後の介護福祉士養成教育の課題—スピリチュアリティを考え問う科目の必要性」、中澤（2012）「介護福祉士養成教育におけるカリキュラム研究—『求められる介護福祉士像』の基礎学力習得に関して」を元に改稿した。

を「求められる介護福祉士像」に見い出し、キリスト教福祉学専攻が存在する意義と総合的専門職養成における独自の教育内容について述べていく。

## 2. キリスト教会における「ケア」実践の歴史と現状

キリスト教会は、社会福祉の専門家の出現するはるか以前から、人々の様々な必要に関わってきた歴史がある。ヨーロッパにおける3世紀までの初期のキリスト者は、寡婦の世話をすることがバプテスマの必要考慮事項としたり、捨て子や孤児の養護、奴隷の自由を保障するための身代わり、キリスト者の交わりに加わるために職を失う者には、富者が職を提供するか基金から支援をしていたことも知られている。特に、18、19世紀にはキリスト教会、個人のボランティア組織、教派の組織が、寡婦と孤児、飢餓、スラム、精神的病、障害者への支援、労働者の権利擁護、刑務所の改善などに取り組んでいた。

また、米国においても、社会福祉の課題の取り組みをキリスト教会と社会事業が「共同」して行っているなど、現在でも社会福祉における教会の働きは大きい（古川 2007: 46）。しかし、日本においては戦後福祉制度の中でキリスト教会の関わりが見られなくなった。つまり、キリスト者個人が福祉関係の仕事に従事することはあっても、制度としての教会が福祉に従事することはできていないのである（稲垣 2012: 4）。

阿部志郎（2001: 215-216）は、キリスト教会の社会福祉に対する考え方を次の3つの型に分類している。

- (1) 福音と文化、教会と社会を二元的に把握し、教会は伝道だけに専念すべきであって、社会福祉にかかわるべきでないという主張。
- (2) 狭義の教会形成を第一義的に考え、教会が確立し財政が充実した後に社会福祉活動を展開するが、未だ教会が社会福祉をする現状にはないとする宣教方策に基づく立場。
- (3) 伝道を社会福祉に直結させ、社会福祉を伝道の手段として活用する立場。

そして今日、教会から離れた社会福祉の世俗化をどうしたらよいかヨーロッパ教会の問題であるが、初めから教会から離れていた社会福祉をいかに教会と結びつけるかが日本の問題であると述べている。

歴史的にみてもキリスト教の宣教と福祉実践は、一つのミッションとして同時並行的に進行したとき「地の塩」としての役割を果たしている。明治期のキリスト教

社会事業家の代表である山室軍平や石井十次、その後の賀川豊彦においても、彼らがことばによる宣教を重んじ、教会と呼応しながら、宣教と福祉実践（行いによる宣教）を行ったときはじめて両者が躍進していつているのである（木原 2007: 34）。

### 3. 介護を包括する概念としてのケア—否定的イメージと魅力・やりがい

ケアとは、看護や介護、世話や配慮など様々な意味で使われているが、広井良典（2000: 14-15）はケアの意味を、①もっとも広義なもの「配慮・気遣い・関心」など人が他の人を「気にかける」ことのすべて、②「世話」など少し限定された中間的なもの、③最も狭義のもので医療や福祉などの分野において特化された「専門的」「職業的」意味を持つもの、というように「かかわり」と「専門的」「職業的」なものとしている。

介護の仕事というと、2007年に起きた「コムスンショック」以降、その内容よりも給与面等の外的要因から来るマイナスイメージが広まっている。しかし、介護の仕事は、決してマイナスイメージだけで語られるものではない。たとえば安田の調査によると、介護職員の「印象に残る出来事」として取り上げられた内容の8割以上が「対利用者」に関する事柄であり、出来事に対する感情も「うれしかった」「感動した」等の肯定的なものが約8割を占めていた。また「3K」「4K」といったマイナスイメージの要素は、この調査からは感じられず、否定的な感情の内容も、介護の仕事が嫌になったというような離職や転職願望ではなく、利用者への働きかけがうまくいかなかった等の自分の介護の取り組みに対する反省を込めた内容だということである。さらに、介護の仕事は、日々の利用者との「かかわり」から多くの「喜び」や「感動」等の肯定的な感情を介護職員に起こすものであり、利用者への働きかけや質の高いケア等を日々工夫していくという大変創造的な仕事であると締めくくっている<sup>2</sup>。

これと同じような例として、マザー・テレサが蛆だらけの臨終の女性をケアした場面で、ケアを受けた女性は「ありがとう」と感謝を一言述べて亡くなった。このときマザー・テレサは、「彼女は、私がしたことよりももっとたくさんのことを与えてくれました」と述べている。さらに、社会福祉関係者なども「施設にいて、自

---

2 この調査は2011年から2年間の計画で着手している。詳しくは、安留（2012）を参照。

分はたくさんのもを利用者からいただいている」ということもよく聞く話である。このように、否定的なイメージがあるにもかかわらず、ほとんどの職員が魅力ややりがいを感じている現状からすると、職業としての介護が、「魅力」や「やりがい」についても広く社会に伝えられ正しく理解される必要があるといえる。

#### 4. 専門職のケアと自己成長

これらのことは、一見ケアを行うものがケアを受ける者から何かのエネルギーを与えられているようにも受け取られるが、それだけではなくケアには「かかわりのエネルギー」が流れるといわれている。

すべての人間は、かかわりの中で生まれ・育ち・死んでいく。したがって、人間の「生の原点」は「かかわり」の中にあるといえる（井上 1995: 147-148）。ケアは、このような「かかわり」、さらには「全人的かかわり」の一つであることから「生の原点」に触れる業務なのである。

井上（1995: 147-148）は、ケアの基本を新約聖書の「善いサマリア人」（ルカ 10:25-27）のたとえにあると述べている。ここで、祭司とレビ人は、「彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った」が、サマリア人は、「そこに来合わせ、彼を見てかわいそうに思い、近寄って傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで、ほうたいをし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行き、介抱してやった」。

つまり、「反対側を通り過ぎて行った」祭司とレビ人は、傷ついた旅人を見ても隔てをおいて見るだけなのでかかわりの発端もない。しかし、サマリア人の傷ついた旅人に対して「傷にオリーブ油を塗る。ぶどう酒を注ぐ。包帯をする。」行為は、当然のことながら傷の処置に関する知識や技術を持ち合わせていたのである。また、サマリア人の「憐れに思い」という姿勢は、ギリシア語の原文では（はらわた）という名詞に由来する動詞である。この「はらわた」は、内臓なので意識して動かせるものではない。すなわち、「はらわたして手が出る」のは、分別に手引かれて恣意的に「手を出す」という次元のものとは全く違うもので、相手とのかかわりにおいて、気がついてみたら「手が出る」というものを意味しているのである。つまり、この場面で思わず手が出たのは知識の裏付けにより、傷ついた旅人の状況を一瞬のうちにアセスメントしてかかわったということである。

例えていえば、今日 AED が身近な場所に備え付けられているが、多くの人は道

端に倒れている人に出会った場合、手を出そうにも出せない。つまり、AEDに関する知識や技術とそれを使うか使わないかを判断できなければ適切な行動はできないのである。

これらから、「善いサマリア人」のたとえは、①かわいそうに思う「倫理・価値観」と、②近寄って傷にオリーブ油とぶどう酒を注ぎ、③包帯をし、④家畜に乗せて宿屋につれて行き、介抱する専門的知識・技術に裏付けられたかかわり、すなわち専門職としてのケアなのである。

さらに、「はらわたして手が出る」専門職のケアは「かかわりのエネルギー」に触れることになる。この点について図1と図2をみてみよう。

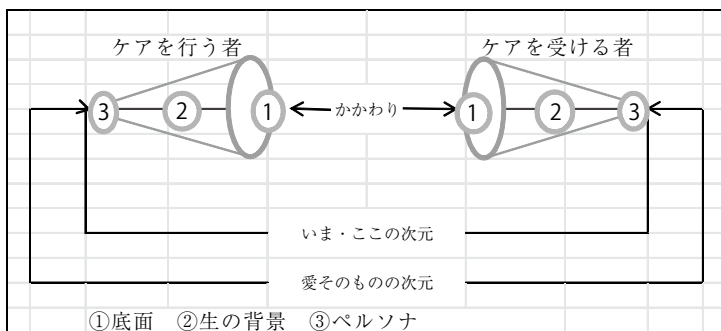


図1 ケアを行うものとケアを受ける者の関係  
(井上 [1995] 「かかわりとケア」より筆者改変)

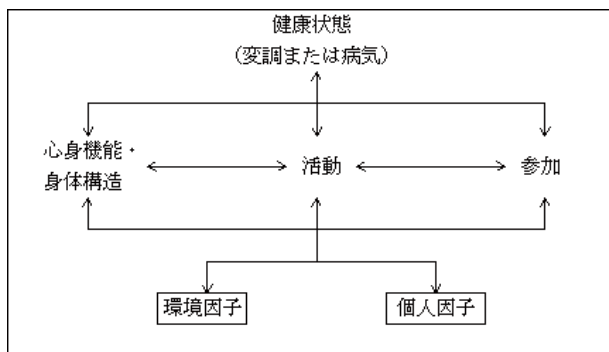


図2

(『国際生活機能分類—国際障害分類改訂版 (日本語版)』の厚生労働省ホームページ掲載について)より作成)



ケアを行う者とケアを受ける者とのかかわりを図1に示す(①お互いに見・聞き・触れなど感受できるところ, 底面。②お互いに見・聞き・触れなどできない歴史・風土・文化・価値観・宗教観などという, その人物の「生の背景」。③ペルソナという行為の基本, 「その人物そのもの」である)。

これは, 図2の国際生活機能分類でいうと, ①は心身機能・身体構造, 活動, 環境因子, ②は個人因子, ③は健康状態や参加(特にこの下位概念の宗教とスピリチュアリティ)に相当し, 現代の人間の生活機能そのものに当てはまる。

井上によると, ケアを行う者がケアを受ける者に全人的かかわりを持つことは, 相手の底面①や生の背景②よりも深い次元の相対者そのものであるペルソナにかかわっていくことになるという。このことは, ペルソナを根底から支えている「愛そのものの次元」(井上はこれを「神の次元」と呼んでいる)までつながっていく相互作用になるのである。したがって, 既述した介護職員やマザー・テレサの発言は, 彼・彼女らをも「生かしているエネルギー」に恵まれているからこそその発言といえるのである。そしてこの「愛そのものの次元」に出会う・気づくということは, それによってケアを受ける者だけでなく, ケアを行う者も, 根底から支えられていることに気づいていくことになる。すなわち, 専門職のケアにはこのようにケアを受ける者だけでなく, ケアを行う者にも作用しているエネルギーやちからに触れることになるのである。このことにより, 人間の存在そのものを根底から支える「生かしているエネルギー」を, 相手だけではなく自分自身も受けて成長をさせられるのである(井上 1995: 96-98, 104-105, 1989: 48)。

## 5. ケア専門職の姿「求められる介護福祉士像」と基礎資質

2006年, 厚生労働省における「介護福祉士のあり方及びその養成プロセスの見直しに関する検討会」で取りまとめられた報告内容には, これからの「求められる介護サービス」(厚生労働省 2006: 5)として以下の4点を示している。

それは, 第一に, 障害の有無や年齢にかかわらず個人が尊厳をもった暮らしの確保及び利用者の個性や生活のリズムを尊重した介護の実践。第二に, 認知症の増加をはじめ発達障害のある者への対応など, 心理, 社会的なケアのニーズも踏まえた全人的なアプローチ。第三に, 介護予防から看取りまでの幅広い介護ニーズに対応するため, 医学や看護, リハビリテーションや心理などの他領域の基本的な理解や, 利用者や家族, チームに対してわかりやすい説明や円滑なコミュニケーションがで

きる能力。第四に、情報の共有の観点から、適切に記録・記述できることや、適切に記録を管理することである。

これは、1988年の介護福祉士制度創設以来約20年が経過し、寝たきりでない認知症高齢者の増加や医療依存度の高い障害者及び精神障害者への介護など、その間の福祉・介護をめぐる状況の変化により、介護ニーズに対応できる人材養成を求められてのことであるといえよう。

このような状況を踏まえ、厚生労働省は表1のように介護福祉士のあるべき姿として「求められる介護福祉士像」（厚生労働省2006）を示している。そして、今後は、介護福祉士制度の見直しに係る検討を行う様々な場においても、この「求められる介護福祉士像」を実現していくことが最終的な目標であるとしている。

表1 求められる介護福祉士像の資質

<ol style="list-style-type: none"><li>① 尊厳を支えるケアの実践。</li><li>② 現場で必要とされる実践的能力。</li><li>③ 自立支援を重視し、これからの介護ニーズ・政策にも対応できる。</li><li>④ 施設・地域（在宅）を通じた汎用性ある能力。</li><li>⑤ 心理的・社会的支援の重視。</li><li>⑥ 予防からリハビリテーション、看取りまで、利用者の状態の変化に対応できる。</li><li>⑦ 他職種との協働によるチームケア。</li><li>⑧ 一人でも基本的な対応ができる。</li><li>⑨ 「個別ケア」の実践。</li><li>⑩ 利用者・家族、チームに対するコミュニケーション能力や的確な記録・記述力。</li><li>⑪ 関連領域の基本的な理解。</li><li>⑫ 高い倫理性の保持。</li></ol>
--

〔介護福祉士のあり方及びその養成プロセスの見直し等に関する検討会報告書〕より筆者作成

これらの資質を読み取ると、ケア学の資質、すなわち身体的ケア、心のケア、社会的ケア、そしてスピリチュアル・ケアを総合的に対応できる能力を表しているといえよう。

このような、「求められる介護福祉士像」を含め、各専門分野には「求められる人材像」が、経済団体や各省庁すべての分野において提言されている。これらの共通的な資質としては、①当該分野の専門知識の土台となる「各分野における基礎的な知識」の徹底的な理解、②産業のグローバル化に伴い、多様な地域で、様々な人々と一緒に仕事をしていくための「グローバルな感覚」の素質、③開発から商品・サ

ービスまで、一連のバリューチェーンを俯瞰しプロジェクトを遂行していく「マネジメント力」、④学んだ知識を現場に適用し有効に活用していくための能力として、「課題発見・解決力」「コミュニケーション能力」、等である（社団法人関西経済同友会 2009: 5-6）。

ただし、このような人材像は基礎学力があることを前提に議論されたものであり、国内外に通用する教養や品格が基盤にあつての提言なのである。

表2 学士課程教育を通じた学習成果の参考指針としての学士力

〈知識・理解〉多文化・異文化に関する知識の理解／人類の文化、社会と自然に関する知識の理解 〈汎用的技能〉コミュニケーション・スキル／数量的スキル／情報リテラシー／論理的思考力／問題解決力 〈態度・志向性〉自己管理能力／チームワーク／リーダーシップ／倫理観／市民としての社会的責任／生涯学習力 〈統合的な学習経験と創造的思考力〉これまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力
--

（文部科学省：「学士課程教育の構築に向けて」2008年より、筆者作成）

換言すれば、この基礎学力とは表2の学士力（以下学士力）であり、これらの能力が備わらなければ、「求められる介護福祉士像」の資質を習得できず、たとえ4年制大学でも基礎的な学力を保障しなければ学士力は備わらないのである（田中宣秀 2009: 44）。

## 6. 各養成課程のあり方と学士力育成への課題

それでは、ここで現状の2年制課程（専門学校・短期大学）及び4年制課程（大学）の在り方について述べる。文部科学省は、新時代における高等教育機関の在り方として、中長期的（平成17 [2005] 年以降、平成27 [2015]—32 [2020] 年頃まで）に想定される我が国の高等教育の将来像を示している（文部科学省中央教育審議会 2005: 第3章「新時代における高等教育機関の在り方」）。

まず第一に、専門学校は、大学の学士課程教育や短期大学の課程の教育との対比で、社会的要請に応じて実際の知識・技術等を習得した人間性豊かな人材を育成

することである。したがって、実践的な職業教育・専門技術教育機関としての性格を明確化し、その機能を充実するため、今後一層の個性化・多様化が求められている。第二に、短期大学は、教養と実務が結合した専門的職業教育や、豊かな社会生活の実現を視野に入れた教養や、高度な資格取得のための教育、地域社会への多様な生涯教育機会の提供等の充実が求められている。第三に、4年制大学は、社会全体の共通基盤の形成という大学の役割を土台として、新しい知識・技術・情報を活用する専門性ととともに、幅広い素養を身につけて積極的に社会を支える人材の育成が求められている。

以上のことから、専門学校は実践的な職業教育・専門技術教育機関としてのスペシャリスト養成。短期大学は教養や高度な資格取得のための教育としてのスペシャリスト及びゼネラリスト養成。4年制大学は知識・技術・情報を活用する専門性、幅広い素養を身につけた人材の育成としてのゼネラリスト養成などそれぞれの高等教育機関に求められる教育内容は異なっているといえる。したがって、専門学校では各分野の職業に特化せず、学際的な教養を通じて自由な人間を育てる教育、4年制大学では文科省の指導も含めてキャリア教育への取り組みが重要視されているのである。

## 7. 学士力育成のためのリベラル・アーツ教育

キャリア教育（望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育〔文部科学省中央教育審議会 1999: 第6章第1節〕）は、1970年代初頭からアメリカにおいて、直面する激しい社会の変化や学校から職業への移行にかかる様々な課題に対応するため推進され、その後、我が国の「進路指導」の充実・改善に影響を与えてきた。しかし、キャリア教育が何かということは教育関係者の間においても、明確な共通理解がなされていないのも事実である。

このことについて、「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」（文部科学省 2004）では、キャリアを、「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」として捉えている。そして、キャリア教育を、キャリア概念に基づき「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」と捉え、その能力像を①人間関係

形成能力（自他の理解能力，コミュニケーション能力），②情報活用能力（情報収集探索能力，職業理解能力），③将来設計能力（役割把握・認識能力，計画実行能力），④意思決定能力（選択能力，課題解決能力）とし，高等教育機関では学士力の構成要素と重なっている（田中 2009: 46）。

この学士力を獲得するための教育が，リベラル・アーツを基底とする教養教育である。人々の価値観が多様ななか，優れたリーダーシップを発揮し，イノベーションを起こしていく人材の育成は重要な課題である。このようななか，学生が国際的に通用するには，どの国でも通用する人材の育成をすることが必要になる。その観点からすると，人間力や全人力を目指す教育，すなわち，「確かな知識や情報，経験に裏付けられた価値観の体系であると同時に，人が社会との関わりのなかで，自立して生きていくために必要な力であり，さまざまな国，文化，世代の人と理解し合うための共通の基盤（共通言語）」（文部科学省 2008: 参考資料3, p. 2）がリベラル・アーツである。このリベラル・アーツという基礎力が，論理的思考によって物事の本質を見極める能力や，現実には発生する問題，課題を整理して，適切に解決する能力の育成に結びつくのである。したがって，介護福祉士養成教育では2年制課程はともかく4年制課程においても，ダブルライセンス取得（社会福祉士と介護福祉士）中心のカリキュラムでは学士力が備わらないといえるのである。

## 8. 「求められる介護福祉士像」とスピリチュアリティ教育

ここでは「求められる介護福祉士像」に示されている個別ケア，個人の尊厳を支える資質を育成するための教育方法についてみてみたい。厚生労働省はカリキュラムの基準として，教育内容に「人間の尊厳と自立」を設けている。このねらいは，「人間の理解を基礎として，人間の尊厳の保持と自立・自律した生活を支える必要性について理解し，介護場面における倫理的課題について対応できるための基礎となる能力を養う学習とする」ことであり，教育に含むべき事項に「人間の尊厳の自立」と「人権と尊厳」を挙げている。ただし，これは「想定される教育内容の例」であるため，それをどのように教育するかは各介護福祉士養成施設の裁量に委ねられている（厚生労働省 2008: 1）。

この点に関して，日本介護福祉士会は生活の主体者である「人間とは何か」を認識し思索することが不可欠であり，特に「人間の尊厳と自立」「生活と福祉」について重視すべきであることを指摘している。また，その裏づけとして，そもそも「尊

厳」とは何を意味するのか、また倫理について、単に職業倫理に限らず、倫理と倫理公準についての一般的理解が欠かせないとしている。ただし、ここでも、人間の尊厳や倫理について学んだり、実践できるように倫理観、感受性の育成が必須条件であるとしているが、その教育の一例としては、憲法の理念や生活の意味・意義の理解、憲法の理念を具体化するための社会保障の歴史や変遷・仕組みの理解を中心に据えると述べるに留まっている<sup>3</sup>。

ただし、憲法を根拠にするだけでは不十分であると認識する必要があるだろう。確かに、憲法は人間の本質的価値を国家の最高法規として宣言し、達成すべき目標と、最低の生活水準が理念の形で法的権威を持って提示されている。しかし、憲法にそのような規定が示されていなければ人間の本質的価値がなかったのかといえそうではない。人間そのものには少しも変わりはなく、その人間の価値と尊厳には何の代わりもないのである。換言すれば、「なぜ人間には犯すことのできない尊厳があるのか」「なぜ人権は何にもまさって尊ばれなければならないのか」「そもそもいのちとは何なのか」ということを改めて問い直さなければならない。この問いに対してしっかりとした答えを持たなければ、これまでのように政治・経済・社会事情によって福祉実践は揺さぶられ、翻弄され、時に後退させられることさえもあらうのである（江藤 2004: 14-15）。

では、「人間とは何か」ということである。釜谷は、人間は自分を人間たらしめていくため、「人間本性的傾向」のうちに生きる存在だと述べている。そのなかでも、重要なものが「社会的本性」であり、これが他者との間にケアしケアされる関係を作るのである。しかし、「人間本性」は根源的に未完成なものであるから、その実現に向けてケアをどのように育てるかが問われるのである。

他方、介護現場では日々の作業に追われ、自分が携わっている介護本来の持つ意味が見えなくなるおそれがある。しかし、介護が人間を相手にする行為である限り、「人間とは何か」が曖昧なままでは、介護が「介助」や「世話」などの単なる手助けに陥りかねないのである。

このような課題の究明に具体的に言及するのが、現実に生きる人間とその生き方を総合的に考え問うスピリチュアリティに関する学問である（釜谷 2004: 14-15）。

これまでの、医療分野におけるスピリチュアリティは、主に末期医療に限定される傾向があり、健康増進・健康教育的分野での提唱は稀であった。しかし、現在で

---

3 詳細は、日本介護福祉士会(2007)IIの「介護福祉士養成課程において習得すべき内容」を参照のこと。

は苦悩を通じて人生の意味や目的などの獲得、自然・他者・自己とのつながりも包含する拡張概念として捉える場合が多くなっている（尾崎・深尾・奥 2008: 514）。

例えていえば、国際生活機能分類（ICF：International Classification of Functioning, Disability and Health）においても、活動と参加（activities and participation）の下位概念に宗教とスピリチュアリティ（religion and spirituality）が表記しているように生活機能の一部なのである（厚生労働省 2002）。

このようなスピリチュアリティの要因は、感情的・情緒的要因、哲学的要因、宗教的要因、重層的要因に分類される。（表3）

表3 スピリチュアリティ（自己同一性）の要因

感情・情緒的要因	不安、恐怖、いらだち、孤独感、虚無感など。
哲学的要因	回答が必ずしも存在しないような「なぜ、私がこんな病気になって苦しまなければならないのか」という哲学的問い。
宗教的要因	理性や合理性のような論理性を超えた信仰、信念、イメージの世界に属するような「こんなに苦しむのは罰が当たったのかもしれない」「死んだ後には地獄があるのか」という宗教的問い。
重層的要因	その人が生きてきた文化、習慣、風習、自然などが影響を与える。また、人間関係、思想、哲学、主義、宗教などの影響も大きい。

（窪寺俊之 [2004] 『スピリチュアルケア学序説』三輪書店、より筆者作成）

これらの4要因に対して、喪失した苦しみや問いへの回答を見いだせないとき、人はスピリチュアルペインを持つのである。さらに、このスピリチュアルペインに対するニーズは哲学的ニーズと宗教的ニーズに分類される。（表4）

表4 スピリチュアルニーズ分類

哲学的ニーズ	人生の意義や意味 / 人生の目標 / 起源や運命 / 自他の尊厳・尊重・尊敬 / コミュニケーション / 真理、真実 / 自己反省、赦し / 独りでいること、独りで考えること / 働く意味 / 価値観の選択と追求 / 誠の自分らしさ / 感謝の心をもつこと
宗教的ニーズ	超自然の存在や神 / 神性の象徴や兆候 / 信じること / 祈ること / 賛美すること / 罪からの開放と癒し / 神に謝り、赦してもらうこと / 永遠の生命

（窪寺俊之 [2004] 『スピリチュアルケア学序説』三輪書店、より筆者作成）

ただし、スピリチュアルニーズは病んでいる時に多く現れるということから、人間は自分の危機に直面した時、それを盲目的に運命として受け入れることは耐えがたく、その理由をスピリチュアルな部分で求めているのである（キッパス 1999: 68-76）。

以上のことから、ケアを行うには、WHO 執行理事会<sup>4</sup>でも示唆された人間の尊厳の確保や QOL の骨子となる哲学的ニーズや宗教的ニーズなどスピリチュアルニーズに関する価値観や気づき・感性を育成することが必要となるのである。

## 9. 人間の尊厳に関する価値観測定に関する調査

ここでは、人間の尊厳に関する価値観測定(n=180 T(東京基督教)大学生:57名、短期大学性 56名、専門学校生:35名、福祉社会人:30名)について述べる。

調査内容は、職種・学生、宗教・哲学関連授業受講の有無、信仰についてと、「ThreeTen—生き残るのは誰か?『価値と汚名』」及び Spirituality BAS Test の実施である。方法は、4会場において無記名の自記式調査として施行した。倫理的配慮として、すべての調査対象者に研究目的・方法を説明し、個人が特定されないことを説明した。また、学生には協力拒否による不利益や評価に影響を与えないことを説明し、調査用紙の提出を持って同意を得たものとした。

### ① 「ThreeTen—生き残るのは誰か?『価値と汚名』」(資料 1)

このテストは、生存できる 10 名の中から生き残れない 3 名を選ぶというものである。結果は表 5 に示した通り、全体の約半数程度が「プロサッカー選手」や「有名な小説家」等、年齢や犯罪歴等のスティグマにより、役に立つ人間と役に立たない人間を区別する傾向を示しているといえよう。

---

4 1998 年、WHO 執行理事会は総会の議題において「健康」の定義を「完全な肉体的 (physical)、精神的 (mental)、Spiritual 及び社会的 (social) 福祉の Dynamic な状態であり、単に疾病又は病弱の存在しないことではない」に改正することが提案された。総会の結果も含め、詳細は厚生省(1999)「WHO 憲章における『健康』の定義の改正案について」を参照のこと。



表5 ThreeTen—生き残るのは誰か？『価値と汚名』の集計結果

選択項目		全体	%	T大学生	%	短期大学生	%	専門学校生	%	福祉社会人	%
受講に関して	どちらも受講	37	20	32	56.1	0	0	1	2.9	4	13.3
	宗教関連のみ	27	14.6	22	38.6	0	0	1	2.9	4	13.3
	哲学関連のみ	4	2.2	1	1.8	0	0	0	0	3	10.0
	受講していない	112	60.5	2	3.5	0	0	32	91.4	19	63.3
	その他	1	0.5	0	0	0	0	1	2.9	0	0
信仰の有無	ある	70	37.8	57	100	7	12.5	4	11.4	3	10.0
	ない	91	49.2	0	0	34	60.7	27	77.1	27	90.0
特定の宗教	キリスト教	61	33	57	100	2	3.6	0	0	2	6.7
	仏教	8	4.3	0	0	5	8.9	3	8.6	1	3.3
	その他	1	0.5	0	0	0	0	1	2.9	0	0
選択項目	歌手の卵	16	8.6	6	10.5	7	12.5	1	2.9	2	6.7
	OL	20	10.8	5	8.8	3	5.4	9	25.7	2	6.7
	医者	8	4.3	2	3.5	1	1.8	2	5.7	1	3.3
	プロサッカー選手	111	60.0	28	47.4	36	64.2	24	68.6	18	60.0
	武装した警官	28	15.1	12	21.1	3	5.4	10	28.6	3	10.6
	医者	2	1.1	2	3.5	0	0	0	0	0	-
	同時通訳	41	22.2	13	22.8	16	28.6	5	14.3	6	20.0
	生化学者	27	14.6	11	19.3	4	7.1	4	11.4	6	20.0
	有名な小説家	90	48.6	25	43.9	26	46.4	17	48.6	17	56.7
	牧師	78	42.2	11	19.3	33	58.9	20	57.1	11	36.7
	決めることができない	38	20.5	17	29.8	10	17.9	3	8.6	8	26.7

註：%は学生（T大学、短大、専門）、福祉社会人それぞれの総数に対してのもの（集計結果より筆者作成）

一方、「生き残れない3名を決めることができない」を選択した者も38名（20.5%）にのぼる。その理由は、「みんな将来がある」「だれでもそれなりの役割を持っている」「みんな対等」「自分には選ぶ権利がない」「全員助からないのなら全員地球にとどまるという選択肢もある」「人の命の優劣を決めることは同じ人間として難しい」「私は神様でないので、人を生かす、生かさなは決められない」「人の価値を決められない」「人間の生死を人間が決めるべきではない」等である。これらは、まさに人間の価値と尊厳には何の変わりもないという価値観の表れといえよう。なかでも、T大学生は29.8%と同年代の短期大学生（19.8%）、専門学校生（8.6%）、よりも高く、さらに福祉実践を行っている福祉社会人（26.7%）よりも高かった。

そこで、このような価値観を有する要因を調べるため、①職種・学生、②宗教及び哲学関連の受講の有無、③信仰の有無、④特定の信仰との相関関係、をSPSS解析ソフトを用いてピアソン係数によって求めた。

表6 宗教・哲学の授業、信仰の有無、特定の信仰と価値観の相関関係

		歌手の卵	OL	医者 の卵	プロ サー フ	警 官 武 装 し た	医 者	同 時 通 訳	生 化 学 者	有 名 な 小 説 家	牧 師	が 決 め る こ と が で き な い
職種及び学生	Pearsonの相関係数	.040	-.185(*)	-.039	-.099	-.087	.059	.035	.089	.003	-.216(**)	.181(*)
	有意確立(両側)	.597	.013	.604	.185	.244	.431	.641	.234	.965	.004	.015
	N	180	180	180	180	180	180	180	180	180	180	180
宗教哲学の勉強	Pearsonの相関係数	.064	-.036	-.030	-.251(**)	.097	.131	-.064	.073	-.094	-.316(**)	.244(**)
	有意確立(両側)	.394	.633	.686	.001	.195	.078	.389	.330	.209	.000	.001
	N	181	181	181	181	181	181	181	181	181	181	181
信仰の有無	Pearsonの相関係数	.085	-.016	-.064	-.189(*)	.143	.128	.037	.055	-.131	-.262(**)	.131
	有意確立(両側)	.283	.841	.419	.017	.070	.106	.638	.488	.098	.001	.098
	N	161	161	161	161	161	161	161	161	161	161	161
特定の宗教	Pearsonの相関係数	.000	-.123	.063	-.095	.000	.063	.200	.070	.021	-.288(*)	.070
	有意確立(両側)	1.000	.312	.604	.436	1.000	.064	.097	.567	.862	.015	.566
	N	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70

(分析結果より筆者作成)

\*\* 相関係数は1%水準で有意(両側)です。

\* 相関係数は5%水準で有意(両側)です。

a 少なくとも1つの変数が定数であるため、一定の変数は計算されません。

表6から、職種や信仰の有無、特定の信仰を持っていることと、「生き残れない3名を決めることができない」には相関が認められなかった。一方、宗教及び哲学関連の受講の有無と「生き残れない3名を決めることができない」は低い値ではあるが正の相関が認められた。

## ② Spirituality BAS Test (資料2)

このテストは、スピリチュアリティに関する SBT (自分・外界状況の判断, 最善への自己コントロール, 意思のはたらき), SAT (自己存在の満足度, 自信を持ち生きる態度), SST (感性の高さ), SBF (自分自身のコントロール), SAF (現実に直面せず自分を保つ傾向), SSF (自他が未分化に感じる, 感覚的なもの的心を奪われる, 非科学的なものを信じる傾向) を合計得点により測定するものである。

そして、それぞれの合計得点の平均を、T (東京基督教) 大学生, 短期大学生, 専門学校生, 福祉社会人ごとに分類した。

表7 Spirituality BAS Test の平均値

	全体	T 大学生	短期大学生	専門学校生	福祉社会人
SBT	29.59	30.98	28.63	28.77	29.00
SAT	25.50	27.70	21.75	25.34	27.77
SST	38.92	43.32	37.72	34.83	38.77
SBF	2.99	3.09	3.12	2.63	2.83
SAF	2.62	2.58	2.32	2.89	2.73
SSF	12.03	10.33	12.89	12.63	13.00

(平均値より筆者作成)

表7によると、T 大学生は状況判断や他者への配慮などの感性や気づきの高さである SBT, SST 得点が高い。また、穏やかさや情緒の安定を表す SAT 得点も高いことがわかる。一方、SBF, SAF 得点は全体平均と同水準だが、これは、自分自身のコントロール、現実を認識した生活のバランスの高さを表している。さらに、SSF 得点が低いのも T 大学生の特徴だが、これは現実を客観的、合理的、論理的に考える習慣を表している(尾崎・石川・松本 2004: 43-46)。

この傾向は、尾崎(2009: 71)の一般学生(844名)より特別な宗教教育を受けた大学生(107名)の方がスピリチュアルに関する得点が高かったという報告と同様である。

さらに、この結果と宗教及び哲学関連の受講の有無、信仰の有無、特定の信仰との相関を調べるため、SPSS 解析ソフトを用いてピアソン係数によって求めた。(表8)

表8 宗教・哲学の授業、信仰の有無、特定の信仰とスピリチュアリティの相関

		SBT	SAT	SST	SBF	SAF	SSF
宗教哲学の勉強	Pearsonの相関係数	-.162(*)	-.241(**)	-.314(**)	-.046	-.005	.307(**)
	有意確立(両側)	.034	.001	.000	.552	.950	.000
	N	172	172	172	172	172	172
信仰の有無	Pearsonの相関係数	-.210(**)	-.118	-.387(**)	-.088	.052	.244(**)
	有意確立(両側)	.009	.146	.000	.283	.527	.002
	N	152	152	152	152	152	152
職種及び学生	Pearsonの相関係数	-.112	-.250(**)	-.280(**)	-.036	.039	.141
	有意確立(両側)	.143	.001	.000	.641	.612	.066
	N	171	171	171	171	171	171
特定の宗教	Pearsonの相関係数	-.067	-.184	-.111	.042	-.019	.392(**)
	有意確立(両側)	.580	.126	.359	.730	.876	.001
	N	70	70	70	70	70	70

(分析結果より筆者作成)

- \*\* 相関係数は1%水準で有意(両側)です。
- \* 相関係数は5%水準で有意(両側)です。
- a 少なくとも1つの変数が定数であるため、一定の変数は計算されません。

この結果は、表8に示したとおり、SSFと宗教及び哲学関連の受講の有無、信仰の有無、特定の信仰に関しての相関が認められた。すなわち、全人的ケアを行ううえで現実に生きる人間や、その生き方を総合的に考え問うことは重要であること、その生き方を総合的に考えることについて、宗教、哲学的ニーズなどのスピリチュアルニーズに関する学問が何らかの影響を与えることが見て取れる。

## 10. おわりに

以上、本小論では、東京基督教大学神学部国際キリスト教福祉学科キリスト教福祉学専攻における介護福祉士養成の意義について述べてきたが、その結論は以下のとおりである。

それは、第一に、社会福祉の専門家の出現するはるか以前から行われてきた「行動しつつ」、苦しんでいる「人間自身の傍らに立ちつつ彼を助ける」人材育成を行っていること。第二に、ケアの基本は「善いサマリア人」(ルカ10:2-27)のたとえにあり、その根底となる専門的知識・技術習得に向けた教育が行われていること。第三に、ケアの専門職像である「求められる介護福祉士像」の基礎学力習得に関連するリベラル・アーツを中心とした教育を行っていること。第四に、個人の尊厳やスピリチュアルケアを支える資質を育成するための宗教、哲学的ニーズに関する教育を中心に行われていること。

すなわち、キリスト教福祉学専攻のクリスチャンソーシャルワーカーの養成は「ファッションとしてのキリスト教主義ではなく、聖書を土台とした真の「ことばと行いによる宣教者」を養成することを目的とする機関なのである。

## 資料1 ThreeTen—生き残るのは誰か？『価値と汚名』

奇怪な一連の事件が続いて、世界中が強力な原子力のえじきとなり、この地球上の人類に終局をもたらせようとしています。しかし、科学者は特別なカプセルを作り、小さいながら、その中にいる人たちは完全に生存できることを保障しています。この室内には、すでに選ばれた10人の人たちが入るようになっていました。それは以下の10人です。

- |               |                  |            |                  |
|---------------|------------------|------------|------------------|
| ①目下売り出し中の歌手の卵 | ♀ 19歳            | ②OL        | ♀ 24歳            |
| ③医者の子         | ♀ 27歳 妊娠6ヶ月      | ④プロサッカーの選手 | ♂ 30歳 麻薬所持で逮捕歴あり |
| ⑤武装した警官       | ♂ 35歳 何度も警視総監賞受賞 | ⑥医者        | ♂ 32歳            |
| ⑦7ヶ国語に堪能な同時通訳 | ♀ 36歳 子どもは産めない   | ⑧生化学者      | ♂ 60歳 ノーベル賞受賞    |
| ⑨有名な小説家       | ♂ 59歳 精神障害で入院歴あり | ⑩牧師        | ♂ 70歳            |

ところが、最後の瞬間になって科学者は、最初の計画に反してカプセルの中では7名しか安全を保障できないとアナウンスしてきました。

上記のリスト中どの人が除かれるべきでしょうか。人類の生存者は7名のみというわけです。生き残れない3名をあなたが決めてください。

1. ( ) 理由「 」
2. ( ) 理由「 」
3. ( ) 理由「 」

※生き残れない3名を決めることができなかったという方はその理由を記入してください。

( )

## 結果の見方

## 【1】ThreeTen—生き残るのは誰か？『価値と汚名』

この作業を行うことにより、自分の気づきを確認する。それは、①自分自身の持っている価値観。②人は平等といいながら、気づかずに役に立つ人と役に立たない人を区別する。③選択を迫られれば、個人的価値観に基づいて切り捨てる作業もする。④切り捨てられるのは、ほとんどが何らかのスティグマ(汚名)を負わされた人、ということである。

人はある程度、交換の法則(ギブアンドテイク)に則って行動しており、例えば援助に対する感謝という形であれ、何らかの意味で互いに満足できる関係であれば良しとされる。しかし、交換が成り立たないとき人はスティグマを負わされる可能性がある。また、スティグマの要因の一つは予測不可能ということである。例えば、精神障害での入院歴や、麻薬歴があれば、いつ、また、同じことが繰り返されるかもしれないという恐れが、強い疑いとなり、危険であるとされるのである。「われわれ」と一緒にないこと、その違いがフツーではないということで、その違いを認識し、それが変化不能で固定的であれば、人が安住している日常性・常識の世界を脅かしてしまう。その脅威が恐怖となり、理解不能なものを赦せないという強い感情となる。そして、単なる「違い」が「異常」となり、区別・差別が生じることになるのである。

違いを生じさせるものには文化、階級、性別、言語、個人の属性等がある。それらが対人関係、前後関係(文脈)を構築するが、そこで問題となるのが排除の論理である。つまり、ひとは、自分(の価値観、文化、これまでの人生背景)を守るため、違いを「誤り」として排除してしまうのである。この結果、平均的な価値規範から、何らかのスティグマを負わされた人に対する差別や偏見が生じ、社会的に甚だしく不利益をこうむる状況(人)が生まれるのである。したがって、福祉職には、①違いを単なる違い、つまり違いを個性として認めること。②単一の情報によってステレオタイプ化しないこと。③それによる偏見、差別を回避するためにアドボカシーすることが必要となるのである。

(得津慎子 [1999] 『ソーシャルワーク援助技術論・理論と演習』西日本法規出版、を改変)

資料2 Spirituality BAS Test

<p>以下の項目を読んで、自分に当てはまると思うものには5、まあまあ当てはまるものには4、どちらでもないには3、あまりあてはまらないには2、まったく当てはまらないと思うものには1の5段階で評価してください。そして、解答欄にその数字を記入してください。 ただし、⑨⑩⑫⑭⑮は逆転項目ですので、当てはまると思うものには1、まあまあ当てはまるものには2、どちらでもないには3、あまりあてはまらないには4、まったく当てはまらないと思うものには5と評価してください。</p> <p>①大勢の人が間違ったと思われる行動をしているときに、自分ひとりでも自分の正しいと思うことを実行する。②不安や恐れがあるときでも決めなければならないときは勇気を持って決断する。③正しいと決断したことに対しては、何回失敗しても信念を持ってやり続ける。④集団的に恐れやパニックになっている状態でもその影響から身を守り、本当になされるのが何かを静かに明確に判断する。⑤やろうと決めたことを実行中に、他のことや人からの勧誘に抵抗してやり続けることができる。⑥時間の観念のない人たちのおしゃべりに、丁寧にしかも断固として断ることができる。⑦退屈なつまらない仕事でも、必要なことは淡々と実行する。⑧目的や価値があるときには、あえて危険や冒険をおかすことはいとわない。⑨疲れを感じても、仕事や勉強の手を休めない。(逆転項目) ⑩自分がなぜ生きているのか時々わからなくなる。(逆転項目) ⑪生まれてこの方、いつも喜びに満ち溢れている。⑫ストレスが多くゆったりとした気持ちになれない。(逆転項目) ⑬攻撃的、不安、うつ、落胆などのネガティブな感情が起きたときに、断ち切って有益な方向にエネルギーを集中させる。⑭理由のわからないむなしさにおそわれることがある。(逆転項目) ⑮自分自身に自信が持てない。(逆転項目) ⑯目ざめたときに、今日一日がどんな日になるか期待でわくわくしている。⑰欠点もあるが自分のことが好きである。⑱もしできるなら、今のこの人生を何度でも繰り返したい。⑲自然や宇宙の偉大さの前に、謙虚な気持ちになる。⑳何かに祈ることがある。または、祈りたい気持ちになる。㉑何か、意味があって生かされているはずだと感じる。㉒生命のすばらしさ、神秘性に、畏敬の念を感じる。㉓悪いことをすると、天の罰があたる。㉔人間の勝手な振る舞いに対して、自然が怒って反撃していると思う。㉕一人静まったときなどに、内なる声というか、意思のようなものを感じることもある。㉖この世界には人間の力をはるかに超えた大いなるものの力が働いていると思う。㉗自分が生まれる前も死んだ後も続いていく永遠の流れを感じる。㉘躍り出たくなるような気分になることがある。㉙言葉に出したことが実現してしまうのは本当だと思う。㉚結婚式はやはり、大安か友引の日にすべきである。</p>
<p>1～9の合計 (SBT) 10～18の合計 (SAT) 19～30の合計 (SST) 9の得点 (SBF) 11の得点 (SAF) 23, 24, 29, 30の合計 (SSF)</p>
<p>結果の見方 このテストは、スピリチュアリティを測るものであるが、ここでは、①スピリチュアルなものに対する感性。(SS) ②それに対する態度。(SA) ③それに基づいた行動 (SB) に分けて得点が算出されている。 I. SST 得点は、スピリチュアルなものに対する感性の高さである。得点の高い人は、何か目に見えないものに対する感性や気づきが鋭く、低い人は、知的で実証的な考え方をすることが多いかもしれない。II. SSF 得点は、自我が未分化 (いくつかの要素が一つに入りまじって、分かれていないこと) と感じたり、感覚的なものに心を奪われたり、非科学的なものを信じる傾向を表す。得点が高い人は、感性が豊かなためか、時に危険なスピリチュアリティを伴う可能性があるため、地に足の着いた現実を大切に、客観的、合理的、論理的に考える習慣を身につけることが肝要である。III. SAT 得点は、外界の条件にかかわらず、自分の存在に対して満足し、自信を持って生きる態度を表す。得点の高い人は、穏やかで明るく情緒の安定した積極的な態度を持った人と考えられ、低い人は、生きる意味や目的が不明で、むなしさや自信のなさといった気持ちに襲われることが多い人といえるかもしれない。IV. SAF 得点の高い人は、現実生活の厳しさやつらさを見ないようにして自分を保つ傾向があるかもしれない。つらいことから目をそらす、ポジティブシンキングも大切なストレス対処法だが、楽観主義も行き過ぎると、弱さを露呈することがある。現実をしっかりと認識した上での深い喜びに満たされる態度が、本物の、スピリチュアルな態度であろう。V. SBT 得点は、自分や外界の状況を冷静に判断し、自分や周りの最善となるよう行動をコントロールし、遂行する意思のはたらきを表している。判断の基準は、何か絶対的な価値にしたがい、勇気を持って選択するということにある。得点の高い人は自己実現ができていて人といつてもよいかもしれない。得点の低い人は、周りの状況に流されたり、人の意見や思惑が気になって自分らしく振舞うのが難しい人かもしれない。VI. SBF 得点は、肉体的精神的に最高のエネルギーを発揮できるように自分自身のコントロールができるかどうかの尺度である。無理してがんばるという態度は、実際の生産性から見たら低い場合が多く、長い目で見たら、疲れたらすぐに休む態度が奨励される。きついことを頑張るのが意志が強いと評価されることが多いが、スピリチュアルな立場から言うとそれは必ずしも正しいとは言えない。この得点はむしろ低いことが、柔軟性のあるしなやかで巧みな意思の働きを表している。</p>

(尾崎・石川・松本 [2004] を改変)

## [参考資料]

- 阿部志郎 (2001) 『キリスト教と社会福祉の戦後』 海声社
- 稲垣久和編 (2012) 『これからの福祉と教会—高齢化社会への備え』 いのちのことは社
- 稲垣久和 (2010) 『公共福祉という試み』 中央法規出版
- 井上英治 (1995) 「かかわりとケア」 『人間学・紀要』 (25). 上智人間学会
- 井上英治 (1989) 「慈悲と祈り—マザー・テレサ等の事例と『イエスのみ名の祈り』をも踏まえて」 『人間学・紀要』 (19). 上智大学人間学会
- 江藤直純 (2004) 「キリスト教の人間観と福祉教育」 『キリスト教社会福祉学研究』 (38). 日本キリスト教社会福祉学会
- 尾崎真奈美・深尾篤嗣・奥建夫 (2008) 「『苦悩』のスピリチュアリティから『喜び』のスピリチュアルヘルスへ」 『心身医学』 48 (6). 日本心身医学会
- 尾崎真奈美 (2009) 「自己否定感に対するスピリチュアルヘルス教育の逆説的アプローチ」 *Journal of International Society of Life Information Science*, 27 (1), 国際生命情報科学会
- 尾崎真奈美・石川勇一・松本孚 (2004) 「相模女子大生のスピリチュアリティ—特長と『スピリチュアル教育』マニュアル作成の試み」 『相模女子大学紀要』 (68). 相模女子大学
- 釜谷明生 (2004) 「『ケア』の倫理的考察—井上英治のケア思想を中心に」 『キリスト教社会福祉学研究』 (38). 日本キリスト教社会福祉学会
- キッペス, ウォルデルマール (1999) 『スピリチュアルケア—病人とその家族・友人および医療スタッフのための心のケア』 サンパウロ出版
- 木原活信 (2007) 「キリスト教精神に立つ社会福祉実践と新しい公共圏—A. E. McGrath の神学を手がかりに」 『キリスト教社会福祉学研究』 (40). 日本キリスト教社会福祉学会
- 厚生労働省 (2008) 「2年課程 新しい介護福祉士養成カリキュラムの基準と想定される教育内容の例」 (「社会福祉士及び介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて」)
- 厚生労働省 (2006) 「介護福祉士のあり方及びその養成プロセスの見直しに関する検討会報告書・資料1」
- 厚生労働省 (2002) 「『国際生活機能分類—国際障害分類改訂版』 (日本語版) の厚生労働省ホームページ掲載について」
- 厚生省 (1999) 「WHO 憲章における『健康の定義の改正案について』」
- 社団法人関西経済同友会 (2009) 「社会が求める大学の人材輩出戦略—まずは学部教授会の改革から」
- 田中宣秀 (2009) 「キャリア教育に基盤をなすものとは何か—学校から社会への移行を目指す真の職業指導・キャリア教育の方策を探る」 『インターンシップ研究年報』 (12). 日本インターンシップ学会
- 中澤 (2012) 「今後の介護福祉士養成教育の課題—スピリチュアリティを考え問う科目の必要性」 『キリストと世界』 (21) : pp. 194-213, 東京基督教大学
- 中澤 (2012) 「介護福祉士養成教育におけるカリキュラム研究—『求められる介護福祉士像』の基

- 礎学力習得に関して』『介護福祉教育』16(2): pp. 37-46. 日本介護福祉教育学会
- 日本介護福祉士会(2007)「介護福祉士の教育のあり方に関する検討会報告書—養成カリキュラムに関する中間まとめ」
- 広井良典(2000)『ケア学』医学書院
- 古川慶康(2007)「実践的社会福祉の神学的方法論の一考察」『キリスト教社会福祉学研究』(39). 日本キリスト教社会福祉学会
- 文部科学省(2008)「『学士課程教育の構築に向けて(審議のまとめ)』についての意見」
- 文部科学省中央教育審議会(2005)「我が国の高等教育の将来像(答申)」
- 文部科学省(2004)「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書—児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために—の骨子」
- 文部科学省中央教育審議会(1999)「初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申)」第6章第1節
- 安留孝子(2012)「介護の仕事は正しく理解されているか? 介護職員のインナー・ワーク・ライフから」『週刊社会保障』(2662): pp. 44-49. 法研



# 介護支援専門員に求められる実践能力の研究 II

## インタビューと事例の分析からの考察

井上貴詞

(東京基督教大学助教)

### 1. はじめに

論者は、介護支援専門員が持つ能力、力量、資質をコンピテンシー (competency)<sup>1</sup> という包括的な実践力と捉え、介護支援専門員の基礎資格である医療、福祉、介護の文献から該当する概念を抽出して、分析を行い、どのような構成要素があるのかを検討した。その結果ミクロからマクロレベルに至る三層で構成されることが示唆された (井上 2012)。ミクロには「行動特性」「個人的資質」「自己統制」などがあり、メゾレベルには「専門性」や「組織力」、マクロには「専門性の世代継承」や「環境との相互作用」「ネットワーキング」等があった。それらの構成要素のひとつである「自己統制」にグルーピングされたコンピテンシーのカテゴリーには、自律 (自立)、自己規制、自己制御、自己効力感、専門的自己裁量というさらに細かい要素があり、これらは介護支援専門員<sup>2</sup>がミクロの実践の中で求められ、発揮する能力であると考えられた。

そこで、本論においては、介護支援専門員の能力の構成要素の「自己統制 (self-mastery)」に焦点をあて、まず心理・社会分野の先行研究から概念検討を行い、次に現場の介護支援専門員へのインタビューと実践事例の分析を行い、実証的な探索と解釈・考察を試みることにする。

---

1 コンピテンシーとは、「ある職務において効果的あるいは卓越した業績を生む要因として関わっている個人の特性、及びそれらの特性を組み合わせて有効な行動パターンを生み出すための統合的な行動特性であり、個人が内的に保有しつつも、顕在化し観察可能であり、学習・開発可能な包括的な能力」である。詳細は、井上 (2010) を参照のこと。

2 介護支援専門員は、現時点で介護保険施設はもちろんのこと、グループホーム等の地域密着型サービスなど幅広い領域で配置規定があるが、本稿で取り扱う対象は居宅の介護支援専門員であることをお断りしておきたい。

## 2. 自己統制に関する先行研究の検討

### 2.1. 心理学領域からの概念検討

#### 2.1.1 Banduraの自己効力感

自己統制の概念、形成や評価に深い関連があるのは自己効力感 (self-efficacy) の理論である。自己効力感の概念を理論化したバンデューラ (Bandura) は、自己効力感は、ある結果や成果を生み出すために獲得される遂行能力のひとつである信念として定義している。

バンデューラによれば、「人間は内的な力によって駆り立てられるのではないし、かといって環境刺激によって翻弄されるのではない。心理的機能は人の要因と環境的要因との連続的な相互作用によって説明される」(Bandura 1977: 14) という。人間の行動を決定する要因には、「『先行要因』『結果要因』『認知要因』の三者があり、これらの要因が絡み合って、三者間の相互作用が形成される。人は単に刺激に反応しているのではなく、認知機能によって予期し、刺激を解釈している。刺激が特定の行動の生じやすさに影響するのは、その予期機能によってである (Bandura 1977: 13, 20, 90, 175, 180, 坂野・前田 2002: 3-6)。結果予期はある行動がどのような結果を生み出すかという予期、効力予期とはある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまくできるかという予期を現す。これらのふたつの予期は人の行動や気分、情緒的な状態に影響を及ぼす。また、自分がどの程度の効力予期を持っているかを認知すること、ある行動を起こす前にその個人が感じる「遂行可能感」を自己効力感と呼ぶ。

また、Banduraは、人生のウェルビーイングを導くものとしての自己効力の信念の体系理論を、個人だけでなく組織・社会にまで広げた広範囲の社会的認知理論に組み込もうとした。キャリア発達においても、自己効力感とは職業の選択や職業上の興味や関心を発展させ、促進して職業の遂行に寄与する。「個人的な効力の信念は、キャリア・ディベロップメントを追求していくときに中心的な役割を果たす」ことを可能とし、「キャリアディベロップメントは新しい知識や技術を獲得するだけでなく、それを通して、革新と生産性に気づくことのできる効力感の獲得にもかかわっている」(Bandura 1995: 25-26) のである。地域社会、職業生活におけるグループ集団においても、効力の信念は「ライフコースに影響する環境をいかによく構成し、創造し、管理するかにおいて重要な役割を演じる」(Bandura 1995: 38) の

である。

自信、効力予期などの自己効力感は、自己統制のコンピテンシーを形成する側面と考えられ、介護支援専門員の実践現場においては以下のように考えることができよう。

(1) 介護支援専門員の実践能力のひとつとして「自己効力感」は促進因子となる。クレームの多い利用者への対応、医師との連携や担当者会議の主催等について「苦手意識」が強いと、効力予期機能は低下し、自信のなさから回避的になりがちになり、効果的な力量を身につけるための経験（行動）を積み重ねることができず、悪循環となる。

(2) 面接でスーパーバイザーに同行してもらいモデリングをしてもらったり、苦手と思う相手を訪問する前に、うまくいく段取りをイメージしてから訪問面接をしたりするとうまくいく確立が高くなる。

(3) うまくいった側面を強化して、小さな成功体験を積むことも有効。そもそもコンピテンシーのモデルは、効果的な援助者の実際の行動を抽出するので、自己効力感を含む Bandura のモデリング理論とは親和性がある (Greene, Cohen, and Galambos 2007: 9)。

### 2.1.2 キャリア心理学の観点

渡辺は、キャリア研究の多数の定義を分析した結果、「キャリア概念には『人と環境との相互作用の結果』『時間的流れ』『空間的広がり』および『個別性』の意味が共通して内包している」(渡辺 2007: 13) と指摘する。「人と環境との相互作用」とは、キャリアが職業 (occupation) や職務 (job) と異なり、個人が環境 (組織) に働きかけることに焦点があり、その相互作用に着目するからである。「時間的流れ」とは、キャリアは生涯にわたる経験や役割の蓄積を示し、その時間的流れや様々な人生の転機、節目 (transition) を重視するからである。「空間的広がり」とは、個々人の行為や役割の相互関係性と空間と時間の関係から織りなされる広がりを指す。「個別性」とは、人が自己選択、自己決定による主体的な生き方との関連で人間観の根底にふれる思想、価値観である。

介護支援専門員は、21 種類もの基礎資格があり、その上に年齢も経験も、従事してきた現場も保健・医療から福祉・介護まで多岐にわたるキャリアがある。そのキャリアを積み重ねる中で、個人が環境に働きかけるという自己の統制とその根底にある主体性を育む価値観を形成している。キャリア心理学が示すところの個人と

環境との相互作用とは、ソーシャルワークでいうところのクライアントと社会資源、スーパーバイザーとスーパーバイジーの相互作用とも共鳴するところであり、介護保険制度が創設されて13年目の歴史の中で、介護支援専門員が組織や地域の職能集団においてどのようなスタンスをとってきたか、どんな相互作用があったか、換言すればどのような自律性や自己統制を發揮してきたかいかんで介護支援専門員のキャリア形成が変わってくる。そういったキャリア形成における自律性や自己の統制を読み解く上でキャリア心理学の観点は多くの示唆を与えてくれる。

シャイン (Edgar Schein) は、会社の価値よりも、個人が独自の背景をもってキャリアを歩んでいくという見解から、職業における自己概念を「キャリア・アンカー」と名付けた (Schein 1985)。キャリア・アンカーには、「特定の専門分野のコンピテンス」「全般管理コンピテンス」「自立/独立 (自由)」「保証/安定」「企業家的創造性」「純粋な挑戦」「奉仕/社会献身」「生活様式」という8つのパターンがある。

### 2.1.3 Bowen の家族システムズ論から

ボーエン (Murray Bowen) の家族システムズ論では、家族の「情動システム」に着目し、「個性」と「一体性」という力があることを説明している。「個性」とは自立した個の存在としての有機体が自己の命令に自己を従わせようとする力であり、「一体性」とは、有機体をして自らを他者の指示に従わせ、依存させようとする力である。さらに、この「個性」と「一体性」のバランスが人によって異なることを「自己分化」という概念で論じている (Kerr and Bowen 1988: 81-92, 113-120)。「自己の分化」の高い人ほど、状況の変化に応じて無駄なエネルギーを消耗せずに、関係を調整して変化に適応する能力がある。介護支援専門員の「自己の分化」の程度は、専門職としての自律性・自己統制への影響が考えられる。

介護支援専門員は、利用者のニーズに対応するためにサービス調整を行うが、環境に働きかける意図は、利用者のQOLの向上のためであり、主体は利用者でなくてはならない。自己を統制する術をもたないと、主客逆転の援助を行う可能性があると想定できる。一方で、利用者に対して引きすぎてしまうと、寄り添うことができず、ニーズの把握は表面的になる。また、巻き込まれるということもある。「巻き込まれ」は、すべて悪いわけではなく、意図的に巻き込まれてこそ、共感し、かわりを維持できる。意図的というのは、援助者が自ら意識して巻き込まれ、自ら脱出もできるということである。介護支援専門員が共感能力を高めていくためには、

意図的な巻き込まれと脱出ができる自己統制が必要と考えられる。

さらに、介護支援専門員は、利用者（本人、家族、親類等含め）、複数のサービス事業者、医療関係者、行政機関、地域の人々、と多くの関係者とかかわりを持ち、多数の感情の渦の中に巻き込まれる。様々な要求や感情を受け止める中で、バーンアウトしないで業務を遂行するためには、自らに向けられた事実と感情を冷静に分けて統制していくような力が必要である。

常に利用者・家族・支援関係者という環境に、ある時は共感・協働し、一体化し、ある時は、軸と芯をもったぶれない姿勢を持ち続けることは、専門職として高度に自己を統制する力が必要となる。Bowen のいう「自己の分化」の程度は、基礎資格や知識・技術うぬぬ以前に専門職業人としての自己の規定の仕方を左右するものであり、そこに自覚的であることができるかどうか、自らの実践を内省し、そのような気づきを得るかどうかで介護支援専門員の実践の有り様が変わるといえる。

## 2.2. 社会学領域からの概念検討

### 2.2.1 福祉労働とキャリア形成の観点

専門職が多様化してくる現代において、専門職の自律性は、その理念と現実におけるズレが生じる。専門職の自律性が何によって担われるのかによって、専門職の原理と組織原理の対立が生じたり、専門職集団が他の専門職の自律性をコントロールしようとしたり、既得権を求めて現状拘泥・保守化するという問題も立ち現れる（染谷 2007: 40-42）。対人援助職のトレーナーとして著名な奥川は、援助者が所属する組織とクライアントの間で二律背反状態になることは常態的であることを前提に次のように述べている。

援助者としての視点や態度が崩れることなく、クライアントと組織とのあいだに身において両者の関係を俯瞰でき、なお援助者である自分の身を守りつつ、クライアントの福利を第一に、しかも組織を納得させるような現実的な対処ができるかが援助者に問われる。（奥川 2007: 166-167）

奥川（2007: 163）の「自在なスタンスを持った『境界人』としての援助者」という考え方は、Bowen の「自己の分化」という理論と近いものがあり、介護支援専門員の持つべき能力として「自己統制」の概念説明を促進してくれるものである。

## 2.2.2 Robert Bellah と窪田の自立観、人間観

個の自立という課題は、日本が持つ前近代的、封建的人間観から脱皮モデルを提示するはずであったが、戦後の日本社会は、個人主義が不健全なかたちで「ミーイズム」として横行している。ロバート・ベラー (Bellah 1985: 66-71) は、現代アメリカ社会においても、功利主義的個人主義と自己実現を強調する表出的個人主義が蔓延し、個人と公的世界を結ぶ絆が失われ、公的な生活と道徳とが疎遠になっていることを警告する。Bellah は、アメリカ建国以来の聖書的伝統と共和制的伝統を基礎とする公共哲学の復権を探り、連帯関係を可能とする自律的な個人像を求めている。

近代的個人主義の自立は功利主義へと導く。窪田 (窪田・高橋 2004: 11) は、「福祉における自立とは、他からの支援を受けないというような狭い意味での自立を取り上げると、そこには『閉じられた自立』といってよいような、孤立した生活が生まれる危険性がある」と指摘する。行き過ぎた個人主義は、競争社会の中で支配・被支配の暴力社会をつくる。窪田はさらに述べる。

自分自身の崩れそうな自尊感情を維持し、ストレスや敗北感からの一時的な脱出を試みる形の一つがアルコールや薬物やその他の行動への耽溺であるとすれば、そのエネルギーを他者に向けて、自分よりも弱いものをいじめ、暴力を振り、悲鳴をあげさせ、服従させることのなかに、弱い自己のせめてもの「強さのイメージ」を保ちたいという衝動に身をまかせるメカニズムが働く (窪田・高橋 2004: 47)

窪田は、直接的には、援助を受けるクライアントの自立を問題としているが、それは燃え尽きやすい援助職の立場や自立 (自律) にも応用できる示唆に富んでいる。

## 2.2.3 田尾のヒューマン・サービス組織論

ヒューマン・サービスの組織論の立場から、プロフェッショナリズムの態度構造に焦点をあてた研究では、8 因子解 (専門性、自己実現、責任の自律性、研究性、裁量の自律性、クライアント重視、集団的閉鎖性、同僚への統制) で 8 つのヒューマン・サービス職種間の比較を行った。その結果、セミプロフェッションとも呼ばれる看護職や社会福祉従事者は、責任の自律性や裁量の自律性においての因子が低い。これらは組織の中でプロフェッションの階層性に低く位置づけられていること

や専門性の不十分さを反映している。ここでいう職業的な「自律性」とは、他の人からの判断でなく個人の判断でできるという責任性や個人の思い通りにできるという裁量、自ら進んでの自己啓発をするといった内容を含み、クライアント個人だけでなく、「公共奉仕の信念」というメゾ・マクロ領域までを含む行動的な成分を含んでいる<sup>3</sup>。

田尾の研究対象データと分析は、1990年頃のやや古いものであり、いっそうフルプロフェッショナルな職業に近づいている今日の看護職や社会福祉職<sup>4</sup>にそのまま適用できないが、ヒューマン・サービス職種の傾向を知り、福祉従事者の自己統制を知る上では貴重な分析の視点をもっていると評価できる。田尾のいうプロフェッショナリズムの「公共奉仕の信念」という概念は、Banduraのいう集団活動を通しての地域の実践がグローバルな効果に貢献するという広範囲な自己効力感の拡大概念と共通性がある。すなわち、自律性、自己統制の高いプロフェッションは、個人の満足や個人的裁量に留まらずに、より広範な社会への貢献や奉仕へと意識が拡大しているということである。

## 2.2.4 「自己統制」の概念と視点

心理学や社会学の探索的研究では、援助者における自己統制には、個の発達度、個人と環境の相互作用、公共への関心、倫理性が必要であり、多様な考察すべき側面があることが示唆された。尚、以上の先行理論の検討をふまえた上で、次の調査分析における「自己統制」の概念と視点を述べておく。

一般的に心理学では、自己統制は、個人が自分の行動や情動、心身の状態を一定の秩序に向けて統制・調整することを意味する（佐藤 2009: 38-48）。その自己統制はself-regulation（自己制御と訳されることが多い）、self-control（自己コントロール）を指すことが多い。自我心理学では、外界に対しては、自我がどのように自己の内的なこころの動きを制御してバランスを取り、防衛しようとするのかという自己完結的な自己統制がある（山岡・唐沢 2003）。一方、社会学では、システムが、自らの手で秩序を維持、変容させる自律的な働きをすることを「システム

3 田尾（1995: 91）。特にプロフェッショナル意識とキリスト教との関連性を述べているところは興味深い。この他にも田尾は、ヒューマン・サービスの経営や組織論で職業人としての自己統制に触れている。田尾（2001）、田尾（2003）などを参照されたい。

4 看護師が管理者として運営できる訪問看護ステーション、独立した社会福祉士事務所の増加等は、2000年以降に著しい。

の自己組織化」と呼び、環境に能動的に働きかけると同時に環境からも働きかけられるという循環のループをシステム自身が創造して作動させていると考える（正村1994）。

P. ドラッカーに続く経営学の巨人と呼ばれるセンゲ（Peter Senge）の personal mastery は、「自己の人生におけるビジョンと現状の差を明確に認識することで、継続的に自己の能力向上に取り組むこと」（Senge 2006）であるとされているが、システム思考の中で自己マスタリーを説明しており、Senge の提唱する学習する組織は、自己組織化の概念とたいそう近い。

シャイン（Edgar Schein）のキャリア研究は組織論である。Schein（シャイン1991: 155-159）は、自己を組織化して、自律的に人々を取りこみ、また取りこまれ、時に危機的状況でも組織が進展していく決断を自分自身の発達の一部とする人々の能力を管理者の能力としている。そこには、システム論に近い自己統制がある。自己統制は、マイクロレベルからメゾレベルに広がりを持つ。メゾレベルでみる時に、自己統制とは、社会システムの中において機能する。このような社会学のシステム論を本論の調査分析の視点とする。

### 3. インタビュー調査と分析

#### 3.1 調査対象と調査方法（倫理的配慮と分析枠組み）

##### 調査

- (1) 対象者：経験年数や基礎資格、所属事業所の異なる居宅の介護支援専門員4名（1年以上、3年以上、5年以上の者を選定する）
- (2) 選定理由：介護支援専門員として基礎的な実務経験を経た者、専門研修とある程度の実務経験を経た者、主任介護支援専門員研修を経た者を選定し、経験年数の差や所属機関の相違、基礎的教育の相違を考察できるようにした。
- (3) インタビューの内容と方法

下記の Schein のキャリア・アンカー（職業における自己概念、シャイン2003）のセルフアセスメント項目（Schein 2009）を援用して5つの項目を設定し、対象者に半構造的インタビューを行った。但し、5番目の「生活様式」については、考え方だけを踏襲し、項目としては論者のオリジナルとして「職能団体」に置き換えている。



- ・専門分野のコンピテンス（専門性の担保・追求と獲得）
- ・自律／独立（クライアントのために柔軟に自律的に職務が遂行できる）
- ・純粋な挑戦（挑戦し続けること、挑戦を追い求める価値）
- ・奉仕／社会献身（人の役に立つという感覚、社会への貢献）
- ・生活様式（仕事、家庭、人間関係における自己の分化の程度）

また、インタビューに際しては、項目毎にマイクロ・メゾ・マクロのレベル毎の業務遂行能力であることを調査者があらかじめ想定して質問を行い、質問者と回答者のレベルの差異を解釈できるようにした。

### 倫理的配慮

調査においては（1）調査においてなんら不利益を被ることがないこと、（2）個人が匿名化されるように対応表は作成せず、被調査者の意向があれば職種の特定化に制限を設ける、（3）得られたデータは研究の目的以外に使用しないことの説明を行い、確約を行った<sup>5</sup>。

### 調査におけるリサーチクエスチョン

キャリア・アンカーの項目を軸としたインタビュー調査をすると、多面的な職業概念と介護支援専門員業務における自己統制の具体像が浮かび上がるのではないかと。

### 分析の方法 内容分析

#### 分析の枠組み ミクロからメゾ、マクロまでの概念枠組み

尚、作成したインタビューガイド（項目と内容）は次のとおりである。

---

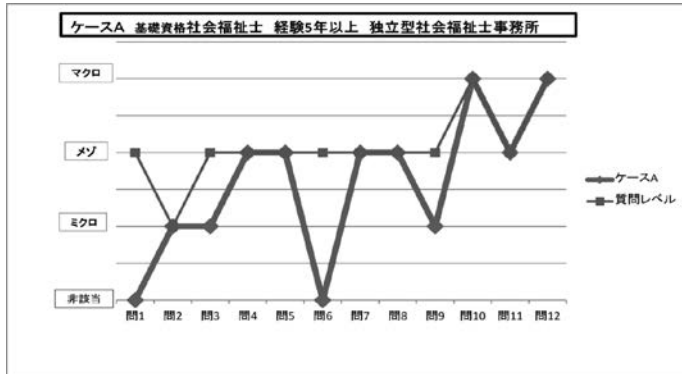
5 本研究の調査は、論者が所属するルーテル学院大学大学院付属・包括的臨床死生学研究所の研究倫理委員会で倫理審査を受けて承認されたものである。

インタビュー項目

大項目 (キャリアアンカー)	質問項目 (基本的な質問項目であり、実際は半構造インタビューであるので、様々な質問や聴き方も付加している)
I 専門・職能的能力に 関して	1 自分の周囲の人が自分にアドバイスを求めてくるくらいに、仕事の専門性を磨きたいと思いませんか。
	2 自分の能力を高く維持・向上させたいという動機はどこから来るものでしょうか。
	3 自分の専門性や職能的能力を高めるために、したいと思うことは何でしょうか。すでにやっていることでもこれからしたいと思うことでもかまいません。
II 自主・独立性	4 自分の専門性や職能的能力を高めるために、したいと思うことの壁になっているものがありますか。どのようにしたらその壁を崩していけると考えていますか。
	5 専門職としての自分の判断能力や裁量を高めることができれば、自分の仕事に具体的にどのような変化が現れますでしょうか。
	6 所属している組織が、所属している勤務先が、現在と異なる能力・専門性を求める仕事 (たとえば経営の幹部、マネジメントの長) のポジションに配置することを要請してきた場合に、どんな対応をしますか。
III 奉仕・社会貢献	7 社会全体の発展に貢献できるのであれば、犠牲を払ってもかまわないという専門職の姿勢をどのように考えますか。そのような個人的犠牲を厭わない介護支援専門員をご自分の職業意識に照らしてみた場合にどう思いますか。
	8 社会に貢献したいという自分の価値観と所属している組織(職場)の方針が対立した場合に、どのように決着することが自分の理想でしょうか。
IV 純粋・挑戦	9 解決困難と思われる仕事に直面した時に、専門職として逃げない姿勢を保つために必要なものは何であると思いませんか。
	10 だれも取り組んだことのないような未知の領域にチャレンジするために専門職どうしが手を取り合って団結していくことはどんな意味をもつと考えますか。
V 職能団体 (この項目のみは論者の付加項目)	11 地域(市町村や県単位)のケアマネジャーとの集まりに参加することは、専門職の資質の向上に関係がありますか。その理由は何でしょうか。
	12 全国組織をもつ職能団体に入ることは、専門性の向上とどのような関連性があると考えますか。

## 3.2 分析結果と解釈

### ①ケース A



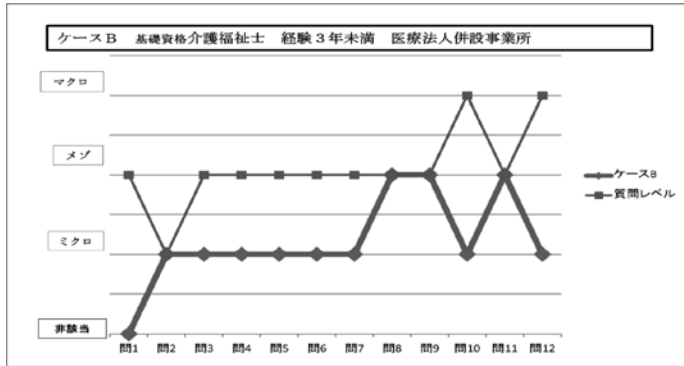
ケース A は、基礎資格が社会福祉士であり、経験5年以上で独立型の居宅介護支援事業所である。問3を除けば、ほとんど調査者の質問レベルと「同レベル」での回答。問1は厚みのある回答を得られなかったので解釈できず、非該当とした<sup>6</sup>。問6は回答者イコール経営管理者であるので該当しない。問9は、「私が〇〇する」の行動に焦点をあててミクロとしたが<sup>8</sup>、複数のスタッフをそろえる事業所の管理者であるという立場からすれば、管理責任者としてのメゾレベルの発言との解釈もでき、実質はミクロからメゾレベルにかけて幅のある実践能力を示唆している。

単独事業所であるが、3人のスタッフを抱え、居宅介護支援事業だけでなく、成年後見制度事業も請け負う独立型の社会福祉事務所であり、ソーシャルワークが実践の基盤となっていることが大きな特徴である。

### ②ケース B

ケース B は、介護福祉士を基礎資格として持ち、医療法人で医療機関や老人保健施設の併設事業所の被調査者である。質問レベルに対しては、ミクロの回答が多い。経験3年未満とあるが、居宅の介護支援専門員としては1年3ヵ月である。介護支援専門員は、施設居宅を問わずに5年の経験で主任介護支援専門員研修の受

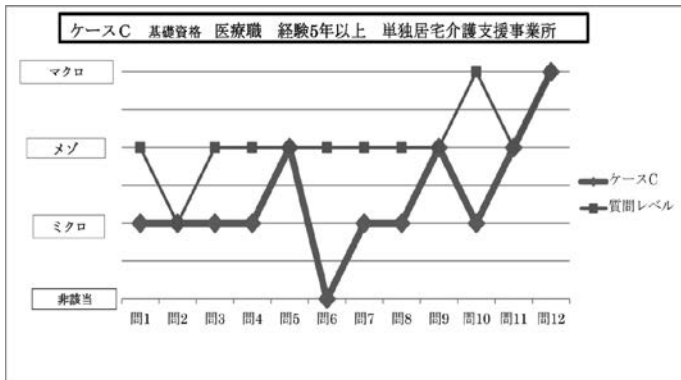
6 質的研究としては、単に「はい、いいえ」だけでなく、多面的な角度からの質問で掘り下げるべきだったので、データとしては今回の分析の対象としなかったという意味である。



講資格を得られるが、施設やグループホームでの介護支援専門員は、兼任が多く、居宅の業務とは内容的にも大きく異なる。実質的に1年未満に近い初任段階で、業務遂行は眼前のことで精一杯の状況であることがインタビューの内容から伺えた。

しかし、居宅介護支援事業所としては8人という比較的大所帯で、通常は個人業の意識で業務遂行を支配していても、難問に直面するなど、いざという時は組織性を発揮して個の介護支援専門員をバックアップしている。そのことが問8、問9、問11のメゾレベルの質問にメゾレベルで回答する部分に現れていると考えられる。問1はケースAと同様の判断。

### ③ケースC

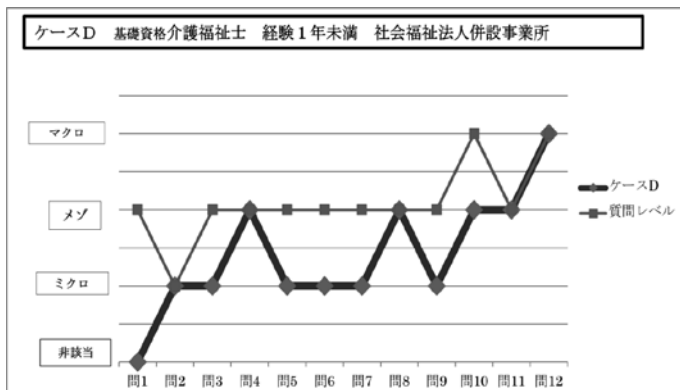


ケースCは、経験が5年以上、基礎資格が医療職の被調査者であり、単独の居宅介護支援事業所である（ケースAと同様の独立型であるが、いわゆる「一人事業所」であるため「単独型」とした）。医療のどの職種であるかは、同意が得られないため非明示である。

田尾のプロフェッショナル研究などでは、医療職は、フルプロフェッションの医師を頂点に、そこに近づきめざそうとする強い動機が業務遂行への自律性を育んでいくと指摘される。しかし、ケースCの被調査者は、家庭で長く介護者としての役割を果たしてきた経験を活かそうという強い動機から業務についており、仕事の満足は「自己セラピー」と述べるミクロな業務意識と感覚を持っている。

様々な工夫と努力で仕事の自律性や一人事業所ならではの裁量を発揮しているが、外界との相互作用は少なく、ミクロレベルの範囲内に多くが収まる。問5に対しては、行政や地域包括支援センターを上司、上級（上司）機関と捉え、地域全体をひとつの職場と捉えるような自己組織化の感覚を持っていると考え、メゾレベルとした。専門職として社会に貢献できる資格に育てたいというマクロレベルの感覚も持ち合わせている。問6の非該当は、ケースAの理由と同様である。

#### ④ケースD



ケースDは、経験年数1年未満であり、全体としてミクロレベルで考え、活動するが、問4や問8のように困難な場面に直面した時には組織的な対応の片鱗を見せる。これは、法人内の障がい者福祉部門で指導的な立場も経験しており、母体が社会福祉協議会という地域の間接援助・資源調整型の事業所で長く従事している

ことも関係していると推察される。問9も「折り合いをつける」という個人レベルの業務遂行なのでミクロとしたが、「利用者が取り巻く環境の中で自分たちが折り合いをつける」というメゾレベルの萌芽も感じられ、実質的には、ミクロレベルからメゾレベルへの業務遂行の広がりがある。問1はケースAと同様。

## 考 察

論者の質問レベルに最も近いケースAは、常に事業所単位や地域の支援体制の中での専門性を考えており、職能団体への参加や法制度に対する関心も強い。ソーシャルワークを基盤とし、独立した事業所管理者であることが要因として考えられる。

他のケースは、比較的ミクロレベルでの回答が多かったが、業務の工夫の中で自己効力感を得たり、業務領域を自己制御したり、組織や制度の限界の中で最大限の自己裁量を発揮しようとする実践能力の自律性を垣間見ることができた。あいまいさやジレンマが常につきまとう実務の中で、自己の立ち位置を常に確認して自己調整することは成熟といえる。そして、その中には、ミクロからメゾレベルへの実践の萌芽も読みとれた。ふだんはミクロレベルでも、いざ壁にぶつかったりした時には、自己の所属する事業所の組織力を活用したり、地域社会の行政や機関をネットワークからコンサルテーションを受けたり、協働のメゾレベル実践へと拡大する萌芽をどのケースにおいても確認できた。

全国的な職能団体とのかかわりを問う質問においては、ケースBを除いては、国家・制度というマクロ領域までに視野が及ぶことも示された。これは、介護支援専門員が自らの個人業務の力量の限界の自覚とともに、マクロな制度システムに常に影響されていることを直感しており、マクロレベルでの変化を望む能動的な意志とも取れる。

これらの洞察から、問題が複雑であるほど、社会システムの交互作用を活用することが介護支援専門員の専門性であることが示唆された。また、ミクロレベルだけに埋没しないことは、仕事の意味・意義を失ってバーンアウトする予防線になっているとも考えられる。

また、ミクロからメゾへの広がり（自己組織化）は、危機や困難にポジティブに対処しようとする時に立ち現われる可能性を示された。それを推進するのは、事業所や地域の職能団体でのスーパービジョン体制や個々人でコンサルテーションを受けるシステムをどの程度構築してバックに持っているかが影響するのではないかという仮説も浮かび上がった。

当然であるが、たった4ケースの分析なので、客観的検証的な結論は言えない。しかし、介護支援専門員の肉声に迫ることから、リアルな実践の営みの意味を探求できた意義はある。次に、このような自己組織化という介護支援専門員の「自己統制」が、ケアマネジメント実践事例においては、具体的にどのように展開されるかを、今回の被調査者とは別に論者が別の介護支援専門員へ行ったスーパービジョン事例から掘り下げてみたい。

#### 4. ケアマネジメント実践事例の分析

介護支援専門員が実際の実践場面とどのように自らを律し、統制していくか。ミクロレベルと捉える「自己統制」は、どのように困難な実践場面を打開していくか。ミクロからメゾ、マクロのレベルを視覚的・立体的に捉えることができるように、「エコマップ」<sup>7</sup>を使った実践事例<sup>8</sup>のスーパービジョン<sup>9</sup>の結果を考察する。

---

7 ソーシャルワーク実践における生態学・システム論的視点から1975年にAnn Hartmanによって考案され、クライアントとその家族との関係や地域生活支援の援助関係や社会資源との相互作用・交相互作用を見るツール（eco map：生態図）である。関係の結合度を線の太さで表したり、ストレスや葛藤をギザギザ線で表したり、エネルギー・関心の流れを矢印→で表す。

8 ここで取り扱う事例は、言うまでもなく個人が特定されないような倫理的配慮を行い、事例提出者の承認を得ている。また、プライバシーの保護のため、事例として考察しようとする目的や趣旨が歪曲されない程度にフィクション・再構成が施されていることをお断りしておきたい。

9 スーパービジョンは、通常組織において管理的、教育的、支援的な機能を持つ専門家養成の方法論であるので、この事例と論者との関わりにおいては、管理的機能を持たないコンサルテーションと呼ぶことが正確である。しかしながら、主任介護支援専門員の研修や事例研修、介護支援専門員の育成に関する研究調査では「スーパービジョン」という用語が通称となっているので、ここではスーパービジョンという用語をそのまま用いる。

## 4.1 事例 1

ケース概要	氏名 A (女性)	86 歳 要介護度 3	世帯状況 長女と同居
	担当介護支援専門員	経験 3 年未満	基礎資格 介護福祉士
要介護の状況	歩行ふらつきあり、転倒のリスクあり。認知症状が進み、直前のことが思い出せず、過去と現実との区別がつかず、排泄や着衣失効のため援助が必要。しかし、他人には相手の言葉をオウム返し、相槌をうって取り繕うのが上手いので一見認知症状はわからない。		
主介護者の状況	同居する長女 (50 代) は、中学教諭で朝早く夜遅く非常に多忙。A とぶつかることが多く、気持ちにも体力的にも余裕がない状態。		
個人因子	身長 149cm, 体重 56kg 性格: 穏やか、対外的には社交的、プライド高い		
	生活歴・職業歴: 幼少期満州で過ごす, 学校教諭, 晩年は夫の介護 趣味・嗜好: 生け花		
環境因子	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長男 (61 歳) も近隣に住んでおり、仕事はあるが定年後の再就職のため、残業はなく、休みも融通がきく。通院は主に長男が担当。</li> <li>・数軒隣が地区の民生委員で見守りあり。近所の人が道端で倒れた A を発見して下さったこともあるが、近所から長男に A のことで苦情がくることもあるとのこと。</li> </ul> <p>(家屋・福祉機器等の状況)</p> <p>木造の平屋日本家屋、玄関上がり框に踏み台、掘こたつ、家具調のベッド</p> <p>台所への移動の際の手すりを住宅改修で取り付けしている、一本杖使用</p>		
健康状態	<p>◇アルツハイマー型認知症。病状として進行中であり、幻覚 意欲低下見当識障害 失認・失行あり。ハーハーとため息多い。認知症以外特に内科疾患はない。</p> <p>◇服薬状況: 服薬: 認知症 アリセプト, メマリー, ローコール, デイオパン。</p>		
日中の過ごし方とサービスの活用状況	(土~月) ショートステイ, (火・木) 訪問介護 3/日, (水・金・土) デイサービス		
	長女が出勤時に声かけをしていき、その後ヘルパーが (デイサービスやショートステイ以外の日) 朝、昼、夕と 1 日 3 回入り、排泄介助・調理・食事、更衣介助、服薬介助、室温など環境の管理をしている。長女が帰ってくる前に就寝、夜間はオムツ使用、日課の管理は家族とヘルパー。デイサービスやショートステイで他利用者と問題なく談笑されている。長女とはお互いプライドが高く、性格は合わないが、家を守っているという意識が強い。		



<p>支援の経過</p>	<p>◇2007年より支援を開始するが、Aの認知症状の進行により、あちこちのタンスの衣類を出す、雑巾と台拭きを取り違えるなどあり、帰宅した長女とけんかになる。身体動作の緩慢と判断力の低下から、失禁・尿臭も目立つようになっている。部屋のあちこちに「この中の洋服は勝手に出さないこと」「布巾と台拭きを一緒にしないこと」と黒と赤のマジックで書かれた貼紙がある。</p> <p>◇長女は、2010年4月より転勤になった勤務先で、土日出勤も強いられることが多くなり、「3倍は忙しいのに上司は介護に理解がない」とこぼす。</p> <p>◇担当ケアマネジャーは、屋内の廊下へ移動の手すりがあれば本人がおっくうがらずにトイレで用を足すことができると判断して手すりの設置を勧めるが長女より「掃除に邪魔」と受け入れてもらえず、居間から台所への手すりの設置のみに留まった。</p> <p>◇長男から、主治医より認知症の薬（メモリー）が追加になったとのことで、メモリーノート（服薬の状況や状態の変化の記録）をつけるようにも言われたとのこと。長男は、受診後ショートステイ先への送迎をし、自分で服薬の主治医の指示を事業所へ伝達。メモリーノートは、デイサービスやヘルパーにも記録を依頼。</p> <p>◇一月後、長男より電話。「主治医がメモリーノートを高く評価してくれておりほめられた」とのこと。また「手すりは母も喜んでおり、もっと設置して欲しい。妹（長女）は、反対しているが、義務感で介護をしているだけで今の母の姿はかわいそう。あれは虐待かも…」と話される。</p> <p>◇2010年冬のある日、ヘルパー事業所から連絡。長女がインフルエンザで奥の部屋に寝ている、とのメモをこたつの上に発見したとのこと。その日のデイサービスは中止。デイサービスに連絡が入っていなかったのも、逆に、「ケアマネさんは家族から聞いていないのか」と聞かれる。長男に電話したが、長男も長女の病気のことは知らなかった。3日後に訪問事業所から電話。朝、長女より電話があり、熱が下がり動けるようになったので今日はこちらで対応する、明日はお願いしたい、とのことであった。</p>
--------------	--

<p>担当介護支援専門員（ケアマネジャー：CM略す）の悩み：</p> <p>Aと長女の関係は確執があり、長女には住宅改修等の提案も受け入れてもらえず、多忙なため連絡も取れない。自分に直接連絡相談をもらえず、信用されていないようだ。長男との意識のずれや要望もあり、このケースへの苦手意識が強くなりどうしたら良いかと悩んでいる。</p>	<p><b>エコマップ</b></p> <p>The diagram is an eco-map centered on 'A' (the client). 'A' is represented by a central circle with a lightning bolt symbol. Surrounding 'A' are several boxes representing different entities and their relationships:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>事業所 (事業所 CM)</b>: Connected to 'A' by a solid line with a lightning bolt.</li> <li><b>病院 (主治医)</b>: Connected to 'A' by a solid line with a lightning bolt.</li> <li><b>長男</b>: Connected to 'A' by a solid line with a lightning bolt.</li> <li><b>長女 (学校)</b>: Connected to 'A' by a solid line with a lightning bolt.</li> <li><b>訪問介護</b>: Connected to 'A' by a solid line.</li> <li><b>短期入所</b>: Connected to 'A' by a solid line.</li> <li><b>民生委員</b>: Connected to 'A' by a solid line.</li> <li><b>近所</b>: Connected to 'A' by a solid line.</li> <li><b>デイ</b>: Connected to 'A' by a solid line.</li> </ul> <p>Additional elements include:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>A box labeled <b>事業所 CM</b> at the top, connected to the main '事業所' box.</li> <li>A box labeled <b>病院 主治医</b> on the left, connected to the main '病院' box.</li> <li>A box labeled <b>長男</b> at the bottom left, connected to the main '長男' box.</li> <li>A box labeled <b>長女 学校</b> at the bottom right, connected to the main '長女' box.</li> <li>Arrows indicate the direction of relationships: solid arrows point from 'A' to other entities, while dashed arrows point from other entities back to 'A'.</li> <li>A lightning bolt symbol is placed near 'A' and '長女'.</li> </ul>
--	--

## 考 察

事例1は、利用者Aの認知症の進行・歩行能力の低下、失禁・尿臭の増加等に対して、なんとかAの生活機能低下を食い止め、排泄の自立を促そうと住宅改修(屋内の数カ所の手すりの設置)を提案するも、同居家族の反対で支援が思うように進まないケースである。考察のポイントは3点、以下の通りである。

### (1) 孤立し、追い込まれる介護者

介護者の長女は、もともと母親Aとお互いのプライドや性格でぶつかることが多く、確執がある。そこにAの病状の進行と長女の転勤による多忙さが加わった。長女にしてみれば、住み慣れた家で母親の世話をしたいという一方で、土日も勤務を強いられる過酷な勤務で疲れ果て、認知症の進むAを受容する余裕をなくし、イライラが募るストレスフルな毎日を送っている。Aに対しては、比較的認知症に詳しいとみられる主治医より指示・助言・新しい服薬投与などが試みられているが、通院介助を行う長男がその指示を受け取るのみで、長女に詳細が伝達されていなかった。長男は、手すり設置でAの喜ぶ姿を見たり、服薬管理の件で医師から賞賛を受けたりする。しかし、長女には苦勞に見合うような報酬(周囲からのプラスのストローク)がない。それどころか、長女は長男から「虐待者」というイメージでさえ見られている。

### (2) 悪循環(袋小路)に陥った介護支援専門員(CM)

担当介護支援専門員は、本人のために懸命に支援するが、提案したことが長女から強く拒絶され、その後も長女と連絡が取れにくくなり、「自分は信用されていないのではないか」「うまくいかない、苦手だ」と思うようになっていった。Banduraのいう自己効力感が極度に低下し、苦手意識の悪循環に陥ったのである。

### (3) エコマップからみる状況と相互作用

エコマップを書いてわかってきたのは長女の勤務先の状況である。「3倍位忙しい」は、単に勤務先の中学校の就労や管理体制というメゾレベルの問題だけではない。国の学習指導要領(2002)から始まった「ゆとり教育」は、学力低下を生み出したとの批判を受け、その反動で近年の学校教育の学習量は過剰に増え、その負担は教師にも重くのしかかっている。そのようなマクロレベルでの相互作用が現在の義務教育にあることを想像しなくてはならない。

長女は、相当ストレスフルな状況の中におかれ、それでも A を施設入所させたりせず、同居を継続してきた苦労や苦悩がある。教員であるという職業観がいつそう我慢を強いたという側面も考えられるが、身内からも批判の目で見られ、許容範囲を超える孤立状態に陥っていた。

ケアマネジメント実践では、本人と家族の意見が異なる場合、認知症等で立場の弱い本人を最終的に擁護するようにと言われている。しかしながら、このようなケースで A 本人の味方・支援をすればするほど、A 本人への支援は長女から拒否され悪循環を起す。ゆえに、このような時の支援の処方箋は、孤立無縁な状況におかれている長女のこれまでの取り組みを具体的に把握し、その労苦をねぎらい、長女のがんばっている、もがいている、苦悩している姿をありのままを受け止め、承認することにある。長女自身がだれかに認められていると気づく時に、周囲に好循環が作用し、本人 A に対してもプラスへ相互作用が発生する。

しかし、悪循環の袋小路に陥っている時に、援助者自身がどの方向に向かってどのように取り組むか、正しい方向性に気づくことは難しい。マイクロレベルで援助者自身が何とかしようと思うと自己の自我を守ろうとする心理的防衛機制で、苦手な相手から逃げようとするか、相手の言いなりになるか、逆に自分の意見を聞いてくれる（この例でいえば長男）へのパイプを太くして相手をコントロールしようとするか、のいずれの対応を取りやすい。

そこで、着眼すべきは、周囲の環境に働きかけ、また働きかけられ、マイクロレベルの自己の実践からメゾレベルでの実践へとシフトすることである。すなわち自己の組織化をとおして、メゾレベルへと開かれる志向性を持つことである。その際のキーポイントは、自己が所属する居宅介護支援事業所でのスーパービジョンや外部の適切なコンサルテーションを受けられる体制があるかどうかにある。

事例 1 の場合は、論者との個人スーパービジョンとグループ研修を通して、援助者の自己覚知が起き、孤立した介護者を承認するところから閉塞した状況が好転していった。

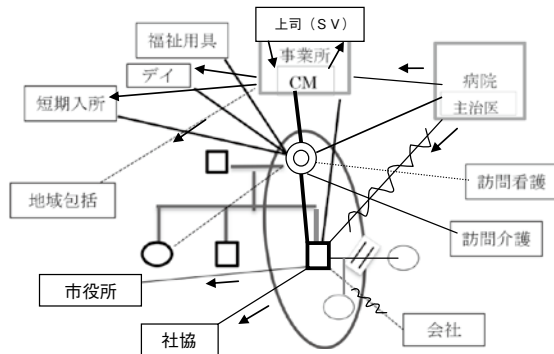
## 4.2 事例2

ケース概要	氏名B (女性)	79歳 要介護度5	世帯状況 次男と同居
	担当介護支援専門員	経験5年未満	基礎資格 看護師
要介護の状況	立位、歩行は不可で座位保持はできるが、入浴、排泄等は全介助。夜間せん妄が頻繁にあり、不穏・暴言、ベッドから降りようとするなど日か離せない。		
主介護者の状況	次男は、夜間(23-5時)のパート就労で日中は休息している。介護負担が多いと仕事を休むことが続き、収入への影響が大きい(5-18万円)。妻とは離婚し、長女一人がいる。長女は学習障害のため、特別支援学校(高校)入学予定。次男が栄養のバランスを考えて食事を準備。日中の支援は難しいが、それでも苦心しながら行っている。		
個人因子	はっきりと主張できる性格だが気分のむらがある。ほとんど専業主婦で過ごされた。子ども3人を生み育てた。無年金。新興宗教に熱心に活動していた。		
環境因子	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 夫：年金18万円/2か月 文字が読めないなど理解力が低下。 自分の身の回りのことは可能。</li> <li>・ 長男と長女は別に所帯を持つ。2人とも家計が苦しいが、家族会議の後、長男から5千円、長女から2万円の支援が得られるようになった。</li> <li>・ Bとの関係で新興宗教の人が時々出入りしている。「頼めば買い物などしてくれるかもしれないが、私は好きではないので極力依頼しない」と次男。</li> <li>・ 古い市営住宅の2階に25年余り居住。近所からの支援や協力は無い。Bは階段昇降できなので受診や通所利用時は次男や男性ヘルパー介助で移動。</li> <li>・ 福祉用具レンタル：介護用ベッド・介助バー・車いす・福祉用具購入：ポータブルトイレ・障害者手帳取得(1級)・医療福祉費受給者</li> </ul>		
健康状態	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 腎不全(糖尿病性腎症)・認知症・血糖のコントロールが困難であり、低血糖に陥りやすい。糖尿病性網膜症発症(左失明・右視力低下)。皮膚疾患:陰部白癬症・全身皮膚乾燥症。現在は血液透析せず経過観察中。肺に水が溜まりやすい。利尿状態により1日の水分制限変動あり(400-1000ml)。喀痰多い。筋力低下は著明。健康状態が比較的落ち着いたとき、デイやショートステイ利用が可能となり、声掛けをすると、穏やかに会話ができる。肺炎などで入院の繰り返しが続いている。</li> </ul>		

<p>日中の過ごし方とサービスの活用状況</p>	<p>デイを週2回、ショート月6日、ヘルパーは平日毎日の利用。サービス利用中は、離床し、体操や車椅子での散歩などを取り入れ覚醒に努めた。日中傾眠多いと夜間不眠となり、不穏出現し、大声で騒ぐ。夜間介護者は不在であり、孫や夫は介護が難しいため、夜22時訪問ヘルパーを利用(陰部のただれあり、おむつ交換が必要)。デイサービス利用中気分不良となり、救急搬送。低血糖と痰による窒息。吸引のできる環境(訪問看護等)を主治医より求められ、現在のデイサービスは3カ所目。訪問看護は、入退院続き、予定キャンセル。その後どこも満杯で最後にやっと確保。インシュリン注射必要でショートステイの受け入れ先は希少。次男は1日でも長く生きて欲しいと願うが、Bが騒いでしまうため主治医より透析はできないと言われ、ターミナルな状態。施設入所を検討してみるが、現在の経済状況では難しい。社協での福祉資金の融資や生活保護も検討するが、夫や介護者の子どもの手当があるため無理とのこと。入院時に認知症あるため24時間家族付き添いを病棟から依頼され、介護者は仕事との両立に苦悩している。</p>
<p>支援の経過</p>	<p>◇2011年9月、透析病棟で入院。シャント作成し、バルンカテーテル挿入中・酸素マスク・500mlの水分制限・血糖チェックの管理中。認知症状が出現しているため、ケアマネジャーを早く決め在宅復帰するよう主治医より促されて、支援の依頼受け、開始。</p> <p>◇退院後も発熱や肺炎、低血糖などで入退院繰り返す。夜間の不穏強く、自宅でも大騒ぎし近所迷惑になることを心配していた。家族皆不眠が続いている。施設入所させたいが経済的に困難。</p> <p>◇主治医より認知症状進行し、昼夜ともに不穏強いため透析は見送るよう相談うけている。透析しないことは延命しないことなので家族は困惑。</p> <p>◇なんとか見つけたデイやショートステイ利用で、意識レベル良好で表情も豊かになり、会話もできる時もあったが、下痢やインフルエンザで入退院続く。</p> <p>◇在宅においても、度々ベッドから降りようとし、サイドレールを乗り越える事あり。台所までいざってくる。危険なのでずっと見守りしなければならない、と次男は仕事を暫く休む。訪問看護をやっと確保したが、利用料支払いも困難でサービスは増やせない。</p>

担当介護支援専門員の悩み：  
サービス資源が不足し、訪問介護導入後も、経済的に困窮。介護者もぎりぎりの状態で、ショート受け入れも困難。合わせてターミナルな状態。どこから手をつければ良いのか途方に迷ってしまう。

エコマップ



## 考 察

事例 2 は、認知症ケアの課題、医療的ニーズ、経済的問題、介護者の就労と介護の両立の問題、障がいを持つ孫の存在などが複合的にからんだいわゆる「困難ケース」の例である。考察のポイントは以下のとおりである。

### (1) 介護者家族と共に傷つき、揺れる

利用者 B 本人は、腎臓病の合併症から透析が必要になるが認知症の不穏状態が激しく、病院の主治医より「このような状態では透析中の安全が保障できない。透析ができないと徐々にターミナル」と宣言され、1日でも延命を願っていた介護者次男は傷つき、大きなショックを受ける。入退院を繰り返し、入院中に付き添いを要請され、次男は仕事と介護の板挟みになり、経済的にも困窮する。在宅でも医療ニーズが高くサービス資源がなかなか見つからず、自宅にいても不穏状態が激しく、目が離せず、近所からも苦情を受け、B も介護者も安心できる居場所がなかった。介護支援専門員も必死にサービス資源を捜し、訪問看護が確保できない間は、自身が看護師である介護支援専門員とデイの看護スタッフで代用的なケアをする。

介護支援専門員がバーンアウトしてもおかしくない状態で、パニックに陥りそうであったが個人スーパービジョンとグループ研修の中で、自身が「問題を解決する存在」でなく、「クライアント（利用者本人、介護者）と一緒に傷つき、揺れる」ことの重要性に気づいた。エコマップで見られる通り、複雑な相互関係の中で複数の問題が起きている。介護支援専門員がそれらの問題を解決しなくては思う程、個人的なマイクロレベルで問題を抱え込み、無力感に陥っていく。このような場合は、まず介護者に寄り添い、共に悩み、揺れ、傷つく弱い存在でも良いのである。介護支援専門員がそのようなポジションに就き、ある意味で意識的に巻き込まれ、共に傷つき、揺れることで逆説的にクライアント（介護者）は支えられ、エンパワメントされる場合がある。解決の糸口は、社会資源システムの交互作用から生まれるのでゴールが見えなくても、待つ（委ねる）ことも必要になってくる。

この場合に、Bowen のいう「自己分化」の程度がある程度高くないと、無意識に巻き込まれ、引きずられていくので相当にきつい作業になる。ジェノグラムを開発した Bowen は、世代間に渡って影響する機能不全家族の世代間継承や影響力を分析しているが、機能不全家族の中で育った成人は、自己分化の程度は低く、自己に対する信頼・信念を持ちにくく、誰かに常に認められようとし、人との情動的なつながりが断ち切られるのを恐れる。論者は、過剰なまでに自分ひとりで責任を負

い、利用者に巻き込まれて自分自身をつぶしてしまう介護支援専門員のスーパービジョンをしたことがあるが、こうした「自己分化」の低いレベルの方であった<sup>10</sup>。

その結果、介護支援専門員が次男と共に揺れ、共に悩むことによって、次男自身が援助者の懸命に収集した情報を活かそうと市役所や社協に自ら出向くという行動に出た。母親への「想い」が強いあまりに生計に困る程仕事を休んで介護をしていた次男であったが、そのままでは生活のバランスを崩してしまうことを介護支援専門員が共に悩み、揺れる中で、最後は24時間ケアをしてくれる施設への入所も決断した。

介護支援専門員は、相手が基本的な情報、知識を求めている場合には、それを提供して問題解決することもあるが、そればかりではクライアントは依存度を強め、解決できない複合したニーズも出てくる。クライアントの状況により、クライアントの自立支援のために、自分の立ち位置、スタンスをしなやかに変える。このような自己統制が介護支援専門員には求められるのである。

## (2) 地域ケアシステムとして対応する。

介護支援専門員は、一時的なコンサルテーションで気づきを得るが、スーパービジョンが体制として継続的・組織的であるためには、事業所内の上司（SV＝スーパーバイザー）や一時の研修では不十分な場合がある。この事例の場合は、不穏な精神状態を有する患者に対応できない医療機関の体制の問題や訪問看護など医療ニーズに必須のサービス資源の不足というメゾからマクロにかけての対応が必要となる。国が進めようとする「地域ケアシステム」構想においてこのようなケースの場合には、地域包括支援センターがサービス資源の不足や認知症の透析患者への対応などの地域に山積するニーズを認知し、介護支援専門員が構築するケアチームより広範なネットワークを展開する「地域ケア会議」の開催が推奨されている。保健・医療・福祉や社会福祉協議会やNPO、民生委員協議会、ボランティア団体など各関係機関の主任クラスの地域ケアの協働の中で、単独機関では対応できないより高次の連携や社会資源の有効活用などを模索し、解決策を探るのである。

それでも尚不足するサービス資源については、新たな資源創出を市町村議会レベ

---

10 彼女は、自分を「アダルトチルドレン」と吐露し、精神科の治療を受けていることも告白したが、確かに子ども時代に受けた傷（アルコール依存症の家庭）があった。いつのまにかクライアントに依存し（自分が絶対にクライアントの面倒をみなくてはいけないと思ひ）、またクライアントの評価・承認を得ようと心身がまるぼろになるまで働いていた。

ルで検討し、都道府県単位での課題としてボトムアップしていく。さらに、国レベルの制度運用や法律改定が必要な汎用性ある課題も明らかにしていく。介護支援専門員のミクロレベルでの自己統制が組織化への方向へ拡大する時、すなわち地域社会に働きかけ、働きかけられることによって、メゾ・マクロレベルへと引き上げられ、より専門的・制度創出的な働きへとつながるのである。地域ケアシステムは、単にサービス資源の効率的活用のためや行政責任を民間に転嫁するための助け合いや見守りのシステムで終わってはいけませんが、このような困難ケースは、そのことを教えてくれるものである。

(3) 困難事例は、援助者をエンパワメントし、援助の醍醐味を教えてくれる。

事例2は、援助者を翻弄、困惑、苦悩に追い立てた困難事例であったが、担当介護支援専門員は、逃避したり、閉じこもったりせず、前向きに周囲の環境に働きかけ、事業所上司や地域の関係者のサポート、事業所内外のスーパービジョンを活用することによって、地域のサービス資源について新たに知り、ネットワークの活用法を学んだ。

また、利用者・家族と対峙し、共に悩み揺れ、共に解決の糸口を探ることによって、担当介護支援専門員は、基礎資格である看護師業務では味わったことのないケアマネジメント実践の醍醐味を知ったという。時に援助者自身が弱さ、無力感を覚え、揺れることが、逆説的に利用者をエンパワメントさせる場合もあるわけだが、結果として地域の社会資源のネットワークの相互作用、交互作用の力を知り、介護支援専門員自身がエンパワメントしたのであった。エコマップは、介護支援専門員自身が自身のスタンス、ポジションを知り、自分自身をコントロールし、気づきを得て成長するために有効なツールであることをより確証するに至った。

## 5. 結び

介護支援専門員に求められる実践能力として、ミクロレベルでの実践能力と考えられた「自己統制」に焦点をあてて、先行研究の知見も活用しながら、インタビュー調査や実践事例を考察してきた。

結論的にいえることは、次の3点に要約できる。

(1) 単なるスペシャリストでなく、プロフェッショナルとして高次元での自己統制



単なる知識・技術の習得、経験の積み重ねでは測れない、プロフェッショナルとしてのスタンス、志向性、姿勢としての「自己統制」は、医師や弁護士などの自律性・独立性の高い職業と同様に求められる高次の能力であり、介護支援専門員に求められる基底面となる能力であること。

### (2) ミクロからメゾ・マクロレベルへの「自己の組織化」としての自己統制

介護支援専門員の構成能力のひとつである「自己統制」は、当初ミクロレベルと考えられたが、1対1のパーソナルな対人援助で対応できるのは一部であり、多くは、介護支援専門員自身の所属機関を含めた多彩な社会資源の活用・連結とその相互作用・交互作用によって、クライアントの抱える課題は解決に向かっていく。そこにおいては、ミクロなレベルに押し留まらず、メゾ・マクロレベルへと自己を組織化して展開していく「自己統制」が求められる。

### (3) スーパービジョン体制、地域のケアシステムの構築の必要性

介護支援専門員が実践の現場で、悪循環の袋小路に陥ったり、クライアントの支配や被支配関係に陥ったり、自己満足かつ閉鎖的なあたかも個人業のようなケアマネジメントになることを予防するためには、自己とクライアント、環境との相互作用で客観的に何が起きているかに気づくことが重要である。そのための有効な手段は、事業所内外でのスーパービジョン体制の構築・活用、メゾレベルからマクロレベルへ至る職能団体への参加や行政や地域のインフォーマル団体も巻き込む真の市民本位の「地域ケアシステム」の構築である。そうした体制、システムがあってこそ、個々の介護支援専門員の能力は活かされる。

折しも現在、厚生労働省内において有識者による「介護支援専門員の資質向上と今後のあり方に関する検討会」が行われ、介護支援専門員の資質・研修のあり方、資格のあり方、業務範囲、事業所内のOJT・スーパービジョン体制、地域包括支援センターを中核とする地域ケアシステムのあり方などが多岐にわたって議論されている。この論考が公の場に出る頃には、国としての介護支援専門員のあり方の方向性が打ち出され、制度化・法定化の作業に入っていることだろう。

その際に介護支援専門員の実践現場からの提言や提案は重要である。また、制度化されても実際の運用は、自治体や自治体が委託する福祉専門団体や職能団体に一定の裁量が委ねられる部分がある（介護支援専門員の法定研修などが良い例である）。また、個々の実践においては、制度化になじまない介護支援専門員の「自己統制」もある。倫理的な部分については、いくら研修や養成テキストで説いても体に刻み

こませるような経験を伴わないと身に付かない部分がある。例えば、事例でも考察したように、介護支援専門員が利用者と共に苦悩し、傷つくことは、真の意味でクライアントを「愛する」実践から出ているのであり、「愛する」ことは「自我に死ぬ」こととも深く関わっている。こうした深い精神性は、「制度の改定」や行政が義務づける「マニュアル的研修」から生まれるものではない<sup>11</sup>。

東日本大震災の被災地では、サービス資源もほとんど失われた中で、人と人、人と資源をつなぎ、また資源を創出していく介護支援専門員の存在の大きさが証明された。一方で、能力的にばらつきの大きい介護支援専門員の「不要論」の声もある。先の「介護支援専門員の資質向上と今後のあり方に関する検討会」では、四年制大学における介護支援専門員の養成コースも提案・検討されている。「障害者自立支援法」が「障害者総合支援法」となって2013年4月に施行されるが、障がい者支援の相談支援の充実（ケアマネジメントの強化）がひとつの柱となっている。2012年7月9日に「外国人登録法」が廃止され、3ヵ月以上の比較的短期的な滞在外国人も住民基本台帳法の適用対象となり、今後は、介護保険制度の適用を受ける外国人も増加する。

こうしたあらゆる枠組みや考えが越境・交錯していく時代の潮流の中で、ケアマネジメント実践が、肥大した官僚制度の中にある機関でなく、利益追求先行の市場原理によるのでもなく、精神性を持った民間の専門家、専門機関において、その専門的な能力が発揮できるように環境を整えていくことが最も肝要な時期に来ていることは間違いない。高齢化の加速、高齢者虐待件数の増加等に直面し、噴出する課題のある中、そして再び大災害の勃発も危惧される昨今にあって、ミクロからメゾ・マクロ活動レベルまでの自在なスタンスと専門的能力を持った介護支援専門員の育成は急務である。

---

11 例えば、知的障がい者との共同生活場の司祭となったヘンリー・ナウエン（Henri Nouwen）は、共に傷つき、相互に仕え合うという姿を忘れた現代の医療や社会奉仕の働きに警鐘を鳴らしている。ナウエン（1993：58-65）を参照されたい。本論においては、当初援助者のエートスとなる精神性やキリスト教的人間観、援助観も論述したが、目的と紙数の関係で割愛した。しかしながら、援助者の倫理性やリーダーシップという面での「自己統制」を掘り下げるのであれば、欠かせない観点であり、今後の課題としたい。

## [参考資料]

- Bandura, Albert. (1995) *Self-efficacy in Changing Societies*. Cambridge: Cambridge University Press. (本明寛・野口京子監訳 [1997] 『激動社会の中の自己効力感』金子書房)
- Bandura, Albert. (1977) *Social Learning Theory*. Upper Saddle River: Prentice-Hall, Inc. (原野広太郎監訳 [1979] 『社会的学習理論—人間理解と教育の基礎』金子書房)
- Bellah, Robert, N. (1985) *Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life*. Berkeley: University of California Press. (島藺進ほか訳 [1991] 『心の習慣—アメリカ個人主義のゆくえ』みずさ書房)
- Greene, Roberta R., Harriet L. Cohen and Colleen M. Galambos. (2007) *Foundations of Social Work Practice in the Field of Aging a Competency-based Approach*. Washington, DC: National Association of Social Workers.
- Kerr, Michael, E. and Murray Bowen. (1988) *Family Evaluation: An Approach Based on Bowen Theory*. New York: W. W. Norton & Company, Inc. (藤縄昭・福山和女監訳 [2001] 『家族評価—ポーエンによる家族探求の旅』金剛出版)
- Senge, Peter M. (2006) *The Fifth Discipline: The Art & Practice of the Learning Organization*. New York: The Crown Publishing Group, Inc. (枝廣淳子・小田理一郎・中小路佳代子訳 [2011] 『学習する組織—システム思考で未来を創造する』英治出版)
- Schein, Edgar H. (1985) *Career dynamics: Matching Individual and Organizational Needs*. Reading, Boston: Maddington-Wesley. (二村敏子・三善勝代訳 [1991] 『キャリア・ダイナミックス』白桃書房)
- 井上貴詞 (2012) 「介護支援専門員に求められる実践能力の検討 I—内容分析による実践能力の概念構造化」『キリストと世界』(22). 東京基督教大学
- 井上貴詞 (2010) 「福祉人材の育成とコンピテンシー」『キリストと世界』(20). 東京基督教大学
- 奥川幸子 (2007) 『身体知と言語』中央法規出版
- 窪田曉子・高橋和義編 (2004) 『福祉の人間学—開かれた自立をめざして』勁草書房
- 坂野雄二・前田基成 (2002) 『セルフ・エフィカシーの臨床心理学』北大路書房
- 佐藤康子 (2009) 「大学生におけるストレスの心理的自己統制メカニズム—自覚的ストレスの高低による内的ダイナミズムの比較」『教育心理学研究』57 (1). 日本教育心理学会
- シャイン, エドガー 金井壽宏・高橋潔訳 (2009) 『キャリア・アンカー I セルフアセスメント』白桃書房
- シャイン, エドガー 金井壽宏訳 (2003) 『キャリア・アンカー —自分のほんとうの価値を発見しよう』白桃書房
- 染谷侏子編 (2007) 「福祉・介護労働の専門性とキャリア形成」『福祉労働とキャリア形成—専門性は高まったか』ミネルヴァ書房

田尾雅夫 (2003) 『非合理組織論の系譜』 文真堂

田尾雅夫 (2001) 『ヒューマン・サービスの経営』 白桃書房

田尾雅夫 (1995) 『ヒューマン・サービスの組織・医療・保健・福祉における経営管理』 法律文化社

ナーウェン, ヘンリー 後藤敏夫訳 (1993) 『イエスの御名で』 あめんどう

正村俊之 (1994) 「自己システム」 山之内靖他編 『社会システムと自己組織』 岩波書店

山岡洋・唐沢かおり (2003) 「自己統制における意志の力と感情の役割」 (日本社会心理学会第 49 回大会)

渡辺三枝子編 (2007) 『新版キャリアの心理学』 ナカニシヤ出版

# [研究ノート] フィリピン語の讚美歌シリーズ Papuri ! 及びそのテキストの傾向についての試論

宮脇聡史

(大阪大学大学院言語文化研究科専任講師)

## 1. フィリピン語のオリジナル・プレイズ Papuri !

フィリピンの福音派諸教会は活況を呈している。センサス等のデータでははっきり見えにくいものの、フィリピン福音主義教会連盟などの把握する教会数の劇的な増加からは、福音派諸教会、及び教会員の飛躍的增加はほぼ明らかと思われる<sup>1</sup>。

教会の礼拝において耳を引くのは、先ずはグローバルに広がるプレイズ・アンド・ワーシップ（以下プレイズ）と呼ばれるスタイルの浸透であるが、それと同時に興味深いのは、現地語の固有の讚美歌が楽しげに、元気に、力強く歌われていることである。この傾向はカトリック教会でも見られるが、これも一方ではカトリック教会の典礼刷新の流れ<sup>2</sup>の中でのことであるとともに、他方でカトリック、プロテスタント双方を含む「ボーンアゲイン」と呼ばれるカリスマ刷新的な運動の中でのプレイズの影響も看過できない<sup>3</sup>。

福音派におけるフィリピン語プレイズのけん引役となったのは、キリスト教放送局 Far Eastern Broadcasting Company, Philippines (FEBC) の番組 Papuri ! (讚美!) である。現在 Papuri ! 自体のアルバムとして 20 巻を数えるに至っており、関連のアルバムや、カバーアルバムなども多数発売されている。

筆者の研究の中心はフィリピンにおける民族意識と宗教の関係であり、特にカトリック教会の教会アイデンティティとフィリピン・アイデンティティの相克を公文書の分析と動向分析を照らし合わせることで明らかにする、というものであった。

---

1 福音派の興隆について学問的な報告は少ないが、例えば Aragon (2001: 369-389) を参照。

2 第2バチカン公会議 (1962-65) に基づき、世界的に進められた典礼刷新はフィリピンにも及び、ミサ典礼の現地語化や会衆参加を含む刷新がすすめられた。

3 フィリピン・プロテスタントの音楽の動向については、Navaro (2001: 451-462) を参照。

但し、筆者自身が特に1998-2000年にアテネオ・デ・マニラ大学付属フィリピン文化研究所 (Institute of Philippine Culture, Ateneo de Manila University) の客員研究員として滞在した折に、自身の信仰生活のために関わっていた福音派教会の動向にも関心を持つようになった。そしてフィリピン福音派諸教会の中にある、社会文化や政治に対してキリスト者として応答する形をさまざまに模索する姿から、多くを触発されてきた。さらに音楽鑑賞を趣味とし、教会の聖歌隊にも積極的に参加した筆者にとって、この2年の滞在は、音楽観、礼拝観、教会讃美観を根本から問い直される新鮮な経験でもあった。

2001年に日本の福音派唯一の神学大学たる東京基督教大学で教員生活を始めたこともあり、フィリピン福音派については学会発表や論文公表などには至ることはなかったものの、サブテーマとして常に意識し材料を収集するよう努めてきた。2011年3月にて東京基督教大学の専任教員を辞し非常勤となった今、日本とフィリピンの福音派教会及び教育機関との幸いで建設的なかわりに対する感謝の思いを込めつつ、なお断片的ではあるが、これまでの知見の中から「論文」とまではいかないが「研究ノート」という形で多少なりともまとめ、公表する次第である。

## 2. Papuri! プログラム・アルバムの経緯

Papuri! のオフィシャル・サイトには、経緯について次のような説明がある。

1970年代は、国際的な歌手グループ、英語の讃美歌とゴスペル・ソングの広がりに伴い、フィリピン音楽、そしてキリスト教の西洋化の時代となった。

じわじわと迫るフィリピンのミュージック・シーンの外国支配を避けるべく、フィリピン放送者連盟 (Kapisanan ng mga Brodcaster ng Pilipinas (KBP)) はすべてのラジオネットワークに1977年よりオリジナル・ピリピノ (フィリピン人の/フィリピン語の) 音楽 (OPM) を放映するようにとの通達を出した。当初 FEBC はゴスペル・ソングのフィリピン語版を流すことでこの通達に対応していたが、材料が足りないため、すぐに終了してしまった。もっとフィリピン的なものが必要なのは明らかだった。

1978年にFEBCはHymnodyプロジェクトを開始した。アメリカ人宣教師ゴードン・イングラント (Gordon England) 博士によるこのプロジェクトは、真に

キリスト教的で、なおかつフィリピン独自の音楽の開発を進めていった。15名の音楽ミニストリーに携わる青年と共に、イングランド博士は初のすべてフィリピン語によるオリジナルのキリスト教音楽のプロジェクトを開始した。16の歌が選ばれ、そのうちいくつかはよく知られ教会でも広く歌われていたが、新しく書かれたものもあった。

エペソ書第1章の黙想をしている間に、FEBC マニラ局長のエフレン・パリヨリナ氏はこのプロジェクトの名前としてタガログ語の「プレイズ」に当たる Papuri ! に行きついた。彼はこのプロジェクトをまとめる3つのCというコンセプトを作り出した。カセット (cassette) テープのアルバムを作ること、楽曲のコード (和音) を記した本 (chordbook) を出版すること、ライブコンサート (concert) をすることである。

初めての Papuri ! のコンサートは1979年10月26日、マニラ市 UN 通りのフィラムライブ劇場で行われ、満席となった。それ以来 Papuri ! は FEBC の音楽部門となり、ラジオ及び公開を通して、教会に仕えるものとなった。

年月を重ねて、Papuri ! の元々の上記3つのCにもうひとつのC、つまり教会 (church) でのプロモーションが加わった。その目的は教会における礼拝で OPM を紹介し、使用を促すことにある<sup>4</sup>。

以上から見て取れるフィリピン教会の状況は以下のとおりである。

教会社会とも英語の歌が優位な状況がまずあり、その中で、フィリピン語賛美歌の運動はフィリピン自体の国語志向の音楽運動と連動していた。そして意外にも、こうした運動がはじめはアメリカ人の指導で進められていることである。

### 3. 発行状況、及び関連アルバム類

筆者の手元には、現在まで公表されているメインシリーズ全20巻のうち、20巻を除く19巻がある。データがウェブ上にある20巻を含めると、公表年は以下のとおりである。

1 (1979), 2 (1980), 3 (1981), 4 (1982), 5 (1984), 6 (1984), 7 (1985), 8 (1986), 9 (1987), 10 (1988), 11 (1989), 12 (1991), 13 (1992), 14 (1993), 15 (1994)

---

4 About Papuri at <http://papuri.ph/about-papuri/> 2012年8月1日閲覧

, 16 (1998), 17 (1999?), 18 (2000-1), 19 (2006), 20 (2011)<sup>5</sup>。15巻までの発行元は Praise 社であったが、16巻が Shekinah 社から出され、それ以降は過去のアルバムの CD による再発売も含めて FEBC が直接発行している。それまではカセットが中心であったが、近年の媒体は CD に移行している。上記からうかがえるのは、最初のアルバムが初年より 1994 年まではほぼ毎年一つずつ発行されてきたが、発行元との関係が原因と推測される事情で数年のブランクがあり、そのうち 16-18 巻がほぼ毎年一つずつ出されたが、18巻が 2001 年に出されたのち、再びブランクができるようになったことである。19巻は 2006 年発行、20巻については 2011 年に CD のプロモーションコンサートが行われたことがウェブ上で明らかになっている。以上で概観はできるが、より厳密な形にまとめるため、筆者は近いうちに直接 FEBC の協力を得て調査をする必要があると考えている。

今回はこのシリーズ全体に立ち入った議論はあまりできないが、手元にある限りで把握できるシリーズの推移を概観する。

1-9巻は基本的に新曲の歌集である。10巻は 10 周年記念アルバムとなっており、新曲を含みつつ、本シリーズ及び姉妹篇の下記 Sari-Likha シリーズの人気作を新しい編曲で取り上げている。

11巻からユニークなコンセプト・アルバムが続く。11巻は Misyon (宣教) と題し宣教をテーマとした新曲が並ぶ。12巻 Bakit ako Panginoon (主よ何故私が) はキリストの受難から復活までをドラマ化したミュージカル・アルバムである。13巻 Pinakamamahal kong Bayan! (最愛のわが祖国よ!) では宣教に愛国のテーマが重ねあわされている。14巻 Labing-Apat na Taong Pagpupuri (14 年間の讃美), 15巻 Luwalhatiin Ka! (栄光はあなたに!), 16巻 Patuloy ang Papuri! (讃美は続く!) はこれまでよりもかなりポピュラーソング色の強い軽やかなアルバムとなっているが、特に 16巻のシンプルでゆったりと南国風に甘美に歌われる作品群は高く評価されたようで、1998年に Awit Award という音楽賞の宗教音楽部門を受賞している。

とはいえ、方向が劇的に変化するのは 17巻の Diwang (祝祭) である。グレゴリオ聖歌と DJ とラップの斬新なコラージュやヒップホップ的手法、強烈なビートのダンスミュージックの多用、「詩編にある通り、体中を使い、あらゆる楽器を使って神をたたえてよいのだ!」「フィリピンの人々の言葉で歌う!」というメッセ

5 17巻は年度の表記がないが筆者のフィリピン滞在中に発行されており、年度は記憶に基づくためクエスチョンマークを付した。



ージを前面に押し出して刺激的な音楽を繰り出し、さらにこれまで文語を多用していたところに口語やスラングを大胆に取り入れた手法も斬新であった。続く18巻ALTA<sup>R</sup>natibo（代替音楽 [alternatibo] / 地場の礼拝の場 [altar-natibo]）はタイトルにおけることば遊び、これまで讃美の世界でほとんど使われることのなかった山岳民族の伝統音楽の要素をコンピュータを駆使して編集した斬新な冒頭から、フィリピンに深い影響を与えてきたヒスパニックな要素（歌詞の中にもスペイン的な男性性の誇示 [Machismo] の批判が歌われる）を含め、ネイティブ性と現代性（キレのある口語やラップなど）をさまざまな形で追及したこれまでにないものとなった。筆者はこの斬新な実験的アルバムが立て続けに出され、その前衛性の問題（とくに教会での需要／受容の問題）が、カセットからCDへの移行期、著作権と発行元の問題などと絡んで、その後のシリーズの活動を鈍らせたのかもしれない、との見通しを持っているが、この点も今後の調査が必要であると考えられる。いずれにせよ、この時期以降、マニラのレコード屋において、Papuri!を含むフィリピン語の讃美アルバムは急速に店頭から姿を減じ、今はInspirationalのコーナーにはほとんど欧米のアルバムが並んでいる。

FEBCからはSalmo（詩編）シリーズ（私が把握している限りでは1995年の7巻まで）、Sari-Likha（創作）シリーズ（複数巻出たことは確かだが、巻数は把握せず。但し、別会社 [Megamedia Corporation] からコンピレーション・アルバムが出ている）が出ているが、現在はシリーズは続いていない様子である（私の滞在した1998年以降現在まで続きの巻の話は聞かない）。

Papuri!には、4巻物のコンピレーション・アルバムが存在する。1989年の第11巻までの中から選曲したもので、年代の表記はないが、11巻、12巻とこのアルバム集の編曲スタイルの類似、Papuri!流行の時期と重ねると、1990年代前半期と大雑把に推定できる。1998-2000年に私が滞在した時期では、レコード店の中で、価格も含めて一番手の届きやすいアルバムであった。すでに述べたとおり、全体を包括的に捉えるには現状は調査がまだ十分進んでおらず、資料収集にも課題が残り、また誌面の制約もある。そこで、当報告では予備的な分析として、このコンピレーション・アルバムに載ったものを、世間的に知られ、よく歌われている代表作と基本的に重なると仮に考えることとし、これらの作品のテキストを紹介、分析することとする。

#### 4. 一般向けコンピレーション・アルバム集（カセット4巻）のテキストの分析

歌詞の世界像、救済論、新生、道德観、社会観と社会实践、主題の特徴などについて分析し、福音派讃美の文脈化の一つの「成功例」としての特徴を明らかにする。

コンピレーション・アルバム集は10曲ずつ、全40曲が、1990年代のフィリピン・ポップスの軽やかでシンセサイザーを活用した耳になじみやすいメロウな雰囲気編曲で、すべて男女混声の合唱でのびのびと歌われている。いずれも上記の実験作より以前のものであり、このアルバム集やPapuri!シリーズ本体が一般のレコード店やスーパーマーケットで広く販売され、人気を博していたころのものである。作品及びたどれる限りの出元は以下のとおりである。特に特徴的なことについて、簡潔な説明を付しておく。なお、カッコ内の数字はPapuri!にその楽曲が収録されている巻数を示しているが、いくつかは上記のPapuri!の関連シリーズからの作品も含まれている。

##### ひとつの歌、ひとりの主 (10)

FEBCのPapuri!の番組のテーマソングであったこともある、代表的な作品であり、シリーズの作家、歌手として代表的な存在であるArnel de Panoの作品でもある。多様性(iba't iba)の中でも唯一(iisa)の祈り、唯一の歌で唯一の神において一致できる、ということが明確に歌われている。冒頭はこのように歌われる。

Isang awit, isang tinig sa iisang Panginoon  
Isang bisig isang lipi sa habang panahon  
Kay Hesus lahat tay'o'y na-uugat  
Kahit saan pa magsanga, kahit saan mang lupa  
Kay Hesus mapag-iisa tayong lahat...

一つの歌、一つの声を唯一の主に  
長きにわたり一つの腕、一つの系譜  
イエスにわれらすべてが根ざしている  
どこで枝を張ろうとも、どこ地でも  
イエスにあってわれらは皆一つとなれるであろう

神は愛であるから (1)

神の愛 (pag-ibig) を歌うが、それが1節では自分たちをお互いに結びつけるということ (pag-ibig ang siyang buklod natin) だから愛し合おうという勧めが歌われ、2節では「愛に飢えたすべての人々を救う神の愛 (pag-ibig ng Diyos na siyang sumakop sa bawat pusong uhaw sa pagsuyo)」を伝えよう、となっており、サビでは「うまくいかないときも、私たちには愛してくださる神がいることを忘れないように (kung tayo'y bigo ay huwag limutin na may Diyos tayong nagmamahal)」とする。

腕を組んでくれる (支援してくれる) 人 (10)

冷たい世間の中でも、僕は君の友達、そばにいて支援するよ、と歌いかける。そして、実はイエスこそが真にそばにいて支援してくれる人 (lubos na kakapit-bisig) である、と歌う。友情からキリストの紹介へと移る伝道の歌である。

あなただけ (9)

救いの体験を描写し、神に向かって讃美する歌。神は城壁 (moog) であり、自由を与える真理 (katotohanan) であり、私が探し求めていた永遠の命に至る道 (daan) である、と歌われる。神である「あなた」に会った後の状態は次のように描かれる。

意味がある (may kahulugan)

神の約束において権利を与えられた (binigyang karapatan)

力 (kalakasan) のある状態

神の膝元で休み (sa Iyong kandungan, doon ako mahihimlay) 神の永遠の愛を感じる

永遠に神が友 (kaibigan) であり放っておかれず見捨てられないことがない (di ako pabayaan, at di ako iiwan)

闇が迫るときも神が光 (tanglaw) となる

悲しみの時にも私の幸福となる (ligaya)

混乱の時に私の平安 (kapayapaan) となる

回心の結果人生が全く変わり、意味のある、明瞭な、救いのある、希望のある、そ

して支えのあるものになった、という喜びを、時に恋愛歌のような言葉遣いと音楽で表現する楽曲はこのほかにもよく見られる。

#### キリストに捧げよ (5)

献身の歌である。心、人生の「すべて buo」をささげようと繰り返し歌われるが、すべてのことにおいてイエスのために輝こう (magningning) ! と明るいイメージを提示しており、楽曲に悲壮感は全くなく、3拍子でアップテンポ、長調の踊るような曲であるのも興味深い。

#### まことの神 (7)

明るく輝かしく主イエスをたたえる、昂揚感のある楽曲。神を音楽に例える表現が興味深い。

O Diyos sa bawat himig ng awitin ko  
Ikaw ang musika't titik nito  
Dinggin ang awitin ng puso ko  
Sigaw ng damdamin at isip ko  
Ikaw Panginoon, ikaw nga ang himig ko  
神よ、私の歌のメロディーごとに  
あなたこそその音楽、調べ  
私の心の歌を聴いてください  
私の気持ちと思いの叫びを  
主よ、あなたこそが私のメロディー

#### 不思議な扉 (2)

不思議な扉があって、イエスが扉をたたいている、応答するならひとりでに開く。その声にこたえて、心にあるその扉を開けませんか、と求める伝道の歌。あなたの人生にキリストがいなければ「ぐちゃぐちゃ (混乱, 混沌, 無秩序) (gulo)」になる、という。この gulo という言葉は、讃美の中で、信仰を持つ前の状態として非常によく用いられる。

## 彼 (1)

「彼 (siya 三人称単数で性別なしなので文脈によっては「彼女」にもなる言葉)」すなわちイエスに出会って人生が変わるとい証の歌。イエスに出会う前は、混乱があり (may kaguluhan), 方向性がなかった (walang patutunguhan) が、イエスに会って平安 (kapayapaan) が与えられ、イエスにあっては常に勝利 (tagumpay) があると歌う。そしてイエスは同伴者 (patnubay), 導き手 (gabay), 命の与え手, 真理 (katotohanan), 道 (daan), 永遠に唯一の主 (tanging Panginoon magpakailan pa man) とたたえる。

## 奇跡の神

人生には多くの問題があるが、そんな時どこに行くのか、と問いかけ、私の神は奇跡の神だ、と神を紹介する伝道の歌。ここでも人々は「行き先を知らない」(di alam saan patutungo) とし、病気 (karamdaman), や問題 (suliranin) に際して、解決については「誰に近づくのか」という問いとなっており、「どうするつもりなのか」という問い方ではない。つまり、問題の解決には、自分でなんとかする、という方向性を前提とせず、問題を持ち込める相手、問題を解決できる相手を探す、という構図が前提となっている。ある意味フィリピン社会にも蔓延しているとされる「パトロン＝クライアント関係」<sup>6</sup>のような非対称的他者関係を前提とした問題設定となっている。

ここで語られる「奇跡」とは「私が信仰を持ってからの変化」である。この自分の変化を「証」の中心におくスタイルは福音派に広くみられるが、フィリピンにおいても1980年代以降影響力を増してきた「ボーンアゲイン」の典型的なスタイルといえる。連呼される「私は (ako)」「私の (akin)」「私を (ko)」が、フィリピンの恋愛歌のスタイル「クンディマン (Kundiman)」流にしつとりと甘く歌われるところに、独特のおおらかな自己愛的な雰囲気も流れるが、うしろめたさやためらいの要素は見られない。

## あなたへの何よりの捧げもの

自分のような注目に値しないものに気を留め愛してくださった神への感謝の応答

6 フィリピン社会をこの概念でとらえる通説的な方法は現在厳しい批判にさらされているが、全面的に否定されているわけではない。この概念の古典的な援用として、ホルンシュタイナー編『フィリピン人のこころ』(山本まつよ訳、めこん、1977年)に収録された諸論文を挙げるができる。

として、自分の人生を捧げますから、存分に用いてください、という献身の歌。やはり明るく甘美におおらかに歌われる。

### 人生の運転手

朝に登校 (pasok) する情景の中で乗り物に乗ろうとし、そこで、そういえば、イエスは人生の運転手だ…と斬新な比喩を展開する。

Gising na naman, kay bilis ng araw

Pikit pa ang mata, bumabangon na sa kama

Kay ganda na naman ng araw kung simulan kong kumanta

また起きた。日の経つのは早い。

ベッドは出たけれど瞼が開かない

歌い始めれば、また何と素敵な日だろう

(中略)

Alas-siyete na, baka ka mahuli sa eskuwela

At marami ng sumasakay patungong Eskolta

Sabi sa Bibliya sa bawat lakad niyo ay…

Si Jesus, siya ang tsuper ng buhay

Dito ka sumakay, gasolina'y pang-habangbuhay

Biyahe mo ay sulit 'pagkat patungong langit

hindi puwede ang sumabit

7時になった、学校に遅刻するかも

たくさんエスコルタ (マニラ市内の繁華街) 行き (のジブニー) に乗る人がいる

(そういえば) 聖書によれば、君たちの歩み毎に

イエスは人生の運転手

君はここで乗りなさい、ガソリンは永遠の命分ある

君のこの旅はお得だ、だって天国行きだもの

「サビット」(つかまり乗り) はできないよ

フィリピン独特の乗り合いバス「ジブニー」をたとえに使い、出入り口の取っ手につかまって短距離を (多くの場合) 料金を払わずに乗る「つかまり乗り」まで出

てくる、フィリピンのオリジナル讃美感を積極的に打ち出した、軽快なナンバーである。筆者はかつてフィリピン語の礼拝で教会員皆で体をゆすりながら楽しく歌った日々を思い起こす。

主よ、あなただったのですね (7)

これも回心の証の歌であり、信じる前（希望がない、苦しみが終わらない、解決を求め続けている、誰が [sino - 何が (ano) ではない] 必要なのかと問うている、ひとりになると寂しい、愛されていないと感じる、恐れがある）と信じた後（神が答え、幸せ、希望となる）が対照される。「あなただったの！」(Ikaw pala!), という驚きの表現はとても日常的で、ある種気軽な表現である。軽快で楽しげな曲調である。

私はどこにいただろう？ (3)

イエスがいなかったら、私は一体どこにいただろう、と歌う詩的な歌。イエスなき人生は「風に遊ぶ」「どこに行くのか分からない」「時流 (agos ng mundo) に流される」「混乱の極み (gulong-gulo)」「悲しみ」「刷新がない状態」そしてこれに対し「答を求めている」「風に遊ぶ (naglalaro sa hangin)」「まだ風の中にいる (nasa hangin pa)」という定めなきが、長調ながらゆっくりした静かで幾分悲しげなメロディーに乗って、独特の憂愁を醸し出している。

イエス、わが音楽 (5)

イエスに出会い、歌が変わった、という、日本のプレイズにもみられるモチーフがある。以前は神に向かって歌うということに意味を見出さなかったが、今は神が私を贖ってくれたので、心から発する音楽が、あなたを讃える、イエスこそ私の音楽であり、イエスこそ音符に輝かしい喜びを与える、とリズムカルに歌う。

神はあなたを愛している (1)

これも伝道の歌である。ゆったりしたいわば「南洋風」の曲で、ここでも「神の子イエス、彼こそ道、真理、命、神への架け橋であり道である」というヨハネ文書的なイエスの神学的な定義のような紹介が、ほんわりと明るく甘く歌われる。

ふさわしいときに (6)

祈りがなかなか答えられない時に、その理由にハッと気づいた、という形で祈りの教理がのびのびと歌われる。

Hangarin ng Diyos ay sa kabutihan ko  
Kailangan Siya ay panaligan ko  
Sa tamang panahon kalooban ng Diyos ay magaganap  
神の願いは私にとって良いこと  
必要なのは私が神を信じること  
ふさわしいときに神の御心は成就する  
Sa dalangin mo ang Diyos ay may sagot  
“Hindi” kapag iba ang nais Niya  
Kung minsay “maghintay” ang itutugon sa ‘yo  
“Oo” kung ito’y layunin Niya  
神はあなたの祈りに対し答えを持っておられる  
御心と異なれば「いいえ」となり  
時にはその答えは「待ちなさい」であったり  
御心にかなえば「はい」となる

私にはキリストで充分 (7)

人生にいろいろの問題があっても、キリストがいれば喜びがあるし、約束を握っていくことができる。だからキリストで充分 (sapat: これ以上必要ない、というニュアンスであって、まあ仕方ない、これで足りるけどね、というような意味合いはない) なのだ、と歌う。

あなたは私に歌を与えてくださった (6)

この曲も神が「歌を与えてくれる」という音楽的な内容がうたわれる。やはりここでも、以前(人生は混沌とし [magulo], 導いてくれる人がなく、問題だらけ、解決努力もむなしという状態)と信じての状態(人生は素晴らしくなり [gumanda], 彩り [kulay] が生まれ、希望に満ち、問題があってもイエスが喜びを与える、イエスが人生の歌、希望の歌、愛の歌を与え、悲しみを取り去る)が対比される証の歌である。

迷える羊



伝道の歌であるが、人生このままいくなら迷える羊だ、と警告する。長調だがゆっくりと翳りのある歌である。情景描写をたとえにした詩的な感興に富んでいる。

Malapit na namang lumubog ang araw  
 Dilim ng gabi'y darating na naman  
 Sa paghimlay mo, isip mo'y naglalakbay  
 Nakatanaw sa kawalan  
 日没は近い  
 夜の闇が再び迫る  
 就寝に際し、あなたの思いは彷徨う  
 彼方に虚無を見据えつつ

Lumipas na naman ang isang araw sa buhay  
 Takbo ng buhay mo'y di mo namamalayan  
 Sa bawat sandaling darating at papanaw  
 Buhay mo'y tila parang kulang  
 人生のひと日がまた過ぎて行った  
 足早な人生の進行に気を留めることもなく  
 ひと時ひと時がやってきては去っていく  
 あなたの人生はどうも何かが欠けているようだ

Kayamanan at lahat ng kalayawan  
 Wala pala itong kabuluhan  
 Kung si Kristo ay wala pa sa iyong buhay  
 Para kang isang tupang ligaw  
 富とすべての放縦  
 そこには何の価値もないとは！  
 あなたの人生にキリストがまだいないなら  
 あなたは迷える羊のごとき者

私はそこにいる (9)

イエスあるいは神が「私はいつも君のそばにいる」と励ます歌。歌い手、特に合

唱がイエスのメッセージを聴き手に伝える形となるのも興味深い。

すべてに勝ってナンバーワン

希望のなかった悲しかった人生が、色彩と秩序を得、喜びがあり、問題を抱えても孤独ではない、というありさまに変えられた、と歌う「新生の証」の歌。サビではイエスこそ第1 (una) と反復して una, una, una…とアップテンポで歌う。

イエス (3)

これも伝統的恋愛歌 Kundiman 風で、短調で始まり、主部で長調に転じる。短調の部分で人生の大変さが歌われ、長調の部分で彼こそあなたの必要な方、頼み、友、太陽、共に悲しんでくれる方、と歌われるのも、例えば有名な Kundiman である「あなたのために (Dahil sa iyo)」のような、悲しく苦しかった人生が、恋人との出会いで輝いていく展開と重なっているようにも見える。

休息

サビの部分に有名なイエスの言葉「すべて疲れた者、重荷を負っている者は私のところに来なさい。あなたがたを休ませてあげよう (Magsiparito kayo sa akin, kayong lahat na nanga-papagal at nanga-bibigatang lubha, at kayo ay aking pagpa-pahingahin)」を置き、イエスは助けてくださるから依り頼もう、と励ます歌。聖書の言葉がフォーマルな文語調であるのは、イエスの言葉が伝統ある荘重なものにとらえられていることを表しているようである。フィリピンの歌の歌詞は詩的であろうとするために、流行歌でも多少文語的であったりするが、この箇所の場合有名な箇所でもあり、それが故に古い翻訳をそのまま入れたということであるのかもしれない。フィリピンにおいては16世紀のカトリックの来訪以来、特に現地語による受難劇 (Pasyon) の成立以来のイエスの言葉やイエスのイメージについての伝統が社会文化に根付いている面があり、それと共鳴するものでもあるだろう。そうした古さをもつ言葉がこのポップス風のメロディーに乗って歌われるのも興味深い。

愛こそが鍵

社会における不和の問題を取り上げ、愛こそが私たちを連帯させる鍵だ、と歌う、社会的なアピール性の強い、福音派のプレイズとしては斬新なものであるが、

1980年代以降、そうした社会的なアピールを持った歌は、カトリックやプロテスタント主流派教会のみならず、福音派の中でも現れてくるようになった<sup>7</sup>。

Umiiyak ang bata sa langsungang  
 Ang magkalahi ay kapwa nag-aalitan  
 May galit na laganap, at may mga nag-papanggap  
 Sadyang ganyang lang ba ang buhay?  
 子どもが通りで泣いている  
 民は皆争いあってばかり  
 至る所に怒りがあり、要求の声が上がる  
 人生とはこのようにしかならないのか？

Kung sino-sino na ang aking nasisisi sa lahat ng mga nangyayari  
 Ang bigong mga pangako ay 'di mo na maitatago  
 Lalo lang lumalala ang sugat na hatid  
 Kaligtasa'y kailangan na  
 Pagkat naghihintay sila sa ating pagkaka-isa  
 すべての出来事に対しあれこれの人々を責めるなら  
 果たされなかった多くの約束はもう隠すことができない  
 傷は悪くなるばかり  
 救いこそが必要だ  
 私たちの一致こそが待たれているのだから

Pag-ibig lang ang susi ng lahat  
 Ang siyang magbubuklod sa 'ting lahat

---

7 福音派の政治社会参与及びフィリピン文化の文脈を重んじ、文化活動の大切さを強調した「アジア教会文化研究所 (Institute for Studies in Asian Church and Culture)」も、1988年と1992年に Samba (礼拝あるいはワーシップ) という歌集をカセットアルバムと共に2冊出版しているが、こちらは主に聖歌隊向けの芸術音楽的なより大きな作品が収められている。これもまたフィリピン文化と社会問題を意識した作品をいくつか収めている。ISACC 自身、FEBC とは緊密な関係を築いており、レギュラー番組を持っている。ISACC については公式ウェブサイトを参照。〈<http://isacc.org.ph/>〉 2012年8月9日確認

Hawak mo kaibigan ang isang kapangyarihan na magbubuklod sa ating lahat.

愛こそがすべての鍵

それこそが私たちすべてを結びつける

友よ、私たち皆を結びつける権威をつかみ取ろう

#### 大いなる愛 (4)

神の救い、その大いなる愛をのびのびと讃美する歌である。

#### 互いに愛し合おう (6)

ヨハネの手紙第1第4章からテキストが採られている。ここでも聖書の引用はフォーマルな文語である。明るくアップテンポな曲調が荘重な歌詞に軽やかさを与えている。

#### ひとつの詩編 (8)

タイトル通り、聖書の詩編を思わせるような、神をひたすら讃え、信頼を表明する落ち着いた曲調の歌である。

#### 宣教師 (11)

この曲は宣教師の働きを描写するユニークな作品である。しかもアップテンポで、宣教師の働きが充実した楽しいものとして歌われているように聞こえる。

Walang tigil sa paghakbang sa patag at kabundukan  
Sinasaliksik maging pook na liblib upang ang aral ay maihatid  
平地でも山岳でも、歩みを止めることはない  
隠れたような場所までも調べ上げる—教えを届けるために

Buong tapang na nangangaral kahit saan pa man mapadpad  
Pag-ibig ng Diyos inihahayag sa bawat taong makaharap  
勇敢にも、どこに流されていこうとも宣べ伝える  
眼前のあらゆる人々に神の愛を語り伝える

Siya ang misyonero  
Siya ang tunay na kawal ni Kristo  
At makikita sa kanya ang kagalakan  
na maibalita ang Ebanheryo sa buong sanlibutan.  
彼／彼女は宣教師  
彼／彼女こそ真のキリストの兵士  
世界中に福音を宣教できるという  
その喜びが見て取れるだろう

私たちは神を讃美する

自然の情景の美しさ故に神を讃える、という讃美。その南国風のゆったりとした甘い調べによって、自然描写がとてもローカルな雰囲気醸し出している。

大いなる誠実

神の永遠の誠実を荘重かつドラマティックに讃美し、神に生涯の忠誠を誓いつつ壮大なクライマックスを築く劇的な作品で、作者 Arnel de Pano のソロ版と並んで、合唱版による讃美作品としても教会でよく歌われる。サビの部分は以下のとおりである。

Dakila ka, O Diyos  
Tapat ka ngang tunay nagmula pa sa ugat ng aming lahi  
Mundo'y magunaw man, maaasahan kang lagi  
Maging hanggang wakas nitong buhay  
神よ、あなたは偉大です  
われらの種族の始原以来、まことに誠実です  
世界が崩壊するとしても、いつもあなたに希望を置きます  
この命の終わりまでも

讃美の歌

アップテンポの楽しい讃美歌。神が愛してくださるから讃美の歌を歌おう、と呼びかける。主と一緒にいてくださるので喜びがあり、問題が解決し、讃美があふれる、というとても楽観的な明るいトーンの歌詞で一貫している。

#### 新しい創造 (4)

キリストを信じれば、人生は刷新される、と歌う。これもアップテンポで楽しい歌になっている。

#### 神は生きておられる (11)

君の人生は混沌としていて (may gulo) 困難が終わらない、私が思うに、それは君に足りないものがある、キリストからの救いを受け入れていないということだ、悔い改めて刷新されれば神の愛を受けられる、と未信者を説得するモードがそのまま歌われているユニークな歌。さらにこれほど素晴らしい救いを受け入れない君の心は石のようにかたくなだ (parang bato), と畳み掛ける。そして神は生きておられ、あなたの心の扉をたたいているから、心を開こう、と呼びかける。音楽は落ち着いたトーンである。

#### あなたは驚嘆すべき方 (8)

罪びとの私に愛を注いでくださるとは、なんと神は驚くべき方か、と讃美する。ゆったりとしみじみと歌われる。

#### 私は従います (2)

従う (sumunod) という動詞の活用形が反復される信徒 (献身) の歌。従う、と決心した時、神の愛によって刷新され、悲しみを除かれ、希望を受け取った、と歌う。

#### 私はすべてをささげます

これも献身の歌だが、驚くことにサンバ風のきわめて明るい踊りの音楽である。以下のサビの部分はもうこうなると踊るしかないというリズムカルそのものの音楽である。

Lahat, lahat ay aking ibibigay

Ibibigay pati aking buhay

Upang purihin Siya

すべて、私はすべてをささげます

自分の命 (人生) だってささげます

主を讃美するために

求めよ、探せ、叩け (7)

サビの部分に有名なマタイによる福音書7章7節「求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます」が引かれている。これもアップテンポであり、歌詞の内容と結びついてとても明るく楽天的な響きができる。

もし君が望むなら (2)

信仰を増し加えられたい、優れた模範を残したいと願うなら、主を第1とし、主を見つめよ、とアドバイスする歌。

心の底からの感謝

しっとりゆっくりと甘美に、救いを与え、刷新を与えてくださった神の親切を心の底から讃える、という歌。

彼をたたえよ (1)

周囲を見回し、鳥や花が神の愛を歌っているなどの素晴らしいものを見出し、だから神に讃美し、感謝しよう、という歌。

以上、特に最初の方の巻に重心を置きつつ、特徴のあるものを中心に作品を紹介してきた。その中で、いくつかの興味深い特徴を概観すると、

- (1) 未信者を信仰に招く歌が多い、また信じない者への警告の歌もある
- (2) 信仰をもった結果人生ががらりと変わった、という歌が多く、自分の変化こそ奇跡で、神のおかげだ、という語りになる
- (3) 献身の歌や献身した生き方についての歌がある
- (4) フィリピンの音楽文化や詩の文化を踏まえた歌も積極的に作られている
- (5) 社会的な問題関心がうたわれるものもある
- (6) フィリピンのライフスタイルや環境を踏まえた斬新な描写や比喩も見られる
- (7) ラブソングと神への愛を歌う歌の親近性

といった点が看取される。

総じていうと、アイデンティティの表現が明確であり、積極的に外に向かってアピールし、また社会とのかかわりの中で、個人のみならず教会的なアイデンティティ

イの形成が歌われ、新たな文化創造のエネルギーを感じさせる。日本における海外作品の翻訳導入への依存度の高い『リビングプレイズ』などと比べるときに、オリジナリティの高い Papuri! には信徒、教会、キリスト教運動の積極性とダイナミズムを看取することもできる。ただ、より公平な分析をするにはもう少し多角的なデータの突合せが必要であろう。それはむしろ、讃美歌や礼拝の研究を専門とする研究者、実践家が行うべき作業であるとも考える。

## 5. 最後に—今後に向けて

Papuri! アルバムは巻数も多く、時期も長きにわたるため、全体を一度に分析するのは容易ではない。そのため今回は、一般に反響の多く人気があると思われる、コンピレーション・アルバムに含まれる楽曲とその歌詞の分析に限定した。

今後は時期やテーマに分けてテキストのより詳細な分析を行うとともに、Papuri! シリーズのフィリピン諸教会や FEBC におけるより詳細な位置づけの調査を進めていきたい。またはじめに述べたとおり、フィリピン福音派の特徴や動向については引き続きサブテーマとしてではあるが追い続け、適宜まとまったところで公表し続けることができれば、と考えている。

### [参考資料]

- Aragon, Averell U. (2001) The Philippine Council of Evangelical Churches. in Kwantes, Anne C. *Chapters in Philippine Church History*. pp. 369-389. Mandaluyong City (Metro Manila): OMF Literature.
- Navaro, Joel. (2001) Music in the Philippine Protestant Church (1960-2000). in Kwantes, Anne C. *Chapters in Philippine Church History*. pp. 451-462. Mandaluyong City (Metro Manila): OMF Literature.



# [調査報告] 教会ベースのゴスペルクワイヤ, その現在と未来 アンケート及びインタビュー調査結果から

森 恵子

(東京基督教大学専任講師)

## 1. はじめに

いわゆる「ブラック・ゴスペルブーム」が日本を席捲くしてから10年以上が経つ。その間にゴスペルという言葉は音楽のジャンルとして定着し、ゴスペルクワイヤ(聖歌隊)という形態も日本人に知られるようになった。Oh Happy Day等多くのクワイヤで歌われた曲は、Amazing Graceと同様「聞いたことのある曲」となり、クリスチャンでない人々にも好まれるようになった。この現象に注目したキリスト教会(以下教会)の中には、ゴスペル=福音を知らしめる機会として、自らゴスペルクワイヤを立ち上げる所、会場を提供する等間接的に支援をする所が多く現れた。現在教会をベースとするクワイヤの数は優に100を超えており、今も日本各地で、ゴスペルのため初めて教会を訪れ、クワイヤメンバーとなる人々がいる。

このような教会ベースのクワイヤメンバーのうち、約7割はクリスチャンでないという統計があり、今回調査した音楽ミニストリー団体のクワイヤでも、その比率は同様であった。この比率からも、参加者の大半はいわゆるキリスト教の教えそのものに関心を抱いて、ゴスペルクワイヤに足を運んでいるわけではないと推測される。とすれば、彼らがクワイヤに参加し、継続的に教会に足を運んでいる理由は他のところにあるものと目される。本稿では、その理由を探索するにあたり、ゴスペルが英語を用いて展開されていることに注目し、教会ベースのクワイヤメンバーへのアンケート・インタビューによる、「参加の目的・目標」「英語の歌への態度」の調査を行った結果を分析し、さらに今後のクワイヤの可能性について私見を述べることとする。なお後述する塩谷(2003)には、カルチャーセンターや音楽教室を含む、日本全国のクワイヤを対象にしたアンケート結果があり、本稿はそれを踏まえた調査であることを断っておく。

## 2. ブラック・ゴスペルの歴史

初めに、ブラック・ゴスペルの歴史を概観し、日本の人々がこの音楽形態にこれほどの興味関心を抱くようになった理由を探る材料としたい。以下に、スピリチュアル（ゴスペルのルーツ）とゴスペルの歴史、さらに日本に一大ゴスペル・ブームが起こった時期を簡単に振り返ることにする。実情としては、クリスチャンであってもその詳細を知らずにいることも多く、一方クリスチャンでないゴスペルファンの中には、関連する教会史・黒人教会音楽の歴史に相当詳しい知識を持つ人々もある。この食い違いもまた、現状のゴスペルのあり方に影響を及ぼしているようである。

### 2.1. 18世紀から20世紀まで

ゴスペルのルーツについては諸説あるが、18世紀半ばに興ったスピリチュアルと呼ばれる音楽（アフリカ各地から北米に連れてこられた奴隷たちにより作られた宗教歌）がその起源であることは、一致している。自身ゴスペルディレクター・シンガーである塩谷達也の著作『ゴスペルの本』には、スピリチュアルとゴスペルの始まりが簡潔に記されているので、この塩谷の解説に、ソウル音楽誌の特集記事からの補足情報を加え、以下に要約する。

18世紀北米において、奴隷であった黒人たちは、白人の奴隷主たちに連れられて教会に行き、殆どの場合会堂の外で讃美歌と説教を聞き、信仰を持った。いかなる集会も禁じられていた黒人たちは、危険を冒して深夜に森の中で集い、奴隷の身分からの解放、そして魂の解放を求めて神に祈り、歌い、踊った。彼らの密かな礼拝で歌われたのは、白人の教会で知った賛美歌や聖書の言葉と、故郷の文化を融合した賛美であり、これが魂の叫びとしての「共同体の歌」スピリチュアルとなった。歌い継がれることで発展していったその音楽は、奴隷たちに希望と生きる力を与えるものとなり、やがて奴隷蜂起、奴隷制度廃止運動の推進力ともなっていった。奴隷解放が進んだ19世紀後半になると、黒人学校のFisk Jubilee Singersという男女混合グループが、初めて白人聴衆の前でスピリチュアルを歌った。彼らの公演の成功により、スピリチュアル（ジュビリーとも呼ばれる）は北米全土、ヨーロッパへと広まって行った。

20世紀に入ると、比較的小規模の黒人教会において、それまで奏楽に使われることがなかったピアノやクラリネットと共にスピリチュアルが歌われ、それがゴス

ベルの萌芽となった。しかしこれが音楽ジャンルとして確立されたのは、ゴスペルの父と呼ばれるドーシー（Thomas A. Dorsey）によるところが大きい。1920-30年代に彼が創った「ゴスペル・ソング」の数々は、ブルース、賛美歌のメロディ、スピリチュアルを融合したものであった。ドーシーが自らの曲を楽譜にして販売し、また自ら各地の教会で演奏して曲の普及に努めた結果、ゴスペル・ソングはペンテコステ派などの黒人教会に知られるようになった。1950年代からの公民権運動では、賛同する黒人・白人が共にゴスペルを歌い、彼らをつなぐ役割を果たしたため、ゴスペルは教会の外にも知られるようになった。20世紀後半には、黒人教会の牧師（とバンド）が歌のリードをとり、会衆またはクワイヤがそれに応えて歌う、コンテンポラリー・ゴスペルの形式が知られるようになり、メンバーが百から数百人のマス・クワイヤの中には、海外公演を定期的に行うほど有名なグループも生まれた。

## 2.2. ゴスペルの質的变化

ゴスペル音楽は大きく発展し、北米の教会と社会に影響を与えたが、その後逆の作用も起きたという指摘がある。野澤（2006）は、北米プロテスタントの白人保守派教会がコンテンポラリー・ゴスペルを取り入れた結果、21世紀のゴスペルは人種やルーツを超えた、一つの礼拝スタイルとなったと述べている。野澤の研究調査によるとまず、20世紀初頭に始まったペンテコステ運動が全米各地に広がった結果、ペンテコステ派以外の教会にもゴスペルが認知されるようになったこと、そしてゴスペルを用いた礼拝音楽と音楽指導は「楽器を演奏できる者、指導できる者が行う」つまり、その教会に属する素人によって行われていたことが注目される。

その後、白人の保守派教会において青年層を教会に引き入れるための方策として、音楽が注目されるようになり、コンテンポラリー・ゴスペルを礼拝に取り入れるところが増えた。しかし、これらの教会ではそのリードにあたる人材がいなかったため、外部から音楽ミニスター（指導者）を雇い、礼拝におけるゴスペル奏者・指揮者の専門性を求めた。人材には限りがあったので、一人の音楽ミニスターが日曜日にいくつもの教会・礼拝をかけもつ事態も起きた。このようにして、伝統的に「献身、奉仕」に基づく役割だった音楽ミニスターが、洗練された技術への対価＝給料に基づく仕事へと変化し、伝統的黒人教会の「会衆参加型礼拝」のゴスペルから、白人保守派教会の「観賞型礼拝」の、プロに導かれるゴスペルが生まれたというのが、野澤の論である。

このように、ゴスペルは18世紀のスピリチュアルに端を発し、現在に至るまで北米を中心に発展してきた。一方殆どの日本人は、背景はおろかゴスペル音楽そのものを知る機会がなかった。キリスト教会に属する者の間でも、賛美歌・聖歌に収められたスピリチュアル/黒人霊歌に詳しい者は少数であった。それでは20世紀の終わりに突然日本に訪れたゴスペル・ブームは、どのようにして始まり、発展していったのだろうか。

### 3. 日本におけるゴスペルの広がり

それまで日本人に馴染みの薄かったゴスペルは、思いがけない形で日本に広がった。多数の記事やインタビュー記録によると、それまで少数の音楽関係者のみが知る音楽だったゴスペルは、1993-94年に日本公開された映画「天使にラブソングを…1&2」の人気により、一気に広く知られるようになったとされる。実際、この映画が評判となった後、大都市のカルチャースクールには多くのゴスペル講座が設けられ、海外から複数のマスクワイヤ（100名以上からなる教会または地域のクワイヤ）が公演に訪れるようになった。ではこのブームの始まりについて、新聞ではどう取り上げているだろうか。ゴスペルについて掲載された記事を、年を追って調べてみた。

#### 3.1. 新聞記事でたどるゴスペルブーム

今回参照した読売新聞の東京版・大阪版では、1989年を皮切りに、ゴスペルに関連する記事が継続的に見られる（初出は1989年12月25日東京版夕刊、「米で高まるコーラスの人気」）。1991年の記事中にはゴスペルの定義が説明されており（6月7日「黒人讃美歌と民謡の競演」、11月2日「ママ、アイ・ウォント・トゥ・シング」批評記事、ともに東京版夕刊）、翌年には、NHK-BSのゴスペルのルーツ・曲の特集番組を紹介している（3月16日東京版夕刊、「元巨人のクロマティがゴスペル紹介」）。ここまでは先行する北米でのゴスペル人気が反映された記事であるが、翌年1993年からは、日本でのムーブメントを記述する記事に変わっていく。まず4月13日の東京版夕刊には「天使にラブ・ソングを…」日本公開の記事が登場し、既に前評判も高かったためか、あらずじも述べられている。

その後、1994年に4回、1995年に1回、1997年に3回、1998年に2回、1999

年には7回、それ以降も年に2-3回のペースで、ゴスペルが取り上げられている。記事を読み進めて気づくのは、ゴスペルという言葉、及び音楽ジャンルと内容、プロ・アマチュアミュージシャンについての認知が、年を追うごとに深まっていったということだ。例えば1994年の記事では、文部省（当時）の「教育用音楽用語」の改定に伴い、ゴスペルが公の用語として使われるようになったことがわかる（12月4日東京版朝刊、「音楽用語を16年ぶり改訂 原音尊重・民族色豊かに／文部省」）。その後の記事では、時折ゴスペルの定義は載せながら、主に人気の高まりと普及を反映した、ゴスペル講座参加者へのインタビュー、各地域のゴスペルコンサートの様子などが記され、人気の高さを伺わせている。また、2000年には福岡、2001年には石川のゴスペルクワイヤの記事が登場し、人気の全国的な広がりをも示している（2000年12月7日西部朝刊、「希望の世紀 ゴスペル高らか 大野城市で17日にミレニアムコンサート」、2001年3月5日東京版朝刊、「ゴスペル、お年寄りを魅了 北陸グレースマスクワイヤ、福祉施設で披露」）。なお、クワイヤ参加者・主催者へのインタビュー記事において頻繁に挙げられているのは、ゴスペルの魅力についてであり、リズムに乗って大声で歌うとストレスを解消できる、歌で思い切り感情を表すことができる、グループで歌うと一体感・連帯感を持てる、癒しの効果がある、などクワイヤメンバーたちによる感想が掲載されている。

### 3.2. ブームの後で

いわゆるゴスペル・ブームが起きたのが1995-2000年頃とすると、多くのブームがやがて「過去のもの」とされていったのと同様、ゴスペルも淘汰されていてもおかしくはない。しかし数は減少したとはいえ、カルチャースクールには今もゴスペル講座が置かれ、教会ベースまたはコミュニティベースのクワイヤが生まれ続けているという現実がある。一方では新しくゴスペルを始める人々がおり、他方では10年以上ゴスペルを歌い続けているグループがあり、一過性であるはずのブームの後もその魅力に惹きつけられる人々がいるということだ。その理由は何だろうか。

前出の塩谷（2003）には2000年頃実施された、399名のクワイヤ参加者へのアンケート結果が掲載されているが、それによると主なゴスペルの魅力は「一体感、気持ちよさ、感動（が伝わる）、解放感、ストレス解消」である。また、クワイヤに参加する意義としては「楽しく自由に歌える、元気になり生きる力を得る、自分（の気持ち）を表現できる、一緒に歌う仲間と交流できる」等が挙げられている。前述の読売新聞記事においても、ほぼ同様の理由が挙げられており、これが「魅力」の

中心であったことは間違いない。

こういった経緯を念頭に置きつつ、当時から10年以上を経た現在のクワイヤメンバー達が、どんな目的や目標を持って参加しているのかを、今回実施した調査結果から見ていく。この調査においては、特にブーム当時と比べ数が増えた教会ベースのクワイヤに注目した。

## 4. 調査の概要と結果

2010-11年に、塩谷のアンケート結果をふまえて「教会のゴスペルクワイヤに参加しているメンバーの目的・目標は何か」さらに「英語の発音上達は参加者の目的の一つなのか」という視点からアンケート・インタビュー調査を行った。

協力を得たゴスペルクワイヤは、Hallelujah Gospel Family (HGF) という、全国の教会を活動拠点とする音楽ミニストリー団体である。クリスチャンの総合ディレクター（指導者）が統括し、クリスチャンの音楽指導者を、会場となる教会に派遣しているが、参加者については信仰や音楽経験の有無は不問のため、クワイヤメンバーの背景は多様である。

### 4.1. アンケート調査

首都圏4つのHGFクワイヤに、多肢選択39項目・自由記述1項目からなるアンケートへの協力を依頼し、54名のメンバー（以下、被験者）から有効回答を得た。設問のうち約4分の1は被験者の英語使用環境について、4分の1は歌う目的や目標について、そして残りは英語の発音・聞き取り等についての自己評価項目である。

被験者は主に30代以上の男女であり、4割はゴスペルを始めて1年未満である。また半数近くは定期的に英語を聞く・話す環境ではない（英語を聞く・話すのは1週間に30分以下、または殆どないという回答を選択）。ゴスペルの英語曲を歌うのが、唯一の英語使用の機会である者も、6割近くいた。

### 4.2. アンケート結果

以下は被験者の活動目的に関する項目である。なお答えはすべて5つの選択肢から1つ選ぶ形式である。「クワイヤに参加することの醍醐味（良さ）はなんですか」という設問に対する回答は、

- (1) 歌うことで生まれる感動 20%

- (2) 皆で一緒に歌う時の一体感 19%
  - (3) 思い切り声を出せる機会 11%
  - (4) よい指導者との出会い 7%
  - (5) 心と体の解放感（気持ちよさ） 6%
- （選択肢右側の数字は、被験者全体のうち、各選択肢を選んだ人数の比率）

また、「クワイヤに参加している（いた）目的・ゴールは何ですか」という設問に対しては、

- (1) ストレスの解消 30%
- (2) ほかの参加者との交流 20%
- (3) コンサートへの参加 17%
- (4) 声量・声質の変化 13%
- (5) 英語曲のマスター 13%

という回答を得た。塩谷のアンケートから10年が過ぎた本アンケートにおいても、ゴスペルの魅力、参加目的共に、回答の傾向はよく似ている。なお本アンケートでは少数ながら「英語曲のマスター」を選んだ者もあった。これは、アンケートの後に任意で行った個人インタビューにおいても、複数名に挙げられている目的であった。

被験者の英語に対する考え方を見るために設けられた、「英語の発音に関するあなたの感覚は、次のどれに一番近いですか」に対しては、

- (1) 外国人に通じる発音を身につけたい 43%
- (2) 自分の発音の弱点を意識している 17%
- (3) 将来もっと正確で自然な英語で話せるようになれると思う 17%
- (4) 殆ど気にしていない（あるいは、する必要がない） 13%
- (5) 発音が悪くても通じればよい 9%

という結果で、「通じる英語、より正確な英語」への関心の高さを表している。ただし被験者はメンバー全体の中で、英語に関連するアンケートに答えることを選択したグループであるため、選択しなかったグループよりも英語への興味が高い可能性があり、この設問の結果を一般化はできない。

以下は、被験者の英語に関する自己評価項目である。答えは5段階のリッカート尺度により、各記述に対し1:強くそう思う、2:そう思う、3:なんともいえない、4:そう思わない、5:全くそう思わない、の中から選択する方式である。よって、数値が低いほど各記述に強く同意していることになる。

まずは、前項に続いて英語一般についての設問である。

#### 英語全般への苦手意識がある

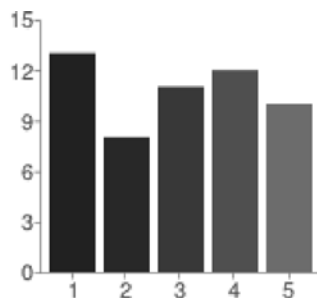


図 1

M=2.96, STDEV.P=1.44 (M= 平均, STDEV.P= 標準偏差)

「英語は昔から苦手」な人から「英語の専門家」まで幅広く参加しているのが日本のゴスペルクワイヤであり、今回の被験者に関しても同様であることが、他の回答やインタビューからも明らかになっている。この幅広さが上記設問の回答に表れたと言える。

それでは被験者にとって、「英語の発音上達のためのゴスペル」という意識は、どの位見られるのだろうか。以下の「歌に関する目標」「英語に関する目標」は「英語の曲の練習に関する質問」というカテゴリーの下にある設問である。



ゴスペルを歌うことに関して、自分なりの目標を持っている

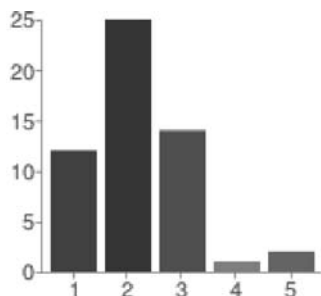


図 2

M=2.19, STDEV.P=0.92

約7割の被験者は、歌に関して明確な目標があるという結果が出た。一方「英語の目標」に対する答えは、それほど明確ではなかった。

英語に関して、自分なりの目標を持っている

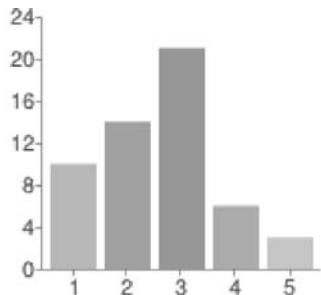


図 3

M=2.59, STDEV.P=1.08 (M=平均, STDEV.P=標準偏差)

英語＝歌詞の発語に関する目標、と言い換えてもよい。「歌に関する目標」に比べ被験者の答えにばらつきがある。「英語の発音上達が参加の目的かどうか」に対する直接の答えとはならないが、やや消極的な考え方の傾向を見ることはできる。

目的・目標はプロセスの中で変化することも多い。歌や英語の場合は「前より上

達したかどうか」が一つの鍵であり、自分の上達を実感するとき、その事実の後押しされてさらなる目標が生まれ、結果的にその活動が継続される、というプロセスが一般的である。では、被験者はゴスペルクワイヤで、歌や英語の発音の上達を自覚しているのだろうか。

クワイヤに参加して以来、歌に関して、自分の成長を感じている

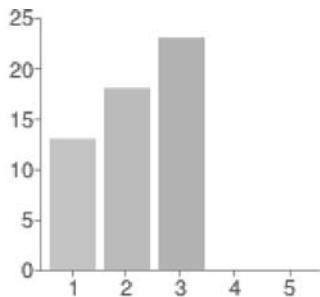


図 4

M=2.19, STDEV.P=0.80

総合ディレクターがインタビューで話していたことだが、「歌が前より歌えるようになった」という自覚が全くなければ、クワイヤの継続参加は困難であろう。よって、この設問についても当然の結果が出たと言える。なお「どちらともいえない」回答のうち、クワイヤ歴1年以下の者が10名いるのは妥当としても、5年以上の者も3名おり、彼らは歌以外の理由で継続参加している可能性が高い。

クワイヤに参加して以来、英語（発音）に関して、自分の成長を感じている

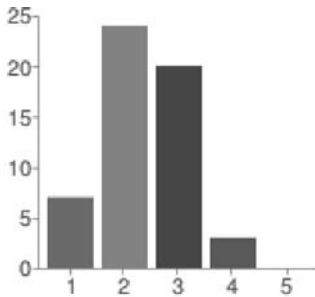


図 5

M=2.34, STDEV.P=0.77

発音の上達を自覚するという回答が約半数だが、上記「歌の上達」よりも消極的な回答数が多い。また、アンケート後のインタビューで指摘のあったことだが、普段英語を使わないメンバーにとっては、英語の上達を自己評価することは難しいかもしれない。

なお、ゴスペルを通し「歌の上達」「英語の上達」の両方を自覚している被験者のうち、英語への明確な苦手意識を持つ者が8名いる。そのうちゴスペル歴が5年以上の3名も、「英語は苦手だが歌も英語も上達した」と回答していることは、興味深い。

前述の全国アンケート調査において、参加し続ける動機として「楽しさ」が挙げられていたが、本稿では「英語で歌うのが楽しいから参加している」かどうかを尋ねた。その結果は、

### 英語で歌うのが楽しいから参加している

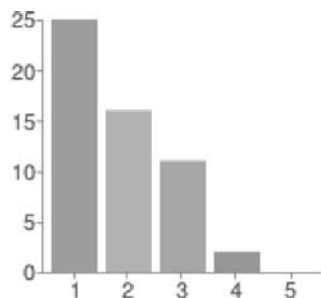


図 6

M=1.81, STDEV.P=0.88

英語で歌うのが楽しい、という意見が明らかな多数派であり、これが被験者の参加目的の一つであると言える。

なお、英語は苦手+英語で歌うのは楽しい、という回答の被験者が12名あり、そのうち7名はさらに「歌も発音も上達している」と回答している。彼らにとってはゴスペルが、それまでの英語学習では得られなかった「楽しく、かつ上達する」機会であるのだろう。「好きこそものの上手なれ」という諺があるが、ゴスペルを歌うことが楽しくて継続参加している被験者にとって、英語の苦手意識は障害とならないようだ。アンケート後のインタビューにおいて、「アンケートに答えた後、苦手な英語なのに歌い続けたら発音やリスニングが上達していた、と気づいた」というコメントも複数あったことから、英語に関する上達は思わぬ副次効果と感じている被験者もいるようである。

### 4.3. 自由記述回答の概要

アンケート結果に表れない被験者の意見を知るため、設問の最後に自由記述欄を設けたところ、54名中28名から回答を得た。そのうち5名は「英語は苦手だが」と前置きした上で、歌うこと（賛美）の楽しさ、ゴスペルへの愛情を述べている。他にはクワイヤのメンバーやディレクターとの交流、雰囲気の良い、歌による心の解放等のコメントが複数あった。これらはどれも、「何故ゴスペルクワイヤで歌っているのか」という問いの答えともなっている。

英語を教えている、あるいは学んでいる被験者からは、「英語の歌を歌っても英語がしゃべれるようにはならないが、発音や聞き取りは上達する」「(歌う時の)英語と日本語の感覚の違いを知った」「初めは歌を覚えるのに精いっぱいだったが、最近ではテキストの発音アドバイスを参考にして歌うようになった」等の意見が出た。一人の被験者は「ゴスペルは英語の上達のために始めたわけではないのですが、英語の歌を歌うということは発音の上達や言葉のフレーズを覚えるにはとても良いと思います。クワイヤで歌うことは本当に楽しいです」と述べており、これが「ゴスペルと英語の上達の相乗効果」と言えるかもしれない。

#### 4.4. クワイヤディレクター（指導者）へのアンケート・インタビュー調査

教会ベースクワイヤの全体像を見るため、クワイヤの指導・運営にかかわる指導者5名にも、自身のゴスペル指導に関する考え方、クワイヤメンバーの様子などを尋ねた。その結果指導者たちに共通していた意見は以下の通りである。クワイヤは互いの技術を競う場ではなく、互いを尊重する人間関係を育む共同体となることを目指しており、それがゴスペル＝福音の素晴らしさを伝える一つの方法と考えている。

クワイヤメンバーの主な参加目的については、指導者の全員が把握していた。その中でストレスの解消・解放感については、以下のコメントがあった。「自分はゴスペルの生まれた時代の、黒人たちの歴史背景を知ること、ゴスペルの本質を知った。私たちがゴスペルを歌って心の叫びを外に出すと、(黒人たちがそうしていたように)自分を縛っているものからの解放を得ることができるのではないか、と考えている」

また英語の発音に関しては、英語話者がクワイヤの歌を聞いて理解できるレベルを目標においており、新曲の練習では、メロディを付ける前に歌詞をリズム読みで教えるなど、様々な工夫をしていた。ゴスペルクワイヤで歌い続けることで、英語の歌と発音が上達するという「ゴスペルと英語の相乗効果」についても同意、または個人差が大きいがありうる、と肯定的な意見であった。

HGFの総合ディレクターは、「本物の英語、プロの指導」に価値を置く日本文化においては、質の高い指導に費用を払って参加することが好まれる傾向があること、一方で完璧を目指さない「ゼロ・ストレス」の雰囲気が必要であることを挙げている。

## 5. 考察

### 5.1. アンケート結果から

まず英語に関してであるが、クワイヤメンバーである被験者たちは、学校等で習う英語と、クワイヤで歌っている英語を、違ったものとして捉える傾向があるようだ。それは英語そのものの差異ではなく、英語を使用する側の動機づけの違いと言えるかもしれない。調査結果から明らかのように、英語上達のためにゴスペルを始めたというケースはなく、初めから英語の上達を期待して歌っているわけでもない。彼らの一部は英語の歌を上手に歌いたいという動機から、発音や歌詞に注目するようになり、受容的なディレクターに励まされながら上達していく。その環境が、メンバーが英語への苦手意識に阻害されることなく、楽しく学ぶことを可能にしているといえる。

ただし、これには一つの条件が満たされる必要がある。今回の結果は、「英語で歌うのが楽しいから参加している」という設問に多数が肯定的、という被験者から出てきたものである。つまり彼らは英語への動機づけという条件が満たされている群である。被験者の考える「本物のゴスペル」は、塩谷のアンケート回答者と同様、黒人教会の礼拝やマスクワイヤのコンサート風景のイメージを伴っている。本物と同じように歌いたいという憧れがあるとき、歌詞が英語であることは積極的な意味をもつ。よって英語で歌うことを楽しいと感じ、上達への意欲も生まれやすいのである。後述するが、クワイヤメンバーの共有するゴスペルのイメージが、「黒人の宗教音楽」から変化していった場合は、英語の歌に対する態度も変化していくことになる。

クワイヤディレクターに関しては、メンバーとの信頼関係作り、歌詞のメッセージの共有・理解、そして効果的な指導に努めていることが明らかになった。印象的だったのは、音楽的素養、発音、リズム等のレベルが様々なメンバーが集まる場所で、参加者全員が楽しく歌うことができるよう献身的な努力をしており、ディレクターがいわば「集う人々に仕える羊飼ひ」となっていることであった。今回訪問したいくつかのクワイヤでは、ディレクターのこの姿勢が個々の参加者のニーズを満たし、楽しいと感じさせ、ディレクターや他のメンバーとの連携を生み、クワイヤが一つの共同体として育っていく、というダイナミクスを見ることができた。

## 5.2. 教会ベースのゴスペルクワイヤの意義

これまで明らかになった、日本人が感じるゴスペルの魅力（高揚感、解放、一体感、癒し、楽しさ等）、その源泉は何であろうか。クリスチャンであれば簡潔に、祈りと賛美による神とのコミュニケーションがゴスペルであるから、解放や喜びがあるのだと答えるかもしれない。ゴスペルのルーツを重んじる者は、音楽の中に神への叫びと信頼が込められており、それが歌う者の心に響き、感情に訴えるから魅力的なのだと答えるかもしれない。

しかしクリスチャンでないクワイヤメンバーは、これらの答えに困惑するのではないだろうか。言葉にはしなくとも、「クリスチャンでなくてもゴスペルを歌っていいのだろうか」という戸惑いや、「自分が得た解放感、癒しといった変化は、どこから来たのだろうか」という問いは、信者でないメンバーの中にある（塩谷のアンケート参照）のだが、その解決は押し付けられるものではなく、自ら探っていくものとして「そこにある」のが、クワイヤという共同体である。教会ベースのクワイヤの特質は、集う理由が純粹に楽しむためでも、心の変化を感じるためでも、神を賛美するためでも、全て受け入れられるという点である。ゆえに、クワイヤの指導者はゴスペルのメッセージを皆が理解することを目標に置きながら、メンバー個別のニーズも大切に、信仰を持つ者も持たぬ者も一緒に歌って感動を分かち合えるよう、リードしていくことになる。これは、音楽教室のゴスペルクワイヤでは不可能なことであろう。

## 5.3. 世俗の音楽としてのゴスペル

前述の野澤（2006）で問われていたことだが、ゴスペルが歴史との相互作用によって変化し、21世紀に入って新しいスタイルが生まれているとの指摘を、どう考えるべきだろうか。北米における変化は本稿の範囲を超えるが、日本のゴスペルの今については、短く言及しておきたい。

今調査では取り上げなかったが、歌詞が日本語のゴスペル曲は、既に日本のクワイヤに定着しつつある。さらには、ラブソングや民謡などをゴスペル風にアレンジした曲も、登場している。ゴスペルに特徴的なコード進行や形式を持つ「世俗の曲」は、実は多く存在しており、それらがゴスペルと分類されることもある。指導者とメンバー（共にクリスチャンではない）+日本語の曲（歌謡曲のアレンジ）+チャリティコンサートが目的、といったクワイヤも多数生まれている。これはいわば、「黒人奴隷の、神への魂の叫び」というルーツを持たない、自分たちの言葉と文化に即

した(よって宗教色のない)ゴスペルクワイヤを作ろう, という動きである。例えば複数の拠点をもち総勢千名というクワイヤでは, 「ゴスペルは曲ではなく歌うその人自身」という信条から, ゴスペル以外の曲も歌っているという。この日本化されたゴスペルを, 形骸化した, 似て非なるものとするのか, あるいはゴスペルの文脈化による変種と見るのかは, 意見の分かれる所であろう。

#### 5.4. 21世紀の教会ベースクワイヤの課題

20世紀にメディアで取り上げられ, 注目を浴びたゴスペル音楽は, 大きく変化していく運命にあった。さらに今はインターネットの動画サイトで, 一番古い時代のゴスペルから, 今日行われたコンサートの模様まで観ることができる時代である。今後より多くのクワイヤで, ゴスペルの様々なかたち, 黒人霊歌から最近の「変種」までが受け入れられるようになることは確かである。これを書いている時点も変化の過渡期にあるとすると, 今後ゴスペルと呼ばれる音楽が, 発祥地北米のみならず世界各地で変化し, その変化がまた新たな変化を触発するということが十分予想される。日本の教会でクワイヤに集う人々も, より多様化したゴスペルのかたちが受け入れられることを期待するだろう。そのとき指導者たちは, 何がゴスペルなのか, その定義は何なのか, という問いの答えを迫られることになる。たとえ「教会で歌われてきた賛美がゴスペルである」という保守的な立場の教会クワイヤであっても, この多様化の流れを全く無視することは難しいのではないだろうか。

## 6. おわりに

今回は首都圏の一団体, 教会ベースの4クワイヤに対する調査であったため, その結果を一般化できないことも多くあった。その限界を踏まえたうえで, 日本の教会ベースクワイヤの現在と今後の可能性について, 私見を述べた。しかし地域や団体の特性によっては, 同様の調査を行っても異なる結果を生む可能性がある。今後は他地域・団体のゴスペルクワイヤとも交流を深め, さらに正確・詳細な全体図を描くことを目指したい。



## [参考資料]

- ヘイルバット, アンソニー 中河伸俊・山田裕康・三木章子訳 (2000) 『ゴスペル・サウンド』ブルース・インターアクションズ (Heilbut, Anthony [1971] *The Gospel Sound*. New York: Simon & Schuster)
- 門田修平 (2007) 『シャドーイングと音読の科学』コスモピア
- 塩谷達也 (2003) 『ゴスペルの本』ヤマハミュージックメディア
- 野澤豊一 (2006) 「変貌するゴスペル・ミュージシャンシップー主流教会とペンテコステ派教会間の相互関係から」『金沢大学人間社会環境研究』(12) : pp. 61-77
- (2011) 「ゴスペル誕生から現在まで」『ブルース&ソウル・レコーズ』(98) : pp.22-93. ブルース・インターアクションズ
- 三井徹・高比良望 (2001) 「ゴスペル人気が疑問視する合唱教育の意味と意義」『金沢大学教育学部紀要』(50) : pp. 1-10
- レヴィティン, ダニエル・J 西田美緒子訳 (2010) 『音楽好きな脳』白揚社(Levitin, Daniel J. [2006] *This is Your Brain on Music*. New York: Dutton, Penguin Group [USA] Inc.)
- レヴィティン, ダニエル・J 山形浩生訳 (2010) 『「歌」を語る』ブルース・インターアクションズ (Levitin, Daniel J. [2008] *The World in Six Songs*. New York: Dutton, Penguin Group [USA] Inc.)
- Brown, James D. (2001) *Using Surveys in Language Programs*. New York: Cambridge Univ. Press.
- Dornyei, Zoltan. (2001) *Teaching and Researching Motivation*. Eseeex: Pearson Education Ltd.
- Dornyei, Zoltan. (2003) *Questionnaires in Second Language Research*. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
- Nunan, David. (1992) *Research Methods in Language Learning*. New York: Cambridge Univ. Press.
- 『Hallelujah Gospel Choir (HGF) ウェブサイト』〈<http://hgfiapan.com/home.html>〉 2013.1
- 『ゴスペルサークル紹介マップ』〈<http://www.eyei.net>〉 2013.1
- 塩谷達也 「ゴスペルクワイアアンケートプロジェクト」『Hush Harbor — The House of Gospel』〈<http://www.hushharbor.net/book/q03.pdf>〉 pp. 1-15. 2013. 1
- 「日本にゴスペルを広める」『ラッカー・ゴスペル・ミニストリーウェブサイト』〈<http://www.ronruck.com/j/articles/19990425.html>〉 2013.1

# 要 約

## 【日本語要約】

# 柏木義円の教会論

山口陽一

柏木義円は非戦の牧師として紹介され、傑出した臣民教育批判、自らの属する組合教会の朝鮮伝道批判、昭和期までの軍部批判などにおいて注目されている。彼は37年と10ヶ月安中教会の牧師であり、38年と1ヶ月『上毛教界月報』を発行し続けた。地方教会の牧師として地域に根を下ろしつつ、主張は発禁処分を恐れずに貫いた。魂の救いと社会の改良を分離せず神の国のリアリティーを追求する柏木は、安中教会のみならず上毛諸教会との協働に心血を注ぎ、安中を「基督教町ト為シ」「清キ、正シキ、高キ町」とすべく福音の信仰に生きた人である。福音主義にして進歩主義、教会派にして社会派、伝道と祈りに熱心で人権感覚に優れる柏木の全体像を、小論ではその教会論から考察する。

柏木には「教会論」と題する晩年の論説があり、そこに彼の教会理解の核心が語られる。彼の論説と牧会に表れる教会観と実践はこの論説に収斂されている。柏木義円研究における画期的な業績を残した伊谷隆一は、柏木が同志社予備校の教師時代に井上円了との論争において残した「愚俗の信」という言葉に注目し、「愚俗」に柏木の思想の特質を捉えた。この頃、柏木は基督教共励会の評議員となり『共励雑誌』に論説を発表する。小論では安中教会赴任前の柏木の教会観を明らかにし、その展開を安中教会の牧会と『上毛教界月報』の論説において考察する。

柏木は、新島襄の精神の継承者として、再生された良心をもって生きる人々による自治教会をめざし、国家権力に対峙する神の家族としての制度的教会を尊び、福音喪失の社会的キリスト教とは一線を画しつつ、社会主義にも共感して地域に根ざした教会を形成した。

キーワード：柏木義円、安中教会、上毛教界月報、教会論、臣民教育、新島襄、良心

# キリスト教大学における震災ボランティア活動と宗教心の発達

## ミッション系学校におけるサービスラーニングの観点から

岡村直樹

本研究は、以下の3つの目標を掲げ、グラウンデッドセオリーを用いて実施されたものである。(1) 東日本大震災という歴史的大地震の被災地にボランティアとして足を踏み入れたキリスト教大学の学生の生の声を資料として残す。(2) ボランティア活動に従事した学生に起こった変化を、「宗教心の変化」という観点から分析する。(3) キリスト教主義大学の宗教教育という観点から、ボランティア活動の意義を検証する。研究結果は、James W. Fowlerの提唱する faith development theory (信仰発達論) 等を用いて分析され、信仰心の成長を促すボランティア活動は、キリスト教主義大学における宗教教育にとって非常に有意義であるという結論が見いだされた。

キーワード：東日本大震災，サービスラーニング，グラウンデッドセオリー，宗教心の発達，宗教教育学

# 神学大学による介護福祉士養成の意義

## 介護福祉士の専門性に必要な教育内容を中心に

中澤秀一

小論は、東京基督教大学神学部キリスト教福祉学専攻における介護福祉士養成の意義について明らかにすることを目的とする。

キリスト教福祉学専攻は2008年度に開設したが、これまでには「なぜ神学部で介護福祉教育なのか」「4年制課程にする必要はあるのか」、などの指摘がある。しかし、こうした指摘は介護を身体面の介助と捉えていることに由来しているように思われる。

本来、人の「生活世界」全体には身体面、心理面、社会面以上にスピリチュアルな面があり、介護は、これらすべてにかかわる支援なのである。そのため、援助を必要とする人に「生きる意味」を与えたり、自律・自己実現への支援をするためには上記の側面を含んだ総合的介護を学んだ人材を育てることが必要といえる。

本論では総合的介護を学んだ人材を「求められる介護福祉士像」とし、キリスト教福祉学専攻の教育内容の独自性について考察した。

その結果、キリスト教福祉学専攻では第1に、苦しんでいる「人間自身の傍らに立ちつつ彼を助ける」人材育成を行っていること。第2に、ケアの基本である「善いサマリア人」(ルカ10:25-27)が備えるべき専門的知識・技術習得に向けた教育を行っていること。第3に、「求められる介護福祉士像」の基礎学力習得に必要なリベラル・アーツ教育を行っていること。第4に、個人の尊厳やスピリチュアルケアに関わる宗教的、哲学的ニーズに関する教育を中心に行っていること。

すなわち、キリスト教福祉学専攻のクリスチャンソーシャルワーカーの養成は「ファッションとしてのキリスト教主義」ではなく、聖書を土台とした真の「ことばと行いによる宣教者」を養成することを目的とする機関なのである。

キーワード：東京基督教大学、求められる福祉、言葉と行いによる宣教

## 介護支援専門員に求められる実践能力の研究 II

### インタビューと事例の分析からの考察

井上貴詞

介護支援専門員の実践能力の構成要素のひとつである「自己統制」に焦点をあて、ミクロレベルに位置づけられると考えられた「自己統制」が実際の介護支援専門員の実践場面でどのように具現化されるかを探索的に研究した。自己統制の概念については、まず心理学や社会学の先行研究から概念検討を行い、多様な理論と分析概念として活用する社会学の視点である「自己の組織化」という知見を得た。

次に現場の介護支援専門員4名へのインタビュー調査と2つの実践事例の分析を行った。

インタビュー調査の分析結果から、実践のミクロからメゾへの広がり（自己の組織化）は、危機や困難にポジティブに対処しようとする時に立ち現われることが理解できた。また、それは、所属する機関にも影響されることが示唆された。

実践事例の分析においては、エコマップを使い、介護支援専門員と利用者をめぐる社会資源の相互作用を視覚化して考察した。その結果、介護支援専門員は、複合的な状況におかれるクライアント援助のために、時に環境に働きかけ、時にクライアントと共に悩むというスタンスの自在さと介護支援専門員をバックアップするシステムの重要性を確証できた。

介護支援専門員の能力としての「自己統制」は、ミクロレベルに留まらず、メゾーマクロレベルへと自己を組織化して展開していく「自己統制」が求められるのである。

キーワード：介護支援専門員、実践能力、自己統制

## フィリピン語の讃美歌シリーズ Papuri ! 及びそのテキストの傾向についての試論

宮脇聡史

当研究ノートは、1980年代以降現在まで発行され続けている福音派の現地語でのプレイズ（ポップス的な讃美歌）である Papuri! シリーズについて、そのあらましとテキストの特徴を概観している。アメリカの影響の強いフィリピン福音派の中で精力的に作られたこのシリーズは、同国の現地（語）音楽・芸術運動と連動しつつ、1986年の民主化後は社会的な関心をも視野におさめて毎年アルバムを発行しつつ人気を得、1990年代には一般のレコード会社からその名曲集のアルバムが4つ出るまでに至った。この試論では、このシリーズについてその背景等を概観するとともに、名曲集の曲調と歌詞の検討により、フィリピンで少数派のプロテスタント福音派の、しかも傍流であったフィリピン語の歌が異例の人気を博したことの意味を探っている。

キーワード：Papuri !, フィリピン語, プレイズ&ワーシップ, 芸術運動, ボーンアゲイン, 明るさ, 福音派, FEBC, ラブソング, 社会問題

# 教会ベースのゴスペルクワイヤ，その現在と未来

## アンケート及びインタビュー調査結果から

森 恵子

1995-2000年は、ゴスペルブームが日本を席捲した時期である。音楽教室やコミュニティセンターには多くのゴスペルクワイヤが作られたが、教会が自ら目的・目標をもってクワイヤを立ち上げ始めたのは、その少し後からであった。本稿では、まずゴスペルの歴史と日本でのブームの様子を概観し、日本人にとってのゴスペルの魅力を探る。その後、教会をベースとするクワイヤのメンバー・ディレクターへのアンケート・インタビューによる調査結果から、彼らの活動目的や目標について分析し、クワイヤの現状を述べる。そして最後に、教会ベースクワイヤの持つ意義について、さらに今後課題となりうる点について私見を述べる。

キーワード：ブラック・ゴスペル，スピチュアルズ，日本のゴスペルブーム，教会ベースのゴスペルクワイヤ，英語の発音，動機づけ



[Abstract in English]

## The Church Theory of Kashiwagi Gien

Yoichi Yamaguchi

Gien KASHIWAGI is known as an anti-war pastor and for his outstanding critiques of education promoting loyalty to the emperor, particularly his critique of his own congregational church's mission to Korea, and his critique of the military up to the Showa Period. Kashiwagi pastored Annaka Church for thirty-seven years and ten months, and he published *Jomo Kyokai Geppo* (Jomo Churches Monthly Newsletter) for thirty-eight years and one month. While being rooted in his local community, Kashiwagi presented his arguments with no fear that the newsletter might not be allowed to be published. Without separating the work of saving souls from that of improving the society, and while pursuing the reality of God's kingdom, Kashiwagi worked wholeheartedly with churches in the Jomo area and lived out his faith in the good news in order to make Annaka "a town of Christians," and a "holy, righteous, and exalted town." This paper will provide an overview of the life of Kashiwagi, who was evangelical and progressive, an advocate of both church growth and social justice groups, passionate in mission and prayers, and also an excellent advocate of human rights.

In his late years, Kashiwagi wrote an article entitled "On Church," in which we can find the core of his understanding of the church. This article is an epitome of his writings and views concerning church and pastoral practice. Ryuichi Itani, who has done excellent research on Gien Kashiwagi, noted Kashiwagi's phrase *Guzoku no shin*, "the truth in a foolish common person," in which Itani discerned the characteristics of Kashiwagi's thinking. Kashiwagi used this phrase in his debate with Enryo Inoue, when Kashiwagi was teaching at Doshisha Preparatory School. At that time, Kashiwagi was a councilor of *Kirisuto Kyoreikai* (Japan Christian Endeavor Union), and he published his article in *Kyorei Zasshi* (Kyorei Magazine). This paper will shed light on Kashiwagi's view of church before he was assigned to Annaka Church, and also on the development of his view by considering his pastoral ministry at Annaka Church and his article in *Jomo Kyokai Geppo*.

As a successor of Jo Nijima, Kashiwagi aimed for an autonomous church consisting of people with regenerated consciences, and he respected the institutional church as the family of God who stands against national authority. While drawing a line between his stance and social Christianity, which he viewed as having lost the good news, Kashiwagi nevertheless sympathized with socialism, and he built a church rooted in the local community.

Key Words: Gien KASHIWAGI, Annaka Church, *Jomo Kyokai Geppo*, Ecclesiology, Shinmin Kyoiku, Jyo NIJIMA, Conscience

# Earthquake Volunteer Work and Christian Faith Development

Naoki Okamura

In the aftermath of the 3-11 mega-quake in Japan, this grounded theory method study was conducted among Christian university students for the following objectives: 1) to document the raw voices of many volunteer workers, 2) to analyze the inner religious changes that occurred among the volunteers, utilizing the theory of “faith development” by James W. Fowler, and 3) to consider the significance of volunteer work in Christian higher education. This study reveals that volunteer work opportunities that challenge students’ faith development should be an important part of any Christian university’s religious education programs.

Key Words: earthquake relief, grounded theory, faith development, service learning, religious education

# The Significance of Training Care Workers at a Theological University: On the Education Necessary for Care Worker Expertise

Hidekazu Nakazawa

The purpose of this paper is to clarify the significance of training care workers within the Christian Social Welfare Program in Tokyo Christian University's Theology Department.

The major in Christian Social Welfare was established in 2008. Some have asked, "Why do social welfare education in a theology department?" Or "Why is a four-year program necessary?" However, these questions look at only one side of social welfare, namely, the side of physical care.

The entire human "world of life" has a spiritual side as well as physical, psychological, and social sides, and care work must attend to all sides. It is necessary, therefore, to raise workers who have studied care work holistically in order to share "the meaning of life" with those needing assistance, and in order to support their autonomy and self-actualization.

In this research, while viewing workers who have studied care work holistically as "ideal care workers," I have considered the uniqueness of the education offered through the Christian Social Welfare Program.

The Christian Social Welfare Program: (1) trains workers who "stand beside and support suffering people"; (2) provides education that equips students with the technical knowledge and skills that are foundational for meeting the basic standard of the "Good Samaritan" (Luke 10:25-27); (3) provides a liberal arts education that is necessary for acquiring the basic academic skills of "ideal care workers"; and (4) focuses on education concerning religious and philosophical needs that are related to the dignity of individuals and spiritual care.

The training of Christian social workers through the Christian Social Welfare Program is the only program in Japan that, based on Scripture, trains true "missionaries in word and deed," and not based on "Christianity as a fashion."

Key Words: Tokyo Christian University, Care Work Requirements, Mission  
in Word and Deed

# Competency Needed for Care Managers– Study II: A Consideration Based on Analyses of Interview Surveys and Practical Cases

Takashi Inoue

Focusing on “self-mastery”, one of the requirements for competency needed for care managers, this is an explanatory study on the process in which care managers may realize it in their practical care-management activities

First, to form a conceptual scheme of “self-mastery”, the reports of previously-published psychological and sociological studies were collected to conduct a retrospective study.

Second, analyses were performed through an interview survey given to four care managers in the field and through two practical cases. The analysis of the interview survey revealed that they expanded their practical activities from the micro-level to the meso-level (self-organization) in making an attempt to positively address critical conditions and difficulties at their discretion.

The analysis of the practical cases demonstrated that care managers tend to take a wide variety of stances. For example, they make appeals for supporting clients who are facing complicated scenes to their surrounding environments in some cases, or they share worries with their clients in other cases. The study also shows that establishment of a system for supporting care managers is essential.

Care managers will be expected to actively expand their “self-mastery”, one of the requirements of competence needed for care managers, from the micro-level to the meso- and macro-levels.

Key Words: care manager, competency, self-mastery, self-organization

## Preliminary Analyses of “Papuri !” Praise-and-Worship Series

Satoshi Miyawaki

These research notes overview the “Papuri !” series of Praise-and-Worship in local Filipino language, especially its background and some features of the lyrics. This series has been produced in a very energetic manner in the context of the continuing dominant influence of American Evangelical subculture on evangelicals in the Philippines. This movement, publishing an album almost every year, occurred simultaneously with the nationalization movements of music and arts at the national level, and after democratization in 1986, became more conscious of social concerns. It gradually became popular, and in the 1990s a secular company finally made 4 compilation albums. This research mainly deals with its characteristic musical styles and lyrics, and pursues the implication of the peculiar popularity of these Filipino evangelical songs, in spite of most people’s unfamiliarity with them, and the minority of Protestant evangelicals in the Philippines.

Key Words: Papuri !, Filipino language, Praise and Worship, Indigenous Art Movement, Born-Again, Joyfulness, Evangelicals, FEBC (Far Eastern Broadcasting Company, Philippines) , Love songs, Social Concerns

# Present and Future State of Church-Based Gospel Choirs in Japan: An Analysis of Questionnaires and Interviews Given to Choir Members and Directors

Keiko Mori

1995-2000 were the years of Black Gospel all over Japan, and the boom brought lively activities among new, amateur gospel choirs hosted by music schools and community centers. Then Christian churches gradually began their own gospel choirs with their own purposes and goals. This paper briefly summarizes the history of Black Gospel and the gospel boom in Japan, mentioning what attracted people attending gospel choirs. Then the focus is on the state of church-based choirs by analyzing results of questionnaires/interviews given to choir members and directors, who share their purposes and goals of choir practice. Finally the paper discusses the significance of church-based choirs and their possible challenges in the future.

Key Words: Black Gospel, Spirituals, Gospel Boom in Japan, Church-based Gospel Choirs, English Pronunciation, Motivation

## 『キリストと世界』第24号 寄稿募集要項

- 発行予定年月 2014年3月
- 募集論文など ①学術論文, ②調査報告, ③研究ノート, ④外国語学術文献の翻訳, ⑤学術書籍の書評, ⑥その他、いずれも未発表のものに限ります。
- 論文等の分量 図表・写真・注・文献を含み、前項①-③は24000字(英文10000 words)以内, ⑤-⑥は4000字(英文800-1600 words)程度。
- 紀要の体裁等 横書き, 脚注とし、日本語を基本としますが、英語の執筆も可能です。  
縦書きや逆横書きを必要とする場合には、改行して記述し、図表の形式で記載するなどの工夫をしてください(縦書きに横書きを掲載する場合と同様)。英文原稿の場合は著者の責任においてネイティブチェックを行った原稿を提出ください。執筆の際の要項は、寄稿受諾後にお送りする「キリストと世界執筆要項」をご参照ください。
- 執筆者の範囲 ①本学専任教員  
②本学非常勤講師。ただし、本学における講義科目と直接関連する主題に限ります。  
③共同研究者が①②に該当する場合には共同研究者による当該研究に基づく執筆ができます。
- 寄稿申込期限 寄稿希望者は2013年5月7日(火)までに寄稿申込書を提出してください(期限厳守)。  
①あて先:東京基督教大学紀要編集委員会事務局(担当:高橋)  
②記載事項 執筆者の氏名・ふりがな・所属・職名、論文等の種類、題名(仮題)、内容(200字程度で)、字数、使用言語  
寄稿申込者には、委員会で審査のうえ、5月末日までに寄稿受否の通知をします。寄稿受け入れの通知は掲載を保障するものではありません。

- 執筆提出期限 執筆者は2013年8月末日までに執筆要項に沿って完全原稿を提出してください(期限厳守)。
- 提出 eメール(ntaka@tci.ac.jp), CD-ROMなどによる電子送稿とします。  
古代語等、特殊な書体、数式、図表等を使用する場合は、執筆されたコンピュータ等の環境でプリントアウトしたハードコピーを添付してください(PDFは文字化けする場合があります)。
- 査読 提出された論文等はすべて委員会が委嘱した査読者により審査し、その結果に基づいて①掲載、②不掲載、③修正後に掲載のいずれかを委員会で決定します。
- 紀要の編集権 紀要の編集権は委員会にあります。編集著作物の著作権も委員会に属します。  
せっかく提出された論文等であっても、編集の都合上、掲載できない場合があります。
- 著作権と執筆者  
個々の権利 個々の論文等の著作権は執筆者に属しますが、紀要の著作権は委員会に属します。本紀要は、刊行後、大学ホームページにて公開いたします。  
個々の論文の内容に関する責任は執筆者にあります。  
原稿料・印税等はお支払いできませんが、執筆者には、原則として1件につき紀要5冊、別刷50部、抜刷のPDFデータを贈呈します。左記の部数より多く希望される場合は実費を徴収します。

東京基督教大学紀要編集委員会

Tel 0476-46-1137 / Fax 0476-46-1292 E-mail : ntaka@tci.ac.jp



## 編集後記

不慣れな編集委員でしたが、大過なく、例年通りに今年も紀要『キリストと世界』第23号を発行する運びとなり、ひと安心しております。ひとえに執筆して下さった先生方の御傍に負うところが大きいです。心から感謝いたします。とりわけ昨年度、最初の卒業生が巣立った福祉の先生方が精力的に励んでいらっしゃる様子を窺い知ることができるのは幸いです。他に特記すべきこととしては、賛美に関する論文、しかも専門が音楽ではない先生方から寄稿していただきました。結果、本号には福祉関係2本、賛美関係2本、キリスト教教育1本、日本キリスト教史1本の論文が収録されています。本学の教員の専門分野すべてが網羅されている訳ではありませんが、『キリストと世界』の名に恥じない幅広さだ、と自負しております。当初は本号に寄稿なさる予定でいらっしゃりながら、諸般の事情で今回は断念なさった先生方もいらっしゃいますが、ぜひ次号以降にお寄せくださることを期待しております。尚、編集などで、お気づきの点、その他、感想などございましたら、編集委員まで、ご連絡くだされば、幸いです。紀要『キリストと世界』を今後共よろしく願いたします。

紀要編集委員会 伊藤明生

## 執筆者紹介

山口陽一 (ヤマグチ・ヨウイチ)

東京基督教大学大学院教授, 同神学研究科委員長。金沢大学法文学部史学科、東京基督神学校卒業、立教大学文学研究科博士課程前期修了(組織神学)。東京基督神学校校長を経て現職。日本同盟基督教団正教師, 同理事。

岡村直樹 (オカムラ・ナオキ)

コロンビア国際大学 (B.A.), トリニティー神学校 (M.A. 宗教哲学), クレアモント神学大学院 (Ph. D. 宗教教育)。クリアモント神学大学院客員研究員 (2004-2006) を経て, 現在, 東京基督教大学大学院教授。日本同盟基督教団正教師, 福音主義神学会東部部会役員理事。

中澤秀一 (ナカザワ・ヒデアカズ)

佛教大学社会学部卒業, 兵庫教育大学大学院修士課程修了。湊川短期大学准教授を経て東京基督教大学准教授。日本介護福祉学会, 日本介護福祉教育学会, 日本キリスト教社会福祉学会。

井上貴詞 (イノウエ・タカシ)

東京基督教大学助教。日本福祉大学卒業。共立研修センター, ルーテル学院大学大学院博士前期課程修了。社会福祉学修士。日本社会福祉学会, 日本ケアマネジメント学会, 日本キリスト教社会福祉学会。

宮脇聡史 (ミヤワキ・サトシ)

大阪大学大学院言語文化研究科専任講師。東京大学教養学部教養学科卒業(国際関係論), 同大学院総合文化研究科(国際関係論) 修士・博士課程修了。東京基督教大学准教授を経て現職。専攻は東南アジア研究。

森 恵子 (モリ・ケイコ)

東京基督教大学専任講師。成城大学英文科卒業, バイオラ大学大学院(外国語としての英語教育学修士) 修了。大学英語教育学会 (JACET)。

2012年度 紀要編集委員会

編集長 伊藤明生  
編集委員 岩田三枝子  
菊池 実  
ショート ランドル  
中澤秀一  
(五十音順)  
編集事務 高橋伸幸

本誌の索引は国立情報学研究所のホームページCiNiiより検索できます。  
([http://ci.nii.ac.jp/vol\\_issue/nels/AN10371265\\_ja.html](http://ci.nii.ac.jp/vol_issue/nels/AN10371265_ja.html))

---

キリストと世界 東京基督教大学紀要 第23号

2013年3月1日発行

発行 東京基督教大学教授会  
東京基督教大学  
〒270-1347 千葉県印西市内野3-301-5-1  
TEL:0476-46-1137 FAX:0476-46-1292  
www.tci.ac.jp E-mail:ntaka@tci.ac.jp

印刷所 プリントバンク  
〒116-0002 東京都荒川区荒川5-1-1-1003  
TEL:03-5850-5337 FAX:03-5850-5338

発行部数 600部 定価(本体1,500円+税)

---

(発行者の許可なくして無断転載を禁ず)

Christ and the World is published annually in March. The subscription price is 1,500 yen  
Published for the Faculty of Tokyo Christian University  
301-5-1 Uchino 3-Chome, Inzai City, Chiba-ken 270-1347 JAPAN



Tokyo Christian University  
2013

XXIII

March 2013